

# 江戸板六行本「大字遊下本」の効用

——義太夫節・人形浄瑠璃文楽の現行本文の成立時期を辿る手掛かりとして——

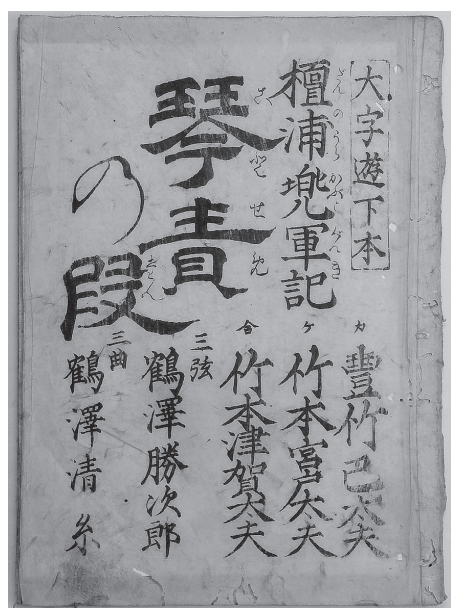
神津 武男

## はじめに

江戸の板元・西村幸助が創始した「大字遊下本」という浄瑠璃本について、人形浄瑠璃研究における資料的価値の高さを説明したい。

人形浄瑠璃文楽・義太夫節の現行本文には、初演本文と異なるものがいくつか残る。上演本文に異同が生じた過程やその成立時期を知るためには、往時の太夫たちが舞台上で用いた「床本」を確かめるのが第一の方法であるが、意外なことに当該藝能においては「床本」の継承は基本的に行われておらず、拠るべき資料は残っていない。しかるに床本（書写本であるのが原則）そのものではないが、木板で刊行された「抜き本」（いわゆる稽古本）の中に、往時の床本を写した例が稀にある。本稿に取り上げる「大字遊下本」がそれである。

〔写真1〕「琴責の段」前表紙



筆者はこれまで、「大字遊下本」に拠ることと現行本文の成立時期を究明できるのだということ、

『奥州安達原』三段目切「袖萩祭文」<sup>(1)</sup>  
『義経千本桜』三段目切「甕鮮屋」<sup>(2)</sup>

などの例を挙げて指摘している。本稿では、「大字遊下本」によって『本朝廿四孝』三段目切「勘助住家」の改作者を、三代竹本綱太夫であると初めて特定出来たことを例に挙げたい。人形浄瑠璃文楽・義太夫節の現行本文の成立時期を辿る手掛かりとして、「大字遊下本」は極めて有用な史料であることを再説することを本稿の第一の目的とする。

第二の目的は、「大字遊下本」の史料価値は、本文だけにあるのではなく、前表紙に載せる配役情報にもあることを述べる点にある。往時の興行の存在を知る上演記録の一次資料は「番付」であるが、江戸という土地の場合、ほとんど残らない。こうした現状にあつて、「大字遊下本」が伝えるところの配役情報は、江戸でその曲が上演されたことの、番付に替わる証拠となる、と筆者は考える。

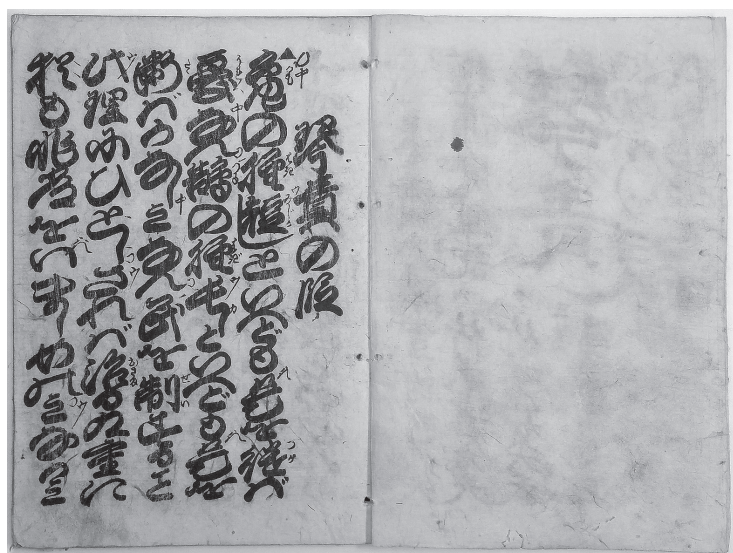
以上の二点を説くために、筆者がこれまでに把握したところの四十四機関四百二十六冊について、表I「大字遊下本」諸本リストにまとめた。同表では「大字遊下本」の残る八十作品について、No.01からNo.80までの作品番号を与えた。本稿では作品名の前に、この作品番号を付すので、適宜参照されたい。同表を作成してみると、いま見る史料の多くは後摺本で、開板当時の姿のまま残るものは極めて少ない、という点が明らかとなった。具体的には、開板の西村幸助の刊行本は稀少で、後継の板元である伊勢屋喜助の後摺本がはるかに多い。後摺本を経由せざるを得ないという点は、「大字遊下本」

を史料とする際の重要な問題であると考えるので、この板元の後関係性を明らかにすることを第二の目的としたい。

# 一、「大字遊下本」の書誌的特徴と創始者西村幸助

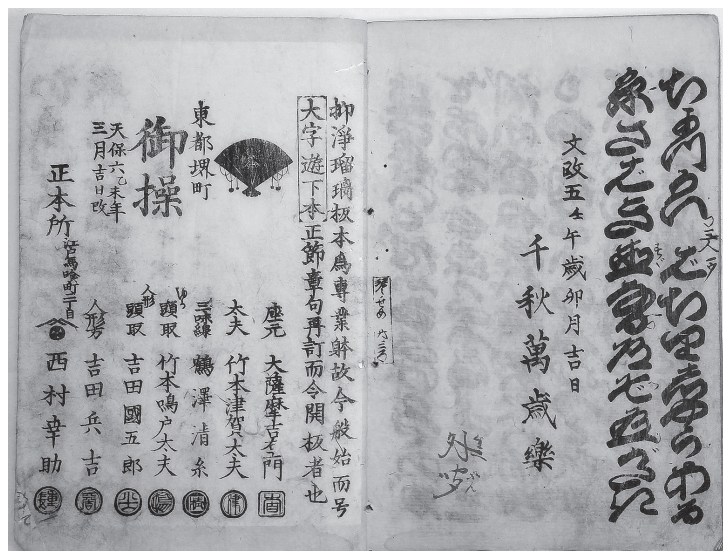
説明の都合上、冒頭に「大字遊下本」シリーズの書誌的特徴を、No.49『壇浦兜軍記』、内題「琴責の段」の、筆者蔵本を例に述べておきたい。まず前頁の「写真1」にみるように、前表紙に「大字遊下本」と特記するのが最大の特徴である。「遊下本」は伊勢屋喜助板の奥付にある振り仮名に拠って、「ゆかぼん」と読む。本文料紙と共紙（同じ紙質）ながら、前後に表紙を備える点が第二の特徴である。上方（大坂・京都）あるいは同時代の江戸で刊行された義太夫節の抜き本は、共紙の前表紙を備えるのみで、後ろ表紙を持たない。このため、終丁裏の末尾の本文は剥き出しの状態で売られたものののだが、「大字遊下本」シリーズは、後ろ表紙を備えて、本文を露出させない、という点に特徴を示した。床本の場合

〔写真2〕「琴責の段」内題



は、共紙の表紙を前後に備えるものなので、「大字遊下本」は表紙の体裁としては書写本である床本と近似することになる。あるいはシリーズ名に用字こそ違え、同じくユカボンを名乗ることからは、床本を意識してのことであつたかと考

〔写真3〕「琴責の段」終丁裏と奥付



〔写真4〕「琴責の段」後ろ表紙



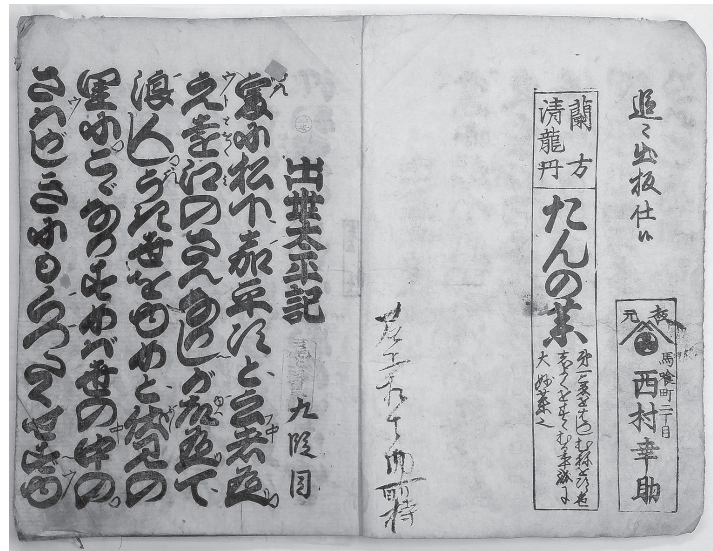
えられよう<sup>(3)</sup>。加えて、「写真1」と「写真4」にみるように、本の背に別紙を糊付けして包んでいる。同時代の抜き本が、仮綴じ（紙縫りで二箇所を綴じただけ）で売られたことに照らして、極めて丁寧な造本だった、と表現し得る。

〔写真3〕右頁・終丁裏の本文末にある年記は、通し本の年記が初演興行の初日を掲げたものであることの例に照らして、当該本に収録する曲を上演した興行の初日を示したものと推定する。左頁・奥付に板元名のほかに、上演座の責任者らの連名を載せる。「写真4」後ろ表紙は、通常は空白であるが、当該本の場合は、伊勢屋喜助が西村幸助の板木を継承した旨を告知する意味合いであろう、「板本改」としてその名を示している。

No.71『三日太平記』、内題「出世太平記 九段目」の筆者所蔵本では、「写真



〔写真5〕「出世太平記 九段目」内題



5) 前表紙見返しに板元名と取り扱う薬品の広告を、

〔写真6〕終丁裏の本文末の年記の下にも板元名を、

そして奥付にも板元名と薬品広告を載せる。やはり同

時期の、上方・江戸の抜き本では、板元の名を記す場

所は、前表紙の右下辺りの一箇所と定まっていること

に照らしてみると、西村幸助の場合、かなり自由なデザインを採用したもの、といえるであろう。

西村幸助の活動時期について、奥付六板の掲げるそれぞれの年記によって把握できる。リストの略称と

それぞれの年（西暦）月、提携する劇団の名前を示す。

〔西幸1〕 文政四年（一八二二）三月 結城座

〔西幸2〕 文政六年（一八三三）三月 結城座

〔西幸3〕 文政九年（一八二六）五月 肥前座

〔西幸4〕 文政十年（一八二七）七月 土佐座

〔西幸5〕 文政十年（一八二七）十月 土佐座

〔西幸6〕 天保六年（一八三五）三月 大薩摩座

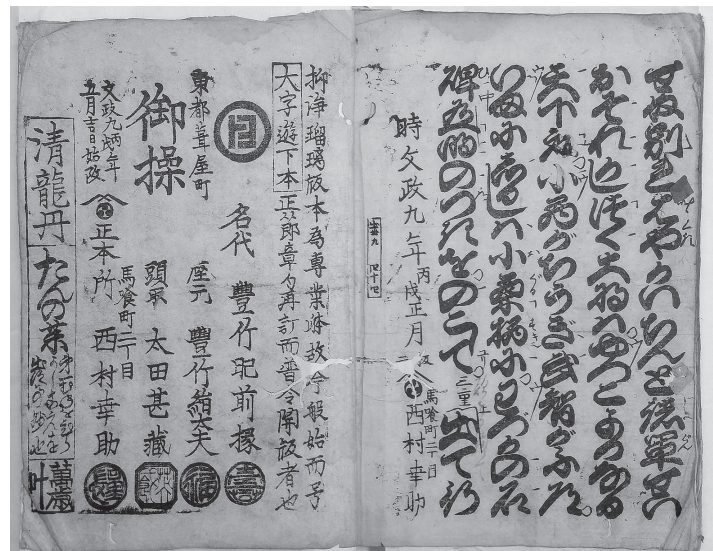
文政四年（一八二二）三月以降、天保六年（一八三五）三月の頃を中心とする時期に、西村幸助の大字遊下本の板元としての活動の盛時があったと考える。

西村幸助の名は、井上隆明氏『改訂・増補／近世書林板元総覧』<sup>5)</sup>に見えな

い。西村幸助は、いわゆる正式な本屋ではなかった。大坂の板元・紙屋与右

江戸板六行本「大字遊下本」の効用

〔写真6〕「出世太平記 九段目」奥付



衛門と、江戸の板元・三河屋喜兵衛との間で起こった、江戸板抜き本をめぐる

紛争の記録『義太夫本公訴一件』<sup>6)</sup>には、「地本問屋」

の大坂屋秀八・総州屋与兵衛、「同添組」の三河屋喜

兵衛と並んで、「双方仲間外二而 売薬屋渡世 西村

屋幸助」とする署名がみえる。本屋の営業権を正式に

は持たず（仲間組合には加入せず）、売薬屋が本業であつたと知られる。〔写真5〕

〔写真6〕の「青龍丹」がその主要商品であった。

『義太夫本公訴一件』には、西村幸助の創業年も記され

る。「天保四巳年正月廿六日」付の文書によると、西村幸助の出板権は、伊

勢屋治助から、文政二年（一八一九）に買い取ったものであるという（『義太夫

本株之儀は、四ツ谷南伊賀町伊勢屋治助与申者所持罷在候」「去ル文政二卯年中より引続

同人儀大病相煩渡世難相成」云々）。また右の文書からは、西村幸助そのひとが

天保四年正月の直前の頃に死去したことが知られる（『馬喰町式丁目弥右衛門店

幸助死失二付、後見平兵衛煩二付、代召仕秀五郎奉申上候」）。

No.56『夏浴衣清十郎染』、内題「寿連理の松 湊町のだん」は、前表紙に

掲げる配役から、文政二年（一八一九）四月・江戸結城座興行時の開板と考

えられる。西村幸助の板元としての創業年とも一致することから、これを大

字遊下本の最古の本と考えておきたい（ただし奥付に掲げる年記から、文政二年

開板本を二年後の、文政四年に後摺したもの）。

六代竹本染太夫の日記『染太夫一代記』第一の巻に、文政十年の記事として、次の記述がある。

このとき当地に西村幸助といふ浄るりの真金太郎ありしが、『日高川』を語りけるが、三味線は壹挺にてはこたへぬと申すゆゑに三味引語助、重太郎、勝造、吉左衛門、勝助、右五人一時にかたまりて西幸に『日高川』をかたらせ、三味を引きたてて、三味を引く。をはりに五人の三味線五挺一時に撥にて三味線の革をやぶりて、五人の三味引がいふに、「西幸さんの声にはかなはい」というてあきれた顔をすれば西幸はいよく頭に乗りて、この時よりなほ金太郎の位が高うなりしと聞く。

「金太郎」とは、技芸にうぬづれた素人を意味する隠語とされる。同記事によれば、西村幸助自身が義太夫節のアマチュア・伝習者であったと知られる。大字遊下本の造本の工夫は、自らも義太夫節を語る立場から、理想的な本の姿を追求した結果なのだ、と筆者は解釈したい。

## 二、「大字遊下本」の後継者・伊勢屋喜助

「大字遊下本」の創始者を西村幸助と捉えるのは、出板権（株）を譲ったという伊勢屋治助は文化三年三月の芝の大火に罹災して（前掲「天保四己年正月廿六日」付の文書に「寅年三月中之大火二面右板木焼失致」とある）、既に板木を失っていたためである。「大字遊下本」の板木を開いたのは、西村幸助であると考ええる。

また西村幸助の住所はいずれも「江戸馬喰町二丁目」とあって変化が無いのに対して、伊勢屋喜助の住所には「江戸横山町二丁目」のほかに、「東京横山町二丁目」とするものが残る。伊勢屋喜助の活動時期は、江戸期から明治期まで続いたことが住所表記の変遷から明らかである。活動時期の前後からみて、西村幸助が創始した「大字遊下本」を、伊勢屋喜助が継承して後摺したものと捉えられる。

伊勢屋喜助の創業年は明確でないのだが、浄瑠璃本板元としての活動は大坂屋秀八の板木を継承するところから始まるらしい。大坂屋秀八は『義太夫本公訴一件』の、「天保三辰年十一月十七日」付の地本問屋行事提出文書に、

「既二地本問屋之内二而も横山町式丁目大坂屋秀八義は、享保年中より八代之間右渡世向相続仕候。」と証言される。『義太夫執心録』には、「扱又御当地二おひて抜本屋の始は大坂屋秀八・西宮新六」と謳われる、江戸の浄瑠璃本板元の老舗であった。『義太夫本公訴一件』の頃には現役の板元としてみえるが、そののち廃業したものらしい。元来の板元名を削った位置に墨印で「大坂屋秀八・板元横山町二丁目伊勢屋喜助」と示した本がいくつか残り、これは伊勢屋喜助が、大坂屋秀八の板木を店舗ごと継承したことを示すものと考えられる。たとえば大坂板の五行本で同様の例をみるならば、天満屋玉水源治郎の板木・屋敷地までを継承した紙屋与右衛門は、板元名を埋木して改めたので、前掲【写真04】の「板本改」といい、右の墨印といい、権利の切り替えに当たつての、伊勢屋喜助の態度は簡略である。おそらく伊勢屋喜助は、大坂屋秀八の後継店として営業を始め、次いで西村幸助の大字遊下本を継承したものと推定する。

前掲『改訂・増補／近世書林板元総覧』は、伊勢屋喜助について「嘉永五年四月の月行事（地本草紙問屋名前帳）」と記す。<sup>⑫</sup>「大字遊下本」では、No.35『花王草紙楓短冊』、内題「花王草紙楓短冊 三の切」が、配役から嘉永六年（一八五三）正月・江戸深川八幡社内興行時の開板と考えられる。既成の板木の後摺ではなく、伊勢屋喜助自身によって開板されたものとしてはこれなどが早いものか、と考える。

同時期の大坂板五行本では、出板権の継承につれて抜き本の板木は順次改刻され、なおかつ丁数が漸次増加していくのであるが、大字遊下本の場合は、西村幸助の板木をそのまま使用して後摺したものである。

「大字遊下本」の現存本を板元別に数えると、西村幸助板は三十二冊（七%）、伊勢屋喜助板は二百九十三冊（六十八%）、板元名を記載しない本は七十四冊（十七%）、板元不明のものは二十六冊（六%）、となる。ここで注目すべきは板元名を記載しない、いわゆる無刊記本の存在である。

筆者はこれまで、前述する権利の切り替えを墨印で告知する伊勢屋喜助の姿勢（その押し忘れ）に関連するものと捉えてきたが、西村幸助自身が正式の本屋ではないことから名前を明示できないためではないか、と思ひ至った。



『義太夫本公訴一件』の前掲文書<sup>(13)</sup>には「地本□屋与申は壹枚絵・草草紙問屋、同添組与申は千代紙・絵半切・菓子袋之外板行物は不相成取究二候」と、所属する仲間によって営業品目・出版物の種類が規定されていたことが知られる。本屋仲間に加わっていない西村幸助が抜き本を出版すること自体が違法なのである。

無刊記本は江戸時代、本屋仲間としては厳に戒められる違法行為なのだが、そもそも本屋でない西村幸助にとつては、違法出版物に名前を明記すること自体を避けたもの、と解釈することができようか。殊に当主西村幸助が死去した天保三年末から天保四年正月の頃、大坂の浄瑠璃本板元との江戸の三河屋喜兵衛との係争に関連して奉行所の取り調べが続いた。当該係争は、天保七年（一八三六）三月に和談となるが、この係争に関連して名前を秘したものとすると、天保三年の出訴から天保五年頃までの時期、と推考される。西村幸助の刊行と考える場合には活動の後期に当たり、また伊勢屋喜助の刊行と考える場合にはその活動の初めの頃と捉えることとなる。いづれにせよ両者の活動時期の間に位置すると推考されるので、(26)頁のリストでは西村幸助↓無刊記本↓伊勢屋幸助という順序で配列した。

### 三、上演記録としての「大字遊下本」の配役情報

表I「大字遊下本」諸本リスト」には、四百十四冊の所在と基本的な書誌を、「本外題」（正式なタイトル。初演の作品名を採った）ごとにまとめた。現在「大字遊下本」を八十作品百四十一段について確認している。

この内、前表紙に掲げる「配役」もしくは本文末の「年記」によって上演年時を特定あるいは推定可能なもの——五十二作品九十三段——について、(13)頁下の別表A「大字遊下本」配役情報 上演年時順一覧（以下、別表と略称する）に、五十一の各興行ごとにまとめて、興行の上演年月順に並べた。別表では、【】付で通し番号を与えたので、見出しとして参照願いたい。

別表Aに掲げる五十興行の内、『義太夫年表 近世篇』によって興行の存在が既に知られていたものは十四である（【01】【04】【08】【16】【19】【20】【26】【27】【34】【36】【37】【39】【49】【51】）。残りの三十七が、「大字遊下本」によって、

興行の存在が新たに推認されるものである。

ここで年次考証の手順を説明したい。近世期の、人形浄瑠璃の番付では、太夫については担当の段・役場を、人形遣いについては担当する役名を具体的に示す一方で、三味線弾きについては所属する人員の連名を示すに留まる。基本的に三味線弾きがどの段を弾くのは非公開情報である。このため「大字遊下本」が前表紙に掲げる太夫と三味線弾きの配役については、第一に太夫の出演段を既刊記録（『義太夫年表 近世篇』。以下『年表』）で該当するものの有無を確かめる。該当するものがあつた場合、三味線弾きがその興行に出演していること（三味線弾きの名前が連名にみえること）を確かめる。太夫の役場が該当し、三味線弾きが同座していたならば、該当する「大字遊下本」の配役を、当該興行の番付に一致するものと認定する、というのが考証の順序である。

【01】については最古の本として(3)頁に触れたので、【08】を例に述べると、No.08『絵本大功記』の、二ツ目切「本能寺」の豊竹若太夫、七ツ目切「鷺の森」の竹本宮戸太夫、十段目切「尼崎」の豊竹巴太夫は、文政五年（一八二二）正月二日初日・結城座『絵本大功記』興行で、各々該当する段を担当している。加えて、「本能寺」の鶴沢市造、「鷺の森」「尼崎」の鶴沢勝次郎は、ともに当該興行の連名に名前がみえる。故に、右の三冊は、当該興行に関連して開板された、と考証するのである。

他方、既刊記録類に該当するもののなかった場合には、太夫や三味線弾きの出演歴などを調べて個別的に年代を推定しなければならない。しかるに右のように十四興行十七作品二十一段については番付の裏付けが得られるのであり、残りの三十七興行三十六作品六十六段についても、今後に番付の所在調査が充実したならばきつと対応する興行が確認されていくであろうと推定される。この推定から進んで「大字遊下本」の配役情報を、現時点においては番付の欠を補う、上演記録の二次的な存在として位置付けたい。

別表B「大字遊下本」配役情報 名前別索引（以下、索引）は、別表Aの配役を、太夫・三味線の各自の名前ごとに並べたものである。初代豊竹巴太夫を例に述べると、同人が残した「大字遊下本」は十三冊を数える。番付によって裏付けられるのは【02】【08】の二冊のみで、『年表』の収録範囲で

は初代巴太夫の江戸滞在は文政四年前半から文政五年正月の頃の時期を中心として捉えることになる。番付の裏付けを得ない残り十一冊の内、「大字遊下本」の本文末の年記で興行の年月の判るもの六冊五興行【03】【04】【09】【10】【11】を加えると、文政五年四月まで出演したと特定できる。残りの、年記を持たない五冊三興行は、江戸滞在中で出演記録が確かめられていない空白期間、すなわち文政四年後半の頃のものとして推定した。

索引で判然とする点は「大字遊下本」に記録された、各人の活動時期とその語り物である。各人の経歴の中で（江戸を離れたのちであっても、紋下（二座の代表者）の地位を占めたことのある、主要な太夫を挙げてみる。上方に活動の拠点のあったのは、次の六人。

○初代豊竹巴太夫 文政四年春 — 文政五年四月

○三代竹本綱太夫 文政七年夏 — 文政八年三月

○四代竹本綱太夫 文政七年夏 — 文政十二年二月

竹本播磨大掾 文政八年正月

三代竹本筆太夫 文政八年正月

○五代竹本染太夫 文政十年三月 — 天保十三年二月

江戸に拠点のあった太夫としては、次の三人。

○初代竹本宮戸太夫 文政四年三月 — 文政十二年二月

○初代竹本津賀太夫 文政四年 — 天保六年四月

○初代竹本播磨太夫 文政八年正月 — 嘉永六年正月

頭に○を付した人物は、「大字遊下本」によって出演記録が新出したもの。紋下という枢要の地位にある太夫の活動であっても番付だけでは網羅されず、「大字遊下本」によって新たに知られる情報があった。人形浄瑠璃の歴史研究の基礎となるべき、上演史を辿るという基本作業が番付を追うだけでは十分には満たされないのだ、という点を強調しておきたい。

ふたたび別表Aを参照されたい。五十一興行の内、【01】から【44】までの四十四興行は文政、【49】と【50】の二興行は天保、【51】の一興行は嘉永、【45】から【48】の四興行は年号を絞り切れぬ分である。実に八十六%が文政年間の記録である。

前々節に述べるように、板元の西村幸助は天保四年正月直前の頃に死去するが、奥付「西幸6」には「天保六乙未年三月吉日改」の年記を掲げ、大薩摩座の太夫らの連名を示している。このことから二代幸助においても「大字遊下本」シリーズの継続は企図されていたと考えられる【50】は天保六年四月興行時の開板。しかし【45】から【48】を二代幸助の開板と数えてみるとしても、【45】から【50】の六興行で、多く見積もっても十二%に留まる。「大字遊下本」の新たな開板が二代幸助の時に止む理由としては、天保八年五月の、二日に初代津賀太夫、二十七日に初代宮戸太夫、という江戸の紋下太夫の相次ぐ死や、天保の改革による混乱などの要因を想定するべきだろうか。

前節に述べるように現存本の内、西村板は七%、伊勢屋喜助板は六十八%を数える。ここからは「大字遊下本」には大きな需要があつて、西村以後にも長く増摺されたことが知られる。いわば初代幸助が開板した段・書目だけで、二代幸助やのちの伊勢屋喜助までの商売が成り立っていた、といえるのである。二代幸助が新たな投資を伴う開板に積極的には進まなかった理由としては、初代幸助の開板分で需要が満たされていた可能性もあろう。いずれにせよこれらの推論は、あくまで現存本にみる限りであつて、今後さらなる資料の発見、調査によって事例の積み増しを図って、再考したい。

#### 四、上演記録としての「大字遊下本」の本文

前節では、前表紙の配役について取り上げたが、本節および次節では本文について触れたい。基本的に「大字遊下本」の本文は、前表紙の配役に掲げられた太夫に所属する上演本文である、と捉えるのであるが、配役と本文との関連を考えるに当たって、

(1) 本文は同一で、前表紙の配役が異なる (No.02「沼津」、No.70三段目中)

(2) 配役は同一で、本文が異なる (No.24「順礼」、No.71「松下住家」)

という、二種類の異例について触れたい。

(1) の例は、のちの興行で再演された際に、本文については既成の板本を増摺して、前表紙のみ新刻したものである。同例では「再演時の本文を反映しているのか」という疑問が生じるが、上演本文に変化がないので板本を



襲用したのだ、と筆者は解釈している。

(2) の例は、掲げる配役に変化は無いが、本文の収録範囲が異なる。

【26】No.24『傾城阿波の鳴門』ハツ目「順礼」は、切の本文「へ道へ立ちかへる。跡打ながめ女房が。」から収めた本が最初、その前に端場の本文二丁(丁付「鳴門ハツ目口ノ一」「鳴門ハツ目口ノ二」)を置いて、もとの内題を削って(丁付「順礼壹」表丁の一行目に)、端場の終わりの文「跡からと。言イ捨出る町チ飛脚もと来し」を埋木したのが改訂本である。前表紙の配役の通り、三代筆太夫が担当する切の本文のみを載せたところに、口の竹本菅太夫が担当する本文を追加したものである。

【33】No.71『三日太平記』九ツ目切「松下住家」は、端場・切と丸一段で収録したが、切の本文だけに絞り込んだ。竹本岡太夫が担当する端場の本文は、冒頭の十三丁余あつて(丁付「出世九壹」)「出世十三」と、「出世九十四」丁表(二行半)、続けて初代津賀太夫が担当する切の本文を収めた本が最初のもの。改修板は端場の文章を除いて、「出世九ツ目切十四」丁を新刻して、切の本文「へ一ト間へ入りにける。跡に心(は脱)さつきやみ。」から始めた。

配役を載せないが端場の本文を追加したNo.24「順礼」と、配役を載せるが端場の本文を削除したNo.71「松下住家」は、正反対の改訂作業を施している。これらの改訂作業が読者の需要に応えるためであったならば、統一的な、同じ方向に編集されるであろう。特に(2)の例が示すのは、おそらくは切を語る太夫の意向に忠実に対応しようとした、板元の姿勢である。

大坂板五行本が通し本(初演本文)を写したもので、上演本文の変遷を反映する例は少ないのに対して、「大字遊下本」が、通し本の写しに留まらず、当時の上演本文そのものを積極的に反映したことから、(2)の例は同一の方針に基づくものだと考えられる。

『義太夫本公訴一件』「天保三年十一月十九日」付、西宮新六提出文書は、<sup>(14)</sup>通し本と抜き本の違いを奉行所へ説明したものであるが、ここに「追々太夫共夫々之我流節文句等増補致、差加候義も端本には数多有之候」とあって、江戸板の抜き本とは通し本の写しではないことの特徴として、後年の太夫たちがそれぞれ我流に増補した節や文句を差し加えている点を掲げた点に注目

江戸板六行本「大字遊下本」の効用

したい。

同じく「天保四巳年正月廿六日」付の、西村幸助提出文書には、<sup>(15)</sup>「元来私方渡世仕来候本は、古来御当地刻板二而、操芝居太夫共浄瑠璃文句好二より刻板仕候義二而、全重板・類板等二は決而無御座候」と、操芝居や太夫らの「浄瑠璃文句」(上演本文)をその「好により刻板」したものだ(故に、重板・類板には相当しない)との証言が残る。

また「天保三辰年十一月晦日」付、地本問屋行事提出の文書には<sup>(16)</sup>「三段目之切・五段目之切与申、其場相勤候太夫共より種本を以頼来候」云々とあって、抜き本は通し本から引き写したものでなく、太夫らが持ち込んでくる「種本」から本文を起こすのだと証言している。

従来これらの記述は、大坂の板元が保有する通し本の板株から、江戸の抜き本の出版権を守るべく考案された法廷戦術のように捉えられてきたと考えられるが、他の板元にはその側面はあるとしても、少なくとも西村幸助の刊行する「大字遊下本」について見る限り、真実の表明と理解することができる。

前述するように西村幸助自身が浄瑠璃本の板元としては稀なることに、義太夫節の稽古人でもあった。義太夫節の太夫や三味線たちと、いわば公私ともに交流がある、彼なればこそ可能な出版物なのだと考えられるであろう。

宝暦十二年(一七六二)初演「奥州安達原」三段目切「袖萩祭文」は、初演本文そのままだではない。「大字遊下本」に記録された、初代豊竹巴太夫の改訂本文を祖型として伝承されたことを、近年明らかにしたものである。<sup>(17)</sup>

また延享四年(一七四七)初演「義経千本桜」三段目切「甕鮓屋」は、初演興行中に本文の改訂が行われたため、通し本自体に二種の本文が残る。近代の伝承で断絶があり、江戸時代から大正期にまで行われた上演本文が判らなくなっていたが、初代巴太夫の「大字遊下本」の出現によって、その師・初代豊竹麓太夫と巴太夫の二代において行われたと考えられる本文が独自の改訂本文であったこと、および現行本文の祖型であること、が判明した。<sup>(18)</sup>

「袖萩祭文」「甕鮓屋」は、義太夫節・人形浄瑠璃文楽の現行本文の祖型を「大字遊下本」が収録する本文に確認できた事例である。江戸の本屋が勝手に作った独自本文を、本場・大坂の本流たる人形浄瑠璃文楽がこんにちに継

承するとは考え難い。本場・大坂の本流の真ん中であって、最高権威者である紋下太夫が新案し実際に語った本文であつたればこそ伝承もされ、こんにちの現行本文となるのだ、と筆者は考える。このように考えて、筆者は「大字遊下本」を、当時の床本を写したものの、江戸時代の上演本文の記録だと判断するのである。

初代巴太夫が「大字遊下本」として遺した十三段の、直前の頃(寛政・享和・文化・文政年間)の上方での上演状況をみると、次のように分類できる。

〈初代麓太夫が初演もしくは再演した曲〉十曲

- 【04】No. 19 『鎌倉三代記』七段目切
  - 【05】No. 16 『仮名手本忠臣蔵』大序〈切〉
  - 【05】No. 16 『仮名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
  - 【05】No. 16 『仮名手本忠臣蔵』九段目〈切〉
  - 【06】No. 44 『太平記忠臣講釈』七ツ目「重太郎内」
  - 【08】No. 08 『絵本大功記』十段目切「尼崎」
  - 【10】No. 77 『義経千本桜』三段目切
  - 【11】No. 49 『壇浦兜軍記』カケ合
  - 【09】No. 61 『花柳会稽褐布染』四ツ目「官次郎切腹」〈切〉
  - 【09】No. 80 『和田合戦女舞鶴』三段目切「市若切腹」
- 〈初代巴太夫が再演した曲〉二曲

【02】No. 19 『奥州安達原』三段目切

【03】No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈妹山〉  
唯一、【07】No. 79 『蘭奢待新田系図』三段目切のみは、麓太夫・巴太夫の

上演は確認できないが、巴太夫が紋下を勤める文政元年五月・大坂いなり境内興行は『蘭奢待新田系図』の通し・立て(「大序より三だん目迄」)であつた。

初代巴太夫が江戸結城座で次々と手がけた演目のほとんどは、師・初代麓太夫の後継者として継承した、麓太夫所縁の曲を中心に構成されたものであつた。これらは巴太夫自身も得意とする曲であつたと考えられるが、師弟であるばかりでなく麓太夫の女婿でもあつた巴太夫の、師風の忠実な継承者たることを期待された境涯というものがここに理解出来るように思われる。

初代麓太夫・初代巴太夫の活動として、もつとも重要と筆者が考えるのは、竹本座初演曲を豊竹座の曲風に改めた(アレンジを加える)という点である。これは『義経千本桜』『甕鮎屋』を例として既に指摘したが、右の十三段の内、『鎌倉三代記』『仮名手本忠臣蔵』『太平記忠臣講釈』『壇浦兜軍記』『奥州安達原』『妹背山婦女庭訓』『蘭奢待新田系図』が竹本座初演で、残り『絵本大功記』『花柳会稽褐布染』『和田合戦女舞鶴』が豊竹座初演である。選曲傾向の上に、ふたりの活動の方針が明確にみえている、と考える。

文政期、初代巴太夫と覇を競った竹本播磨大掾は、文政八年正月・江戸大薩摩座興行で、『増補競伊勢物語』の通し・立て(「三段目迄」)に、付け物として上演した、【26】No. 25『けいせい恋飛脚』下の巻「新口村」を遺した。播磨大掾の活動には(初代巴太夫とは反対に)、豊竹座初演曲を竹本座の曲風に改めること(「紙子仕立両面鑑」「大文字屋」、『染模様妹背門松』「質見世」)があり、【26】はこの路線の上にある。

江戸へ下った太夫らは、旅へ出た先での不評は芸能者としての不名誉となることから、好評を得ることを願って、自身がもつとも得意とする曲を選んだであろうと考えられる。初代巴太夫や播磨大掾の例からは、「大字遊下本」の選曲には、前表紙の配役に載る個々人、特に太夫の意向がよく反映されているものと推定できる。

## 五、三代竹本綱太夫と『本朝廿四孝』三段目切「勘助住家」

明和三年(一七六六)初演『本朝廿四孝』三段目切「勘助住家」も、初演本文によらず、改訂本文で伝承された曲である。筆者架蔵の『本朝廿四孝』通し本は四代豊沢広助の旧蔵で、天保五年(二八三四)七月・大坂いなり境内芝居『本朝二十四孝』興行(当時の文楽の芝居)時の朱譜の記録があり、これが現行本文の最古の例である、と指摘していた<sup>19)</sup>。今回、同曲の「大字遊下本」の出現によって、改訂者は三代竹本綱太夫であり、改訂時期は江戸結城座の上演時(文政七年・文政八年三月)以前であろうことが判った。

(53)頁以下の「表2『本朝廿四孝』三段目切「勘助住家」対校表」に、通し本(初演本文)と「大字遊下本」(改訂本文)をあわせて翻刻したので、適宜



参照されたい。改訂作業は三十一の段落の内、二十五段落で行われている（改訂の無い段落は六段落に留まる）。改訂作業はほぼ全体に及んで、二百十六箇所を数える。大半は間投詞や接尾語を追加したもので、登場人物の発話をより口語化させる目的であったと考えられる。

「大字遊下本」と、現行本文の一致する箇所を、番号で示す。

段落No. 箇所番号

02	*05' *08' *11' *19' *20' *28
03	*01' *08' *09' *20' *22' *25' *26
05	*04
06	*01
07	*02' *03' *04' *09' *12' *15' *22' *25' *31
08	*01—*05
09	*02' *04
13	*04' *05' *10
17	*01
20	*01' *03' *04
21	*01' *04' *06—*10
22	*01—*02
23	*03—*05' *07' *09' *12' *14—*15
24	*02—*04' *06—08
25	*01' *04—*06
26	*01' *03—*06' *08
27	*01' *05—*07' *09—*14
28	*01
31	*01—*02' *04—*06' *08—*10

現行本文にはこの他に「大字遊下本」と通し本を並存させるなど（段落No.20の\*01や、段落No.23の\*15）、再び通し本を採る箇所があるので、「大字遊下本」は祖型であって、以後の段階でこんにちの姿に定着したものと解釈する。

段落No.23の、破線で前後を区切った箇所は、老母と勘助の切迫した応酬の

件であるが、「大字遊下本」は通し本の前後を入れ替えて組み立てている。現行本文はさらに前後を組み替えるので、通し本とも「大字遊下本」とも異なる文章とみえるが、「コリヤ（恩をしらねば）」「ア、コレ／＼（母者人（よふ思ふても）「イヤ／＼モウ／＼」（此主従）」「カ又（たとへ）」の間投詞や接続詞を引き継いでいることから、「大字遊下本」の改訂本文を再編集して現行本文が成立したことは確かである。

三代綱太夫の事歴は、本誌前号掲載の拙稿『時雨の炬燵』成立考——三代竹本綱太夫の添削活動について<sup>20)</sup>にまとめているので、詳細はこれに譲る。同人は京都のひとで、前職に因んで「鮎屋」と通称された。初名二代浜太夫、次いで三代紋太夫。師・二代綱太夫が文化二年（一八〇五）八月十六日に死去したあと、名跡を相続して文化三年（一八〇六）十一月・京都寺町道場芝居興行で、三代綱太夫と改名したもの。死去年は不明であるが、天保三年初めの出演記録を最後として、引退後には「竹本三綱翁」を名乗った。文化九年、文政元年に断続的に就任した例もあるが、文政五年（一八三二）四月・大坂いなり境内芝居（当時の「文楽の芝居」）興行以降には継続して紋下となった。文政・天保期の上方劇壇の、主要な太夫のひとりである。また綱太夫の代々としては初めて紋下に上り詰めたひとで、同人の紋を「綱太夫」の名跡とともに現代に引き継ぐなど、後代に至るまで影響を残した偉人である。

三代綱太夫は江戸へ下って、文政七年（一八二五）は大薩摩座、文政八年（一八二六）は結城座、に出演した。同人が「大字遊下本」として残したのは、次の四曲である。

【25】No.40 『関取千両幟』二段目

【27】No.47 『田村鷹鈴鹿合戦』四段目切「平治住家」

【28】No.67 『日吉丸稚桜』三段目切

【29】No.69 『本朝廿四孝』三段目切

【25】No.40は三代綱太夫自身による添削である。明和四年（一七六七）初演『関取千両幟』二段目「岩川内」を、文化十二年（一八一五）三月・京四条道場芝居興行で、『関取千両幟』「猪名川内」と改題再演したもの。

【28】No.48は二代綱太夫の添削である。寛保元年（一七四一）初演『田村鷹

鈴鹿合戦』四段目切「平治住家」を、寛政八年（一七九六）九月・大坂北堀江市之側東側芝居『勢州阿漕浦』『平治住家』と改題したもの。

「平治住家」「猪名川内」の二曲は師弟が得意とする添削作品を、弟子である三代綱太夫が江戸で披露して「大字遊下本」に遺したものであるが、これは師・初代麗太夫（義経千本桜「甕鮮屋」と弟子・初代巴太夫（奥州安達原「袖萩祭文」）の場合も同様である。これらの例から理解できるのは、既成曲を添削して再演するという活動は寛政期以降の太夫たちに共通して行われた点であつて、この時代の特徴として捉えるべきなのだと筆者は考える。

また三代綱太夫は「猪名川内」の他にも、『時雨の炬燵』（原題「置土産今織上布」）「紙屋」、『増補艶容女舞衣』（原題「艶容女舞衣」）「酒屋」、『薰樹累物語』（原題「伊達競阿国戯場」）「土橋」を添削・再演したことは、前掲拙稿『「時雨の炬燵」成立考』に既に指摘したところである。三代綱太夫が『本朝廿四孝』『勘助住家』を添削・再演した、ということは充分にあり得ることと理解できる。

三代綱太夫の添削とすると、さらに納得のいく点がある。それは、こんにちに至るまでなぜ彼の添削と気付かれなかったのか、という疑問に答えられるから、である。

拙稿『「時雨の炬燵」成立考』併載の、「三代竹本綱太夫出演年譜（稿）」では、番付に基づいて三代綱太夫の出演記録をまとめたものであるが、【29】No.68、【30】No.70の二段は（関取千両幟）『勢州阿漕浦』の場合と異なつて、江戸で手がける以前の時期に、三代綱太夫による上演記録を確認できない。前節に指摘するように「大字遊下本」は「好評を得ることを願つて、自身をもつとも得意とする曲を選んだ」と考えられる。江戸で初めて披くとは考えられず、活動の本拠地で成功した体験済みの曲を選んだはずだ、と推考する。ここで問題となるのは三代綱太夫の本拠地で、彼は京都を活動の拠点としていた。京都の番付は、大坂に比べて残存状況が悪く、このためその活動の総体を捉え難い。たとえば彼が三代綱太夫と改名した最初の興行の番付は、近年ようやく新出したものだった<sup>(2)</sup>。また前名・三代紋太夫を名乗った時期に、京都で『時雨の炬燵』を刊行させたのだが、その番付はいまなお見付かつて

いない。これらを勘案して、三代綱太夫は『本朝廿四孝』『勘助住家』を京都の興行で手掛けていて、添削はそれに行われていたもの、と推考するのである。

以下には、三代綱太夫による「勘助住家」添削本文が、こんにちの伝承系統へと定着する過程に関して、要点を掲げる。

第一に、「大字遊下本」に三代綱太夫と並んで署名する「豊沢扇左衛門」は、文政九年（一八二六）正月・大坂いなり社内興行の番付で「仙左衛門事豊沢広助」として、二代広助と改名する。同人の出演記録は、文政十年まで。以後は京都へ住んで、天保十年（一八三九）に三代広助へ名前を譲つて、「広々翁」と名乗ったひと。生没年未詳。

第二に、三代綱太夫は文政十一年（一八二八）に、三月名古屋、四月伊勢で「勘助住家」を語る（三味線未詳。四代鶴沢寛治は両方とも同座）。

第三に、四代竹本綱太夫（当時むら太夫）は、天保元年（一八三〇）十月・大坂いなり境内芝居『本朝廿四孝』興行で「勘助住家」を語る（三味線竹沢兵吉。同人は初代豊沢広助の門弟）。

第四に、前述の天保五年（一八三四）七月・大坂いなり境内芝居『本朝二十四孝』興行で、「勘助住家」を勤めるのは四代住太夫・四代鶴沢寛治である。四代住太夫は【30】No.70の三段目口・三段目中にみえる「竹本此太夫」そのひとである。また当該興行で四段目切「十種香」は、四代綱太夫（当時むら太夫・三代広助（当時仙左衛門）が勤めた。

以上の四点から、三代綱太夫とその門弟である四代綱太夫と、これとともに演奏したかもしくはその演奏を実際に聴き得た太夫（四代住太夫）や三味線弾きたち（四代寛治、三代広助）によつて、大坂いなり境内芝居（当時の「文楽の芝居」。こんにちの人形浄瑠璃文楽に繋がる本流の劇場）において、三代綱太夫による添削本文での再演が重ねられたことが、以後の伝承を決定付けたのだと筆者は考える。

また天保五年七月興行の三味線譜（いわゆる朱）を遺した、四代広助（当時猿之助）は同年八月同所の次回興行で番付に名前が初めて載るが、実際には既に入門していて、修行中の身として朱を採ったと考えられる。四代広助は



三代広助の門弟であるので、「大字遊下本」の「豊沢扇左衛門」の二代広助からみて孫弟子に当たる。豊沢広助という、豊沢系の大名跡の師弟関係において、三代綱太夫による「勘助住家」添削本文の音楽が記録されていたことが判明したものである。

「大字遊下本」の出現によって「勘助住家」上演史上に確定した諸点中で最も重大な一事は、対校表段落No.29―30の省略が、三代綱太夫に初発したという事実の判明した点にある。人形浄瑠璃音楽が当該箇所を省略するのはあくまで伝承に従うもので、伝統演劇の姿勢としてはこれが正しい、と筆者は考える。内山美樹子氏「文楽のことばの現在」<sup>22)</sup>は、当該箇所の「欠落の修復」を唱えられるのであるが、こんにちの文化財保護の観点からすれば、たとえ修復を行うとしても伝来の姿を保存することが目的とされるのであって、伝承を伴わない初演本文の挿入はこの場合「修復」の範囲を逸脱するものではないだろうか。

はなはだしく近現代語読みが混入している文楽ではあるが、「勘助住家」現行本文にみるように、近世以来の伝統を堅持する部分が（無意識にもせよ）、まだある。貴重な伝承を保全するためにも、まずは現行本文の成り立ちを検討し直すことを先決問題とすべきである。「大字遊下本」は、人形浄瑠璃音楽・義太夫節の、現行本文の成立時期を辿る手掛かりとして、大いに有効な資料群であるのだ、とつよく指摘しておきたい。

### まとめにかえて

以上、本稿では、「大字遊下本」に関して、一節・二節には板元の問題（西村幸助、伊勢屋喜助）、三節では前表紙の配役情報が上演記録として活用できること、四節ではその本文は前表紙の配役の太夫たちと密接に関わるものと考えられること、五節では『本朝廿四孝』三段目切「勘助住家」の現行本文は三代綱太夫の添削本文を伝承するものであること、を説明した。

最後に、「大字遊下本」の所在地域が基本的に東日本に限られることの意味を考えたい。所蔵機関の所在地別に示すと、次のようになる。

#### 〔所在都道府県〕 所蔵機関名（所蔵点数）

- 〔青森〕 青森市淡谷文庫（1）、弘前市立図書館（2）
- 〔宮城〕 宮城県図書館（1）
- 〔山形〕 酒田市立光丘文庫（1）、山形県立博物館教育資料館（2）
- 〔福島〕 奥会津南郷民俗館（2）、檜枝岐村歴史民俗資料館（23）、福島県立図書館（2）、福島県歴史資料館（1）
- 〔栃木〕 葛生伝承館（4）、栃木県立文書館（1）
- 〔群馬〕 赤城村（39）、太田市立中央図書館（1）、群馬県立文書館（16）、中之条町（5）
- 〔茨城〕 茨城県立歴史館（8）、常陸大宮市歴史民俗資料館（1）
- 〔千葉〕 野田市立興風図書館（12）
- 〔埼玉〕 埼玉県立文書館（19）
- 〔東京〕 国立音楽大学図書館（15）、国立劇場（1）、羽村市郷土博物館（1）、早稲田大学演劇博物館（31）、神津（60）、鈴木俊幸（4）
- 〔新潟〕 鳥越文庫（1）
- 〔長野〕 飯田市美術博物館（1）、伊那市立高遠町図書館（1）、上田市立図書館（1）、小諸市立小諸図書館（5）、真田宝物館（3）、南相木村公民館（6）
- 〔静岡〕 静岡市立芹沢銑介美術館（1）、沼津市明治史料館（5）
- 〔愛知〕 名古屋市博物館（1）
- 〔岐阜〕 美濃加茂市民ミュージアム（2）
- 〔滋賀〕 人形劇の図書館（1）
- 〔大阪〕 大阪音楽大学音楽博物館（2）、大阪市立中央図書館（1）、豊竹呂勢太夫（128）、西村公一（9）
- 〔徳島〕 松茂町歴史民俗資料館（1）
- 〔香川〕 香川県立ミュージアム・近石泰秋資料（5）
- 〔海外〕 オーストラリア国立図書館（1）

大阪市立中央図書館は三代鶴沢清六、大阪音楽大学音楽博物館は二代鶴沢

清八による収集文書である。滋賀・大阪・徳島・香川のその他の所蔵機関・所蔵者も収集家（研究者・蔵書家）によって当地に移されたもので伝来の地域を示すものではない。これらを除いてみるならば、本州の東側（中部・東海地方）に分布することが御理解いただけるだろう。

一方に日本全国に流布する大坂板五行本の存在を想定してみると、「大字遊下本」の伝播した範囲は極めて限定的である、というのが浄瑠璃本の所在調査を進める筆者の印象である。大坂板五行本の伝播した範囲と、江戸板「大字遊下本」の伝播した範囲というものが示すのは、大坂の板元と江戸の板元のそれぞれの商業圏の違いなのだろうと解釈している。「大字遊下本」の伝播した範囲とは、おそらくは日本史学という「江戸地廻り経済圏」に重なるものなのだろうかと考えている。

本屋仲間の取締によって厳しく出版権（板株）が守られていた江戸時代において、浄瑠璃本（抜き本）だけが同時並行で、大坂・江戸・京都（時期によっては名古屋や仙台・和歌山も加わる）の異なる板元から刊行され続けた、特異な存在である。その刊行時期も江戸時代に留まらず、十八世紀後期から二十世紀の近代・昭和初めまで長く継続した。江戸時代の他の文学ジャンルの出版物を例にしては、通常一店からしか刊行されないのが都市間の競合範囲をみることは出来ない。また各ジャンルの消長もあつて、定量的に観測するといふこともし難いように思われる。

浄瑠璃本（抜き本）の特異な性格——大坂・江戸・京都から同時並行で刊行され続けた——を踏まえるならば、日本各地での残存状況を把握することが出来るならば、各都市の出版・書物業における商業圏を知ることができるのではないかと見通しを持つ。近年、江戸時代後期から近代にかけての書物の流通に関する研究が盛んであるが、浄瑠璃本（抜き本）をその具体例とすることから得られる点もあるであろうことを、「大字遊下本」を例として指摘しておきたい。

本稿をなすにあたって、資料の翻刻掲載を許されました人形劇の図書館・湯見英明氏へ御礼申し上げます。また資料の閲覧を許された所蔵機関・所蔵

者の皆様、貴重な資料を御寄贈いただきました竹本土佐子氏へ感謝申し上げます。本稿は、平成二十九年科学研究所費補助金・本研究はJSPS科研費JP16H07120の助成を受けたものです。

# 註

- (1) 拙著『浄瑠璃本史研究』（八木書店、二〇〇九年）、第四部作品研究第一章「奥州安達原」第三ノ切「袖萩祭文の段」参照。初出は、『奥州安達原』第三ノ切「袖萩祭文の段」現行本文の成立に関する研究（『演劇映像』第四十四号、早稲田大学演劇映像学会、二〇〇三年所収）。
- (2) 拙稿「義経千本桜」三段目切「甕鮮屋」（三本対照）（『上方文化講座 義経千本桜』和泉書院、二〇一三年所収）参照。
- (3) 抜き本の歴史の中では、床本との近似を標榜する例がいくつか見受けられる。「大字遊下本」もそのような中
- (4) 「かきほん」書写床本の場合、其紙の後ろ表紙を備える。のが
- (5) 板本は、板元・版元のこと。
- (6) 日本書誌学大系76、青雲堂書店、一九九八年。
- (7) 『日本庶民文化史料集成』第七巻「人形浄瑠璃」（芸能史研究会編、三一書房、一九七五年）に、同書の翻刻がある。
- (8) 註(6)前掲書一一八頁上階参照。
- (9) 鈴木俊幸氏は、①「江戸板義太夫抜本訴訟始末（上）」（『中央大学文学部紀要』第八十三号、一九九九年所収）、②「江戸板義太夫抜本訴訟始末（付編）」（『翻刻・九大本『義太夫浄瑠璃本訴訟』——（『中央大学文学部紀要』第八十九号、二〇〇二年所収）の二編を発表された。②に、九州大学法学部所蔵『義太夫浄瑠璃本訴訟』を翻刻紹介され、①に、同訴訟に関する考証を記しておられる。「付編」では、『義太夫本公訴一件』『義太夫浄瑠璃本訴訟』の二冊は、訴訟の一方の当事者である板元・三河屋喜兵衛の手により編集されたこと、三河屋の後継・富士屋儀兵衛の手に残されていたものであることを明らかにされた。
- (10) 鈴木氏①では、訴訟当事者となった江戸の板元らを個別に取り上げて、西村幸助については、『江戸買物独案内』などを引いて「薬種屋を兼ねた商人であった」と指摘された。他に、文政二年に伊勢屋治助から板株を購入した点についても触れている。
- (11) 註(6)前掲書八七・八八頁参照。
- (12) 註(6)前掲書八二頁下階参照。



- (13) 註(6) 前掲書一八頁上階参照。
- (14) 註(6) 前掲書八三頁上階参照。
- (15) 註(6) 前掲書八八頁上階参照。
- (16) 註(6) 前掲書八八頁上階参照。
- (17) 註(1) 拙著参照。
- (18) 註(2) 拙稿参照。
- (19) 拙著『浄瑠璃本史研究』(八木書店、二〇〇九年)、第四部作品研究第二章『本朝廿四孝』第三ノ切「勘助住家の段」参照。初出は、『武田信玄・長尾謙信／本朝廿四孝』第三について——景勝を中心とする作品解釈と、現行本文成立時期に関する研究——(『歌舞伎』第二十八号、歌舞伎学会、二〇〇二年所収)。
- (20) 本誌第九号、早稲田大学高等研究所、二〇一七年所収。
- (21) 安田文吉氏が研究代表者の、基盤研究(B)「江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究——石水博物館(津市)所蔵文献資料を手がかりに」(研究課題番号2132062。採択期間二〇〇九—二〇一二年度)の、研究成果報告書『江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究——石水博物館(津市)所蔵文献資料を手がかりに』(安田文吉、二〇一三年)所収の、安田徳子氏・安田文吉氏・早川由美師氏「石水博物館蔵歌舞伎浄瑠璃番付目録」九八頁右に「文化03・11・20 四条道場(寺町) 竹本政太夫(太夫) 花上野營の石碑・男作五鷹金・国性爺合戦・増補時頼記・大切景事花扇郎鄂枕 浄役 番付021-41」と紹介されたもの。
- (22) 『文学』二〇一一年三・四月号「特集Ⅱ人形浄瑠璃・文楽のことばへ」岩波書店、二〇一一年所収。

別表A 「大字遊下本」配役情報 年代順索引

一、表1「大字遊下本」諸本リスト」に掲出の配役情報について抜粋して、興行ごとにまとめ、上演年代順に配列したものである。索引の便を考え、各自の頭に【】内に、通しの番号を与えた。

一、「既刊年表」項では、『義太夫年表 近世篇』の記載の有無を示した。記載のある場合は同書の写真番号、記載の無い場合は「記載なし」と記した。

一、「年代」項では、興行の初日の和暦年(西暦)月日および劇場を記した。

一、「演目」項では、当該興行の通し(立て・建て)の演目と、付け物の演目とを記した。

一、「配役」項では、表1「大字遊下本」諸本リスト」と参照し易いように、表Iの作品番号と本外題を添えて、「大字遊下本」前表紙の配役を記した。

一、「備考」項では、右の「配役」を前述の「年代」と判断あるいは推定した理由を記した。

【01】

〔既刊年表〕近世篇1034

〔年代〕文政二年(一八一九)二月八日 結城座

〔演目〕通し『本朝廿四孝』、付け物『寿連理の松』

〔配役〕No.57『寿連理の松』「湊町」豊竹時太夫・鶴沢蟻鳳勝遊

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。ただし奥付の年記に拠って、文政四年三月以降に後摺されたものと知られる(鶴沢蟻鳳は文政三年以降に大坂へ上るので、再演はなし)。

【02】

〔既刊年表〕近世篇補訂53

〔年代〕文政四年(一八二二)春 結城座

〔演目〕通し『奥州安達原』、付け物『往古曾根崎村譚』

〔配役〕No.09『奥州安達原』三段目切豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。なお番付には、巴太夫の役場に「御目見得出語り」と記し、右肩に「下り」と注記する。「御目見得」「下り」の注記は、遠隔地からの客演で到着して最初の興行に謳うのが原則なので、当該興行は巴太夫が江戸へ下った最初の興行と考えなければならない。『義太夫年表 近世篇』は「文政四年前半」と推定したが、次項【03】によって文政四年

三月に『妹背山婦女庭訓』へ出演したと考えられるので、当該興行はその以前、と絞り込むことができる。巴太夫は前年十一月二十一日初日大坂御霊社内興行に出演しているので(十二月中に打ち上げたと考えて)、江戸での出演は、文政四年春(正月以降三月以前)と推定する。

【03】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政四年(一八二二)三月吉日 結城座

〔演目〕通し『妹背山婦女庭訓』

〔配役〕No.05『妹背山婦女庭訓』二段目切竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、三段目切「かけ合」〈妹山〉豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎・鶴沢仲助／〈背山〉竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎・鶴沢仲助、四段目「道行」竹本春太夫・竹本岡太夫・竹本生駒太夫・大西東蔵・鶴沢徳次郎、同中「使者」竹本錦太夫・鶴沢東十郎。  
〔備考〕年月については、内題「妹背山婦女庭訓 四段目中」(国立音楽大学)に基づく。奥付「西幸」は、当該興行時の開板であろう。

【04】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政四年(一八二二)五月吉日 結城座

〔演目〕通し『鎌倉三代記』

〔配役〕No.19『鎌倉三代記』七段目切豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕年月については、内題「鎌倉三代記 七ツ目ノ切」(早稲田大学演劇博物館ほか)に基づく。

【05】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政四年春／文政五年 結城座

〔演目〕通し『仮名手本忠臣蔵』

〔配役〕No.16『仮名手本忠臣蔵』大序〈口〉竹本長戸太夫・鶴沢清糸／〈切〉豊竹巴太夫・鶴沢芳次郎、二段目〈口〉竹本政子太夫・鶴沢徳次郎／〈切〉竹本津賀太夫・鶴沢清糸、三段目竹本岡太夫・鶴沢勝吉／竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎／竹本絹太夫・鶴沢徳次郎、四段目〈切〉竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、五段目竹本此太夫・大西東造、七段目「かけ合」豊竹巴太夫・竹本津賀太夫・竹本長戸太夫・

竹本岡太夫・竹本政子太夫・竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、九段目〈切〉豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎、十段目口竹本此太夫・大西東造。  
〔備考〕年月は、初代豊竹巴太夫の江戸滞在中と推定した。

【06】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政四年春／文政五年 結城座

〔演目〕通し『太平記忠臣講釈』

〔配役〕No.45『太平記忠臣講釈』七ツ目「重太郎内」豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。  
〔備考〕年月は、初代豊竹巴太夫の江戸滞在中と推定した。

【07】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政四年春／文政五年 結城座

〔演目〕通し『蘭奢待新田系図』

〔配役〕No.79『蘭奢待新田系図』三段目切豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。  
〔備考〕年月は、初代豊竹巴太夫の江戸滞在中と推定した。

【08】

〔既刊年表〕近世篇 1097A・近世篇 1097B

〔年代〕文政五年(一八二二)正月二日 結城座

〔演目〕通し『絵本太功記』

〔配役〕No.08『絵本太功記』二ツ目切「本能寺」豊竹若太夫・鶴沢市造、七ツ目切「鷺の森」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、十段目切「尼崎」豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。  
〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

【09】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政五年(一八二二)閏正月吉日 結城座

〔演目〕通し『花柳会稽褐布染』、付け物『和田合戦女舞鶴』

〔配役〕No.61『花柳会稽褐布染』四ツ目「官次郎切腹」〈口〉竹本長戸太夫・鶴沢勝吉／〈切〉豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎、同六ツ目「船揚げ」竹本氏太夫・鶴沢



仲助、同ハツ目切「月本屋敷」〈切〉竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎／〈奥 かけ合〉竹本宮戸太夫・竹本津賀太夫。No.80『和田合戦女舞鶴』三段目切「市若切腹」豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕年月については、内題「花禪会稽褐布染 四冊目」(神津)、内題「和田合戦女舞鶴 三ノ切」(豊竹呂勢太夫)に基づく。

## 【10】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政五年(一八二二) 三月吉日 結城座

〔演目〕通し『義経千本桜』

〔配役〕No.77『義経千本桜』二段目切竹本氏太夫・鶴沢仲助、三段目口竹本津賀太夫・鶴沢清糸、三段目切豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕年月については、内題「義経千本桜 三之切」(神津)に基づく。

## 【11】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政五年(一八二二) 四月吉日 結城座

〔演目〕通し『伊達競阿国戯場』、付け物『檀浦兜軍記』

〔配役〕No.46『伊達競阿国戯場』九ツ目「土橋」竹本氏太夫・鶴沢仲助。No.49『檀浦兜軍記』カケ合豊竹巴太夫・竹本宮戸太夫・竹本津賀太夫・三弦鶴沢勝次郎・三曲鶴沢清糸。

〔備考〕年月については、内題「伊達競阿国戯場 九ツ目切 土橋の段」(群馬県立文書館ほか)、内題「琴責の段」(神津)に基づく。なお同じ年記をもつ『伊達競阿国戯場』ハツ目切については、開板は当該興行であったと考えるが、現存本の掲げる配役は、後年のものと判断する。【43】参照。

## 【12】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政五年(一八二二) 七月吉日 結城座

〔演目〕通し『国性爺合戦』、付け物『箱根靈騷燹仇討』

〔配役〕No.29『国性爺合戦』二段目口「貝づくし」竹本政子太夫・ツレ竹本美家太夫・三味線鶴沢徳次郎、三段目切「紅粉流」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。No.58『箱根靈騷燹仇討』十一段目「滝」竹本津賀太夫・鶴沢清糸。

〔備考〕年月については、内題「国性爺合戦 三段目ノ切」(野田市興風図書館)、内題「箱根靈騷燹仇討 滝の段」(群馬県立文書館ほか)に基づく。

## 【13】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政五年(一八二二) 十月吉日 結城座

〔演目〕通し演目未詳、付け物『恋娘昔八丈』

〔配役〕No.28『恋娘昔八丈』五ツ目「城木屋」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、七ツ目「鈴の森」竹本氏太夫・鶴沢仲助。

〔備考〕年月については、内題「恋娘昔八丈 鈴の森の段」(神津ほか)に基づく。

## 【14】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政六年(一八二三) 正月吉日 結城座

〔演目〕通し『伊賀越道中双六』

〔配役〕No.02『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」竹本氏太夫・鶴沢勝次郎、ハツ目切「幸兵衛内」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕年月については、内題「伊賀越道中双六 沼津の段」(神津)に基づく。なお同じ年記をもつ『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」については、開板は当該興行であったと考えるが、現存本の掲げる配役は、後年のものと判断した。【48】参照。

## 【15】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政六年(一八二三) 二月吉日 結城座

〔演目〕通し『神靈矢口渡』

〔配役〕No.39『神靈矢口渡』三段目切「兵庫館」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、四段目切「涉場」竹本津賀太夫・鶴沢清糸。

〔備考〕年月については、内題「神靈矢口渡 四之切」(上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会)に基づく。

## 【16】

〔既刊年表〕近世篇 1121

〔年代〕 文政六年（一八二三）三月六日 結城座  
〔演目〕 通し『双蝶々曲輪日記』、付け物『加々見山』  
〔配役〕 No.13『加々見山旧錦絵』六ツ目「草履打」竹本津賀太夫・鶴沢清糸、七ツ目切カケ合竹本宮戸太夫・竹本此太夫。三味線鶴沢勝次郎・大西東造。  
〔備考〕 番付に一致するので、この時の開板と考える。

【17】

〔既刊年表〕「記載なし」  
〔年代〕 文政六年（一八二三）五月吉日 結城座  
〔演目〕 通し演目未詳、付け物『棲重恨鯨鞘』  
〔配役〕 No.53『裾重浪花八文字』「鱧谷」竹本津賀太夫・鶴沢清糸。  
〔備考〕 年月については、内題「恨鯨鞘 鱧谷ノ段」（豊竹呂勢太夫）に基づく。奥付「西幸2」は、当該興行時の開板であろう。

【18】

〔既刊年表〕「記載なし」  
〔年代〕 文政六年（一八二三）七月吉日 大薩摩座  
〔演目〕 通し演目未詳、付け物『敵討檻樓錦』  
〔配役〕 なし（No.14『敵討檻樓錦』）  
〔備考〕 年月については、内題「敵討檻樓錦 大安寺の段」（大阪音楽大学音楽博物館）に基づく。同月に結城座は「仮名手本忠臣蔵」を上演するので、当該本は大薩摩座の上演と推定する。

【19】

〔既刊年表〕近世篇二四  
〔年代〕 文政六年（一八二三）十月五日 結城座  
〔演目〕 通し『碁太平記白石噺』、付け物『日蓮記』  
〔配役〕 No.31『碁太平記白石噺』七ツ目「廓」竹本宮戸太夫・大西東蔵。  
〔備考〕 年月は番付による。番付（近世篇二四）は『碁太平記白石噺』の太夫役割を欠くが、当該興行に宮戸太夫は出演しているので、当該興行での開板と推定する。なお大西東蔵は既存の番付では文政七―八年の頃に江戸で確認される。

【20】

〔既刊年表〕近世篇二四  
〔年代〕 文政七年（一八二四）正月二日 結城座  
〔演目〕 通し『娘景清八島日記』、付け物『伽羅先代萩』  
〔配役〕 No.73『伽羅先代萩』三ツ目「毒茶」竹本組太夫・鶴沢芳次郎、六ツ目「御殿」竹本むら太夫・鶴沢勝造。  
〔備考〕 番付に一致するので、この時の開板と考える。

【21】

〔既刊年表〕「記載なし」  
〔年代〕 文政六年 結城座  
〔演目〕 通し『本朝廿四孝』  
〔配役〕 No.70『本朝廿四孝』二段目切「勝頼切腹」竹本氏太夫・鶴沢勝次郎、三段目中豊竹若太夫・鶴沢市造、四段目切竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。  
〔備考〕 鶴沢勝次郎（のちの2代清七）は、文政四年前半から文政八年正月まで江戸で出演する。初代豊竹巴太夫滞在中は同人を弾くので、宮戸太夫を弾くのは巴太夫の帰坂後、文政六―七年の頃と考える。  
なお「年表」は、三段目中の配役について、奥付「西幸5」の年記に拠って文政十年十月土佐座の上演と推定するが、「豊竹若太夫」は文政七年正月から大坂に出、再び江戸へ下るのは文政十一年正月なので、「年表」の推定は成り立たない。これらを勘案して、文政六年中の上演と推定する。【30】参照。

【22】

〔既刊年表〕「記載なし」  
〔年代〕 文政六年―文政七年 結城座  
〔演目〕 通し『木下蔭狭間合戦』  
〔配役〕 No.32『木下蔭狭間合戦』九ツ目竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。  
〔備考〕 鶴沢勝次郎（のちの2代清七）は、文政四年前半から文政八年正月まで江戸で出演する。初代豊竹巴太夫滞在中は同人を弾くので、宮戸太夫を弾くのは巴太夫の帰坂後、文政六―七年の頃と考える。

【23】

〔既刊年表〕「記載なし」



〔年代〕 文政六年～文政七年 結城座

〔演目〕 通し『新うすゆき物語』

〔配役〕 No.38『新うすゆき物語』下巻「鍛冶屋」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕 鶴沢勝次郎（のちの2代清七）は、文政四年前半から文政八年正月まで江戸で出演する。初代豊竹巴太夫滞在中は同人を弾くので、宮戸太夫を弾くのは巴太夫の帰坂後、文政六～七年の頃と考える。

## 【24】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕 文政六年～文政七年 結城座

〔演目〕 通し『彦山権現誓助剣』

〔配役〕 No.65『彦山権現誓助剣』六ツ目「返り討」〔竹〕本宮戸太夫・〔鶴沢〕勝次郎、九ツ目「毛谷村」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕 鶴沢勝次郎（のちの2代清七）は、文政四年前半から文政八年正月まで江戸で出演する。初代豊竹巴太夫滞在中は同人を弾くので、宮戸太夫を弾くのは巴太夫の帰坂後、文政六～七年の頃と考える。

## 【25】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕 文政六年～文政七年 結城座

〔演目〕 通し『姫小松子日の遊』

〔配役〕 No.67『姫小松子日の遊』二段目「赦免状」竹本宮戸太夫・大西東造、三段目切「俊寛島物語」竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕 鶴沢勝次郎（のちの2代清七）は、文政四年前半から文政八年正月まで江戸で出演する。初代豊竹巴太夫滞在中は同人を弾くので、宮戸太夫を弾くのは巴太夫の帰坂後、文政六～七年の頃と考える。

## 【26】

〔既刊年表〕近世篇1182・近世篇1183A・近世篇1183B

〔年代〕 文政八年（一八二五）正月二日 結城座

〔演目〕 通し『鎮西八郎誉弓勢』、付け物『関取千両幟』『契情阿波の鳴戸』

〔配役〕 No.24『傾城阿波の鳴戸』ハツ目「順礼」竹本筆太夫・野沢語助。No.41『関取千両幟』二段目太夫竹本綱太夫・三弦豊沢扇左衛門。

〔備考〕 番付に一致するので、この時の開板と考える。

## 【27】

〔既刊年表〕近世篇1184・近世篇1185

〔年代〕 文政八年（一八二五）正月二十三日 大薩摩座

〔演目〕 通し『増補競伊勢物語』、付け物『一の谷嫩軍記』『傾城恋飛脚』『二人静振袖雛形』

〔配役〕 No.03『一の谷嫩軍記』三段目切豊竹筑前・鶴沢清糸。No.25『けいせい恋飛脚』下の巻「新口村」太夫竹本播磨大掾・三弦野沢重五郎。No.06『蝦夷錦振袖雛形』「衣川庵室」竹本津賀太夫・鶴沢清糸。

〔備考〕 番付に一致するので、この時の開板と考える。

## 【28】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕 文政七年～文政八年三月 結城座

〔演目〕 通し演目未詳、付け物『勢州阿漕浦』

〔配役〕 No.48『田村鷹鈴鹿合戦』四段目切「平治住家」竹本綱太夫・豊沢仙左衛門。

〔備考〕 年月は、三代竹本綱太夫の江戸滞在中と推定した。

## 【29】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕 文政七年～文政八年三月 結城座

〔演目〕 通し『日吉丸稚桜』

〔配役〕 No.68『日吉丸稚桜』三段目切竹本綱太夫・三弦野沢語助。

〔備考〕 年月は、三代竹本綱太夫の江戸滞在中と推定した。

## 【30】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕 文政七年～文政八年三月 結城座

〔演目〕 通し『本朝廿四孝』

〔配役〕 No.70『本朝廿四孝』三段目口竹本此太夫・大西東造、三段目中竹本此太夫・大西東造、三段目切竹本綱太夫・豊沢扇左衛門。

〔備考〕年月は、三代竹本綱太夫の江戸滞在中と推定した。ただし三段目中は、  
 【21】文政六年結城座上演時の開板で、その前表紙を改めて後摺したものと考え  
 る。前表紙に「結城座」と記す本を、【30】上演時の刊行本と推定した。

なお『年表』は、三段目口の配役について、「竹本此太夫」の動静を根拠に文  
 政前半と推定する。しかしのちに三代竹本住太夫となる同人は、文政十年八月肥  
 前座で「御当地御名残」を勤めるまでは、江戸に滞在したと考えられるので、『年  
 表』の推定は訂正を要する。【21】参照。

### 【31】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政八年（一八二五）五月吉日 上演座未詳

〔演目〕通し演目未詳、付け物『楓狩剣本地』

〔配役〕なし（No.74『楓狩剣本地』）

〔備考〕年月については、内題「楓狩剣本地 三段目」（豊竹呂勢太夫）に基づく。

### 【32】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政八年（一八二五）夏 上演座未詳

〔演目〕通し『箱根霊験翫仇討』

〔配役〕なし（No.58『箱根霊験翫仇討』）

〔備考〕年月については、内題「霊験翫仇討 十冊目」（早稲田大学演劇博物館）  
 に基づく。

### 【33】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政九年（一八二六）正月吉日 大薩摩座

〔演目〕通し『出世太平記』

〔配役〕No.71『三日太平記』五ツ目「本能寺」太夫竹本むら太夫・三弦鶴沢勝造、  
 九ツ目切「松下住家」（端場）太夫竹本岡太夫・三弦鶴沢勝吉／（切）太夫竹本  
 津賀太夫・三弦鶴沢清糸。

〔備考〕年月については、内題「出世太平記 九ツ目」（神津）に基づく。

### 【34】

〔既刊年表〕近世篇1242・近世篇1243

〔年代〕文政九年（一八二六）十月五日 肥前座

〔演目〕通し『二谷嫩軍記』、付け物『手習鑑』『いろは蔵』『姫山姥』

〔配役〕No.33『姫山姥』二段目切「煙草売」座元豊竹絹太夫・鶴沢福松。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

なお『年表』は、「煙草売」の配役について豊竹絹太夫が座元である期間とし  
 て「文政九年四月以後十二年三月以前 肥前座」と推定するが、文政九年十月同  
 座の上演を見落としたものと考ええる。

### 【35】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政九年（一八二六）十月初後 肥前座

〔演目〕通し『三国妖狐伝』

〔配役〕No.47『玉藻前囃袂』三段目切「道春館」太夫竹本絹太夫・三弦鶴沢福松。

〔備考〕年月は、絹太夫と福松が同座した前項【34】文政九年十月肥前座興行の  
 前後と推定した。ただし当該興行および奥付「西幸3」では「豊竹」絹太夫であ  
 ることと、同時期に大坂に「竹本絹太夫」がいる点に不審が残る。

### 【36】

〔既刊年表〕近世篇1248・近世篇1249

〔年代〕文政九年（一八二六）十月 大薩摩座

〔演目〕通し『茹萱桑門築紫轢』

〔配役〕No.20『茹萱桑門築紫轢』五段目「高野山」竹本浪太夫・大西東蔵。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

### 【37】

〔既刊年表〕近世篇1264

〔年代〕文政十年（一八二七）三月 肥前座

〔演目〕通し『小田館双生日記』、付け物『関取二代鑑』

〔配役〕No.42『関取二代勝負附』「秋津島内」竹本染太夫・野沢語助。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

【38】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政十年（一八二七）六月 上演座未詳

〔演目〕通し演目未詳、付け物『芦屋道満大内鑑』

〔配役〕未詳（No.01『芦屋道満大内鑑』）

〔備考〕年月については、内題「芦屋道満大内鑑 狐別の段」（群馬県立文書館）に基づく。原表紙を欠くため、配役が判らない。

【39】

〔既刊年表〕近世篇 1281

〔年代〕文政十年（一八二七）八月十六日 肥前座

〔演目〕通し『神霊矢口渡』、付け物『双蝶々』『連理柵』『廓文章』

〔配役〕No.15『桂川連理柵』『帯屋』出語豊竹古野太夫・野沢半造。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

【40】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政七年正月～文政十年秋 上演座未詳

〔演目〕通し演目未詳、付け物『迎駕籠知死期茜染』

〔配役〕No.71『迎駕籠死期茜染』『聚楽町』太夫竹本古野太夫・三弦鶴沢勝造。

〔備考〕年月は、上限を鶴沢勝造の江戸下り、下限を竹本古野太夫（のちの三代住太夫）の帰阪、と推定した。

【41】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政九年十月～文政十年五月 肥前座

〔演目〕通し演目未詳、付け物『源平布引滝』

〔配役〕No.26『源平布引滝』三段目切太夫豊竹時太夫・三弦野沢語助。

〔備考〕豊竹時太夫と野沢語助が江戸で共演するのは、文政九年十月～文政十年五月の肥前座興行を知るので、年月はその頃と推定した。

【42】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政七年正月～文政十二月二月 上演座未詳

〔演目〕通し『妹背山婦女庭訓』

〔配役〕No.05『妹背山婦女庭訓』二段目切竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎、四段目口「杉酒屋」竹本むら太夫・鶴沢勝造、同切「竹に雀」〔端場〕竹本むら太夫・鶴沢勝造／〔切〕竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎。

〔備考〕年月は、竹本むら太夫（のちの四代竹本綱太夫）の江戸滞在中と推定した。配役は、二段目切四段目口「杉酒屋」『妹背山婦女庭訓』の通し・立てであったと推定する。【42】上演時の刊行本は、前表紙に「直伝正本」と記す点が共通する。

【43】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政七年正月～文政十二月二月 上演座未詳

〔演目〕通し『伊達競阿国戯場』

〔配役〕No.46『伊達競阿国戯場』ハツ目「垣生村」出語り太夫竹本むら太夫・三弦鶴沢勝造。

〔備考〕年月は、竹本むら太夫（のちの四代竹本綱太夫）の江戸滞在中と推定した。ただし終丁裏の年記は当該本の開板時のものと判断する（文政五年前半には、鶴沢勝造はまだ江戸へ下っていないため）。

【44】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政七年正月～文政十二月二月 上演座未詳

〔演目〕通し演目未詳、付け物『近頃河原達引』

〔配役〕No.50『近頃河原達引』『堀川』竹本むら太夫・鶴沢勝造。

〔備考〕年月は、竹本むら太夫（のちの四代竹本綱太夫）の江戸滞在中と推定した。

【45】

〔既刊年表〕「記載なし」

〔年代〕文政五年～天保八年 上演座未詳

〔演目〕通し演目未詳、付け物『義士の書添』

〔配役〕No.21『義士の書添』八冊目竹本津賀太夫・三味線鶴沢清糸。



〔備考〕年月は、初代竹本津賀太夫の江戸滞在中と推定した。

【46】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政五年～天保八年 上演座未詳

〔演目〕通し『ひらかな盛衰記』

〔配役〕No.69『ひらかな盛衰記』二段目切「源太勘当」竹本津賀太夫・鶴沢清糸。

〔備考〕年月は、初代竹本津賀太夫の江戸滞在中と推定した。

【47】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政八年正月～安政元年 上演座未詳

〔演目〕通し『糸桜本町育』

〔配役〕No.04『糸桜本町育』「小石川」竹本播磨太夫・鶴沢勘五郎。

〔備考〕竹本播磨太夫はもとは三味線弾き鶴沢蟻鳳で、文政七年以降「播磨太夫」と業を変える。また鶴沢勘五郎は、文政八年正月に前名「徳二郎」から改名したものの。兩人はともに安政元年ころまでに記録が残る。上限は文政八年の勘五郎改名、下限は兩人の活動の終わる安政元年、と推定した。

【48】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕文政十年～天保十三年 大薩摩座か

〔演目〕通し演目未詳、付け物『伊賀越道中双六』

〔配役〕No.02『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」竹本染太夫・野沢語助。

〔備考〕年月は、五代竹本染太夫の江戸滞在中と推定した。なお原板の「於結城座興行」を削るので、結城座以外（大薩摩座か）の上演と推定する。

【49】

〔既刊年表〕近世篇1445・近世篇1446

〔年代〕天保三年（一八三二）正月二日 土佐座

〔演目〕通し『八陳守護城』、付け物『名筆傾城鑑』『桂川連理柵』

〔配役〕No.59『八陳守護城』八ツ目切「正清館」竹本染太夫・野沢語助。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

【50】

〔既刊年表〕〔記載なし〕

〔年代〕天保六年（一八三五）四月二十日 大薩摩座

〔演目〕通し『忠臣競四谷怪談』、付け物『七ツ梅鼻肩積物』

〔配役〕No.51『忠臣競四谷怪談』「羽宮住家」竹本津賀太夫・鶴沢清糸。

〔備考〕近年新出の番付（大阪城天守閣581）に一致するので、この時の開板と考える。

【51】

〔既刊年表〕近世篇2036

〔年代〕嘉永六年（一八五三）正月十一日 深川八幡社内

〔演目〕通し『花王草紙楓短冊』、付け物『式三番叟 引拔春駒』

〔配役〕No.35『花王草紙楓短冊』三段目切「藤吾住家」竹本播磨太夫・花沢伊左衛門。

〔備考〕番付に一致するので、この時の開板と考える。

別表B 「大字遊下本」配役情報 名前別索引

一、本索引は、表1「大字遊下本」諸本リストおよび別表A「大字遊下本」配役情報 年代順索引に掲出の配役情報について、太夫と三味線弾きの名前から検索できるように作成した。

一、太夫の部と、三味線弾きの部とに分けて示す。各部ごとに、姓名の五十音順に並べた。

一、【一】内に別表Aの通し番号、次に表1の作品番号『本外題』、続いて記載された段数・段区分「段名」の要領で記した。

〈太夫〉

竹本生駒太夫

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目「道行」

竹本氏太夫（三代）

- 【09】 No. 61 『花櫛会稽褐布染』六ツ目「船揚げ」
- 【10】 No. 77 『義経千本桜』二段目切
- 【11】 No. 46 『伊達競阿国戯場』九ツ目「土橋」
- 【13】 No. 28 『恋娘昔八丈』七ツ目「鈴の森」
- 【14】 No. 02 『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」
- 【21】 No. 70 『本朝廿四孝』二段目切「勝頼切腹」

竹本岡太夫（三代）

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目「道行」
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』三段目「進物場」
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
- 【33】 No. 71 『三日太平記』九ツ目切「松下住家」〈端場〉

竹本絹太夫（豊竹絹太夫モミヨ）

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』三段目「裏門」
- 【35】 No. 47 『玉藻前囃袂』三段目切「道春館」

竹本組太夫（のちの三代竹本住太夫）

- 【20】 No. 73 『伽羅先代萩』三ツ目「毒茶」

竹本此太夫（のちの三代竹本住太夫）

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』五段目
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』十段目口
- 【16】 No. 13 『加々見山旧錦絵』七ツ目切カケ合
- 【30】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目口
- 【30】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目中

竹本古野太夫（のちの三代竹本住太夫）

- 【40】 No. 72 『迎駕籠死期茜染』「聚楽町」

竹本染太夫（五代）

- 【37】 No. 42 『関取二代勝負附』「秋津島内」
- 【48】 No. 02 『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」
- 【49】 No. 59 『八陳守護城』八ツ目切「正清館」

竹本津賀太夫（初代）

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』二段目「切」
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
- 【09】 No. 61 『花櫛会稽褐布染』八ツ目切「月本屋敷」〈奥かけ合〉
- 【10】 No. 77 『義経千本桜』三段目口
- 【11】 No. 49 『壇浦兜軍記』カケ合
- 【12】 No. 58 『箱根霊験壁仇討』十一段目「滝」
- 【15】 No. 39 『神霊矢口渡』四段目切「渉場」
- 【16】 No. 13 『加々見山旧錦絵』六ツ目「草履打」
- 【17】 No. 53 『裙重浪花八文字』「鱸谷」
- 【26】 No. 06 『蝦夷錦振袖雛形』「衣川庵室」
- 【33】 No. 71 『三日太平記』九ツ目切「松下住家」〈切〉
- 【45】 No. 21 『義士の書添』八冊目
- 【46】 No. 69 『ひらかな盛衰記』二段目切「源太勘当」
- 【50】 No. 51 『忠臣競四谷怪談』「羽宮住家」

竹本綱太夫（三代）

- 【26】 No. 41 『関取千両幟』二段目

- 【28】 No. 48 『田村磨鈴鹿合戦』四段目切「平治住家」
- 【29】 No. 68 『日吉丸稚桜』三段目切
- 【30】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目切

竹本長戸太夫

- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』大序〈口〉
- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
- 【09】 No. 61 『花柳会稽褐布染』四ツ目「官次郎切腹」〈口〉

竹本浪太夫

- 【36】 No. 20 『荀萱桑門築紫幘』五段目「高野山」

竹本錦太夫

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目中「使者」

竹本播磨大掾（二代竹本土佐太夫）

- 【27】 No. 25 『けいせい恋飛脚』下の巻「新口村」

竹本播磨太夫（初代）

- 【47】 No. 04 『系桜本町育』「小石川」
- 【51】 No. 35 『花王草紙楓短冊』三段目切「藤吾住家」

竹本春太夫（三代）

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目「道行」

竹本筆太夫（三代）

- 【26】 No. 24 『傾城阿波の鳴門』八ツ目「順礼」

竹本政子太夫

- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』二段目〈口〉
- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
- 【12】 No. 29 『国性爺合戦』二段目口「貝づくし」

竹本美家太夫

- 【12】 No. 29 『国性爺合戦』二段目口「貝づくし」

竹本宮戸太夫（初代）

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』二段目切
- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈背山〉
- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』三段目〈喧嘩場〉
- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』四段目〈切〉
- 【05】 No. 16 『假名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
- 【08】 No. 08 『絵本大功記』七ツ目切「鷺の森」
- 【09】 No. 61 『花柳会稽褐布染』八ツ目切「月本屋敷」〈切〉
- 【09】 No. 61 『花柳会稽褐布染』八ツ目切「月本屋敷」〈奥かけ合〉
- 【11】 No. 49 『壇浦兜軍記』カケ合
- 【12】 No. 29 『国性爺合戦』三段目切「紅粉流」
- 【13】 No. 28 『恋娘昔八丈』五ツ目「城木屋」
- 【14】 No. 02 『伊賀越道中双六』八ツ目切「幸兵衛内」
- 【15】 No. 39 『神靈矢口渡』三段目切「兵庫館」
- 【16】 No. 13 『加々見山旧錦絵』七ツ目切カケ合
- 【19】 No. 31 『碁太平記白石嘶』七ツ目「廓」
- 【21】 No. 70 『本朝廿四孝』四段目切
- 【22】 No. 32 『木下蔭狭間合戦』九ツ目
- 【23】 No. 38 『新うすゆき物語』下巻「鍛冶屋」
- 【24】 No. 65 『彦山権現誓助剣』六ツ目「返り討」
- 【24】 No. 65 『彦山権現誓助剣』九ツ目「毛谷村」
- 【25】 No. 67 『姫小松子日の遊』二段目「赦免状」
- 【25】 No. 67 『姫小松子日の遊』三段目切「俊寛島物語」
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』二段目切
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目切「竹に雀」〈切〉

竹本むら太夫（のちの四代竹本綱太夫）

- 【20】 No. 73 『伽羅先代萩』六ツ目「御殿」
- 【33】 No. 71 『三日太平記』五ツ目「本能寺」
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目口「杉酒屋」



- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目切「竹に雀」〈端場〉  
 【43】 No. 46 『伊達競阿国戯場』八ッ目「垣生村」  
 【44】 No. 50 『近頃河原達引』「堀川」

豊竹絹太夫（竹本絹太夫モミヨ）

- 【34】 No. 33 『軀山姥』二段目切「煙草売」

豊竹古野太夫（のちの三代竹本住太夫）

- 【39】 No. 15 『桂川連理柵』「帯屋」

豊竹筑前

- 【27】 No. 03 『一谷嫩軍記』三段目切

豊竹時太夫（のちの四代豊竹此太夫）

- 【01】 No. 57 『寿連理の松』「湊町」

豊竹時太夫（のちの五代豊竹此太夫）

- 【41】 No. 26 『源平布引滝』三段目切

豊竹巴太夫（初代）

- 【02】 No. 09 『奥州安達原』三段目切  
 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈妹山〉  
 【04】 No. 19 『鎌倉三代記』七段目切  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』大序〈切〉  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』九段目〈切〉  
 【06】 No. 45 『太平記忠臣講釈』七ッ目「重太郎内」  
 【07】 No. 79 『蘭奢待新田系図』三段目切  
 【08】 No. 08 『絵本大功記』十段目切「尼崎」  
 【09】 No. 61 『花櫛会稽褐布染』四ッ目「官次郎切腹」〈切〉  
 【09】 No. 80 『和田合戦女舞鶴』三段目切「市若切腹」  
 【10】 No. 77 『義経千本桜』三段目切  
 【11】 No. 49 『壇浦兜軍記』カケ合

豊竹若太夫（のちの二代豊竹巴太夫）

- 【08】 No. 08 『絵本大功記』二ッ目切「本能寺」  
 【21】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目中

〈三味線〉

大西東造（二代。東蔵とも）

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目「道行」  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』五段目  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』十段目  
 【16】 No. 13 『加々見山旧錦絵』七ッ目切カケ合  
 【19】 No. 31 『碁太平記白石噺』七ッ目「廓」  
 【25】 No. 67 『姫小松子日の遊』二段目「赦免状」  
 【30】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目  
 【30】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目中  
 【36】 No. 20 『菫萱桑門築紫轢』五段目「高野山」

鶴沢市造（初代）

- 【08】 No. 08 『絵本大功記』二ッ目切「本能寺」  
 【21】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目中

鶴沢勝吉

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』三段目〈進物場〉  
 【09】 No. 61 『花櫛会稽褐布染』四ッ目「官次郎切腹」〈口〉  
 【33】 No. 71 『三日太平記』九ッ目切「松下住家」〈端場〉

鶴沢勝次郎（のちの二代鶴沢清七）

- 【02】 No. 09 『奥州安達原』三段目切  
 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』二段目切  
 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈妹山〉  
 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈背山〉  
 【04】 No. 19 『鎌倉三代記』七段目切  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』三段目〈喧嘩場〉  
 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』四段目〈切〉

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』九段目〈切〉
- 【06】 No. 45 『太平記忠臣講釈』七ツ目「重太郎内」
- 【07】 No. 79 『蘭奢待新田系図』三段目切
- 【08】 No. 08 『絵本大功記』七ツ目切「鷺の森」
- 【08】 No. 08 『絵本大功記』十段目切「尼崎」
- 【09】 No. 61 『花樺会稽褐布染』四ツ目「官次郎切腹」〈切〉
- 【09】 No. 61 『花樺会稽褐布染』八ツ目切「月本屋敷」〈切〉
- 【09】 No. 80 『和田合戦女舞鶴』三段目切「市若切腹」
- 【10】 No. 77 『義経千本桜』三段目切
- 【11】 No. 49 『壇浦兜軍記』カケ合
- 【12】 No. 29 『国性爺合戦』三段目切「紅粉流」
- 【13】 No. 28 『恋娘昔八丈』五ツ目「城木屋」
- 【14】 No. 02 『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」
- 【14】 No. 02 『伊賀越道中双六』八ツ目切「幸兵衛内」
- 【15】 No. 39 『神靈矢口渡』三段目切「兵庫館」
- 【16】 No. 13 『加々見山旧錦絵』七ツ目切カケ合
- 【22】 No. 32 『木下蔭狭間合戦』九ツ目
- 【23】 No. 38 『新うすゆき物語』下巻「鍛冶屋」
- 【24】 No. 65 『彦山権現誓助剣』六ツ目「返り討」
- 【24】 No. 65 『彦山権現誓助剣』九ツ目「毛谷村」
- 【25】 No. 67 『姫小松子日の遊』三段目切「俊寛島物語」
- 【21】 No. 70 『本朝廿四孝』二段目切「勝頼切腹」
- 【21】 No. 70 『本朝廿四孝』四段目切
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』二段目切
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目切「竹に雀」〈切〉

鶴沢勝造（初代）

- 【20】 No. 73 『伽羅先代萩』六ツ目「御殿」
- 【33】 No. 71 『三日太平記』五ツ目「本能寺」
- 【40】 No. 72 『迎駕籠死期茜染』「聚楽町」
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目口「杉酒屋」
- 【42】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目切「竹に雀」〈端場〉

- 【43】 No. 46 『伊達競阿国戯場』八ツ目「垣生村」
- 【44】 No. 50 『近頃河原達引』「堀川」
- 鶴沢勘五郎（二代。前名「鶴沢徳次郎」モミヨ）
- 【47】 No. 04 『糸桜本町育』「小石川」

鶴沢蟻鳳勝遊

- 【01】 No. 57 『寿連理の松』「湊町」

鶴沢清糸（初代）

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』大序〈口〉
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』二段目〈切〉
- 【10】 No. 77 『義経千本桜』三段目口
- 【11】 No. 49 『壇浦兜軍記』カケ合
- 【12】 No. 58 『箱根靈驗變仇討』十一段目「滝」
- 【15】 No. 39 『神靈矢口渡』四段目切「涉場」
- 【16】 No. 13 『加々見山旧錦絵』六ツ目「草履打」
- 【17】 No. 53 『裙重浪花八文字』「鱸谷」
- 【27】 No. 03 『一谷嫩軍記』三段目切
- 【27】 No. 06 『蝦夷錦振袖雛形』「衣川庵室」
- 【33】 No. 71 『三日太平記』九ツ目切「松下住家」〈切〉
- 【45】 No. 21 『義士の書添』八冊目
- 【46】 No. 69 『ひらかな盛衰記』二段目切「源太勘当」
- 【50】 No. 51 『忠臣競四谷怪談』「羽宮住家」

鶴沢東十郎

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目中「使者」

鶴沢徳次郎（のちの二代鶴沢勘五郎）

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』四段目「道行」
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』二段目〈口〉
- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』三段目〈裏門〉
- 【12】 No. 29 『国性爺合戦』二段目口「貝づくし」

鶴沢仲助（二代）

- 【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈妹山〉  
【03】 No. 05 『妹背山婦女庭訓』三段目切「かけ合」〈背山〉  
【09】 No. 61 『花櫛会稽褐布染』六ツ目「船揚り」  
【10】 No. 77 『義経千本桜』二段目切  
【11】 No. 46 『伊達競阿国戯場』九ツ目「土橋」  
【13】 No. 28 『恋娘昔八丈』七ツ目「鈴の森」

鶴沢福松

- 【34】 No. 33 『姫山姥』二段目切「煙草売」  
【35】 No. 47 『玉藻前曦袂』三段目切「道春館」

鶴沢芳次郎

- 【05】 No. 16 『仮名手本忠臣蔵』大序〈切〉  
【20】 No. 73 『伽羅先代萩』三ツ目「毒茶」

豊沢扇左衛門（初代。仙左衛門とも。のちの二代広助）

- 【26】 No. 41 『関取千両幟』二段目  
【28】 No. 48 『田村磨鈴鹿合戦』四段目切「平治住家」  
【30】 No. 70 『本朝廿四孝』三段目切

野沢語助（初代）

- 【26】 No. 24 『傾城阿波の鳴門』八ツ目「順礼」  
【29】 No. 68 『日吉丸稚桜』三段目切  
【37】 No. 42 『関取二代勝負附』「秋津島内」  
【41】 No. 26 『源平布引滝』三段目切  
【48】 No. 02 『伊賀越道中双六』六ツ目「沼津」  
【49】 No. 59 『八陳守護城』八ツ目切「正清館」

野沢重五郎（のちの三代野沢八兵衛）

- 【27】 No. 25 『けいせい恋飛脚』下の巻「新口村」

野沢半造

- 【39】 No. 15 『桂川連理柵』「帯屋」  
花沢伊左衛門（四代）  
【51】 No. 35 『花王草紙楓短冊』三段目切「藤吾住家」



表1 大字遊下本 諸本リスト

- 一、本リストは、筆者が所在を確認したところの、「大字遊下本」四一六冊について、タイトル・段名ごとにまとめて示した。
- 一、「No」項には、「大字遊下本」の刊行された作品がいくつあるのかを数えた。
- 一、「本外題」項には、「大字遊下本」の刊行された作品について、記載の如何に拠らず、初演のタイトルを示した。
- 一、「段区分」項には、「大字遊下本」の刊行された段ごとに、その作品構成中の段数および段区分（口・中・切など）を示した。
- 一、「内題」項には、内題を記載の通りに示した。
- 一、「前表紙」項には、前表紙の文字情報を記載の通りに示した。ただし「大字遊下本」の語と、丁数を示す墨印は略した。また板元について記載のある場合は、「所蔵」項の各本ごとの備考に示した。
- 一、「配役」項には、前表紙に掲げる配役（太夫・三味線）を記載の通りに示した。記載のない場合は「（無記）」と示した。
- 一、「上演年月」項には、筆者が推定する上演年月を示した。『義太夫年表 近世篇』に該当する興行がある場合、「」内に番付の写真番号を記し、その興行初日の西暦・和暦年月を続けて記した。『義太夫年表 近世篇』に該当する興行が無い場合は、「【新出】」と示し、推定する時期を記した。配役や年記の記載がなく推定できない場合は、「（未詳）」と記した。
- 一、「年記」項には、本文末に示す年月日を記載の通りに示し、その記載位置を（）内に記した。ただし奥付の年記は、奥付番号によって把握できるので略した。
- 一、「所蔵」項には、奥付の異同によってまとめた。（）内に奥付番号を示した（具体的な奥付の内容は、表の末に掲げた）。所蔵機関（個人の場合は名前のみ、公共機関の場合は請求番号も）を、所在地の東から西の順に掲げた。書誌に関して特記すべき内容のある場合には、続けて（）内に注記した。

No	本外題	段区分	内題	前表紙	配役	上演年月	年記	所蔵
01	芦屋道満大内鑑	四ノ中	芦屋道満大内鑑 狐別の段	（原表紙欠）	（未詳）	【新出】未詳	文政十丁亥 年六月改 （終丁裏）	〔伊勢喜2B〕群馬県立文書館・倉品家文書0548
02	伊賀越道中双六	六	伊賀越道中双六 沼津の段	伊賀越道中双六 再改正本 沼津 之段	竹本氏太夫・鶴 沢勝次郎	【新出】1833文 政六年正月	文政六癸未 年正月吉日 於結城座興 行（終丁表）	〔伊勢喜1〕神津（後ろ表紙に「板本改 横山町式丁目・伊勢屋喜助」とあり）
			伊賀越道中双六 沼津の段	伊賀越道中双六 再改正本 沼津 之段	竹本染太夫・野 沢語助	【新出】文政十 年（天保十三年）	文政六癸未 年正月吉日 （終丁表）	〔不記載〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2C〕豊竹呂勢太夫、神津
			伊賀越道中双六 七ツ目 関所の 段	伊賀越 七ツ目 遠眼鏡段	（無記）	【新出】1833文 政六年正月	（無記）	〔伊勢喜2B〕神津
	八		伊賀越道中双六 幸兵衛内之段	伊賀越道中双六 幸兵衛内之段 大字遊下本・直	竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎	【新出】1833文 政六年正月	（無記）	〔伊勢喜2A〕埼玉県立文書館・新井家文書0562、神津 〔伊勢喜2B〕大阪音楽大学音楽博物館・二世鶴沢清

		03				
		一谷嫩軍記				伝正本
	二ノ中	一谷嫩軍記 組 打のだん			(無記)	
	二ノ中	一谷嫩軍記 三 段目ノ切	大薩摩 一谷嫩 軍記 三段目の 切	豊竹筑前・鶴沢 清糸	[近世篇 1184・ 1185] 1825 文 政八年正月	(無記)
	三ノ中	一谷嫩軍記 三 段目ノ切	豊竹筑前・鶴沢 清糸	[近世篇 1184・ 1185] 1825 文 政八年正月	(無記)	
		糸桜本町育 糸 やのだん	糸桜本町育 い とやの段 再改 正本 東都「空 白」	(無記)	[新出] 未詳	(無記)
		糸桜本町育 小 石川の段	糸桜本町育 小 石川の段 再改 正本	竹本播磨太夫・ 鶴沢勘五郎	[新出] 未詳	(無記)
04		妹背山婦女庭訓	二段目の切 妹 背山婦女庭訓 直伝正本	竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎	[新出] 1821 文 政四年三月	(無記)
05	三ノ切	妹背山婦女庭訓 三の切	三の切 妹背山 婦女庭訓 かけ	豊竹巴太夫・鶴 沢勝次郎・鶴沢	[新出] 1821 文 政四年三月	(無記)
						八文庫 0296 〔伊勢喜3A〕青森市淡谷文庫・図書《和書》-0361、 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・、香川県立 ミュージアム・近石泰秋資料 0128、豊竹呂勢太夫、 豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔不明〕葛生伝承館・牧歌舞伎資料 50（後ろ表紙欠）、 神津（前後表紙欠） 〔西幸4〕沼津市明治史料館・原渡辺家 P025（前表紙 に「板元 馬喰町二丁目西村幸助」とあり）、豊竹呂 勢太夫（後ろ表紙欠。前表紙に「板元 馬喰町二丁目 西村幸助」とあり） 〔伊勢喜1〕豊竹呂勢太夫（「西幸VI」の板元名を削り、 後ろ表紙に「板本改 横山町式丁目伊勢屋喜助」と記 す） 〔伊勢喜2B〕国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文 庫 09-2120 〔伊勢喜6A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 037 〔不記載〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 103、群馬県立文書館・倉品家文書 0541、埼玉県立文 書館・浅見家文書 1803、国立音楽大学附属図書館・ 竹内道敬文庫 09-2121、南相木村公民館・126、南相 木村公民館・548、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔不記載〕豊竹呂勢太夫 〔不記載〕豊竹呂勢太夫 〔西幸2〕早稲田大学演劇博物館・114-00003-464

		08	07	06				
		絵本大功記	烏帽子折	蝦夷錦振袖雛形				
十	七	二	二		四ノ切	四ノ中	道行	四ノ切
絵本大功記 尼崎ノ段口	(欠)	絵本大功記 二ツ目	(無記)	二人静振袖雛形 衣川庵室の段	妹背山婦女庭訓 四の切	妹背山婦女庭訓 四段目中	道行恋のおだまき	妹背山婦女庭訓 四段目ノ口
絵本大功記 十冊目の口 夕顔棚	絵本大功記 再改正本 七ツ目 鷺の森の段	絵本大功記 再改正本 二ツ目 切本能寺の段	(原表紙欠)	二人静の段 衣川庵室	妹背山四之切 竹に雀 直伝正本	妹背山婦女庭訓 四段目之中 使者之段	於結城座興行 妹背山道行・恋の環 直伝正本	四の口杉酒屋 妹背山婦女庭訓 直伝正本
(無記)	竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎	豊竹若太夫・鶴沢市造	(原表紙欠)	竹本津賀太夫・鶴沢清糸	竹本むら太夫・鶴沢勝造 切竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎	竹本錦太夫・鶴沢東十郎	竹本春太夫・竹本岡太夫・竹本生駒太夫・大西東蔵・鶴沢徳次郎	竹本むら太夫・鶴沢勝造
[近世篇 1097] 1822 文政五年正月	[近世篇 1097] 1822 文政五年正月	[近世篇 1097] 1822 文政五年正月	(無記)	[近世篇 1184・1185] 1825 文政八年正月	【新出】文政七十二年	【新出】1821 文政四年三月	【新出】1821 文政四年三月	【新出】文政七十二年
(無記)	文政五壬午年「カスレ」月「カスレ」(終丁裏)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	文政四辛巳年三月吉日(終丁裏)	(無記)	(無記)
〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫(前表紙に「江戸横山町式丁目伊勢屋喜助」とあり)	〔伊勢喜3A〕中之条町歴史と民俗の博物館・唐沢栄太郎寄贈	〔伊勢喜2A〕静岡市立芹沢銈介美術館・①書籍143 (G148)、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫	〔不明〕早稲田大学演劇博物館・〒14-00003-384A	〔西幸6〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕早稲田大学演劇博物館・〒14-00003-387	〔伊勢喜2B〕国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2130	〔伊勢喜2A〕国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2128	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫	上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・048 (前表紙欠)、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕太田市立中央図書館・2259 (76-37)〔不明〕羽村市郷土博物館・中根公平家 213、神津



09	奥州安達原	二ノ切	奥州安達原 二の切	奥州安達原 二段目の切	(無記)	「補訂篇53」 1821 文政四年前半	(無記)	〔西幸5〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3B〕豊竹呂勢太夫
	三ノ切	奥州安達原 三段目ノ切	奥州安達原 名代結城孫三郎・座元竹本出水太夫 三段目の切	豊竹巴太夫直伝・三弦鶴沢勝次郎	「補訂篇53」 1821 文政四年前半	(無記)	〔不記載〕酒田市立光丘文庫・2484-1、茨城県立歴史館・塙仲雄家文書籍類 2274-7、檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 046、中之条町歴史と民俗の博物館・田村千鶴子寄贈資料 015、小諸市立小諸図書館・9124-15、上田市立図書館・花月文庫音楽 141、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜6C〕群馬県立文書館・角田光枝家文書 1293（前表紙に「板元東京横山町二丁目伊勢屋喜助」とあり、神津（前表紙に「板元東京横山町二丁目伊勢屋喜助」とあり、神津（前表紙に「板元東京横山町二丁目伊勢屋喜助」とあり）	
	四ノ切	奥州安達原 四段目の中	安達原 四の切 一つ家の段	(無記)	「補訂篇53」 1821 文政四年前半	(無記)	〔伊勢喜3A〕南相木村公民館・127	
10	近江源氏先陣館	八	近江源氏先陣館 八ツ目	近江源氏・先陣館八ツ目 再改正本	(無記)	(未詳)	(無記)	〔不記載〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・077、豊竹呂勢太夫、神津
11	置土産今織上布	上	時雨の炬燵	時雨廻炬燵 小春治兵衛紙屋の段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜1〕野田市立興風図書館・370（前表紙に「板元江戸横山町二丁目伊勢屋喜助」とあり）
12	小田館双生日記	五	小田館双生日記 五ツ目の切	小田館双日記 五段目	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2A〕国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2137
13	加々見山旧錦絵	六	加々見山旧錦絵 六ツ目	加々見山旧錦絵 六ツ目 草履打	竹本津賀太夫・鶴沢清糸	〔近世篇1121〕 1823 文政六年二月	(無記)	〔伊勢喜2A〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕埼玉県立文書館・奥貫家文書 3316、豊竹呂勢太夫

		14		15		16	
		敵討檻襖錦		桂川連理柵		仮名手本忠臣蔵	
七	かゝ見山旧錦絵 七ツ目ノ切	下	下	増補	一	二	三
		敵討檻襖錦 大 安寺の段	桂川連理柵 帯 屋の段	おはん・長右衛 門／朧の桂川 道行のだん	仮名手本忠臣蔵 大序	仮名手本忠臣蔵 二段目	仮名手本忠臣蔵 二段目
	加々見山 七ツ 目切 大字遊下 本・直伝正本所	敵討檻襖錦 直 伝正本 土手之 段	桂川連理柵 帯 屋のだん	おはん・長右衛 門／朧の桂川 再改正本 道行 恋のしがらみ	仮名・手本／忠 臣蔵大序 直伝 正本	仮名・手本／忠 臣蔵二段目 直 伝正本	仮名手本・忠臣 蔵・三段目
	カケ合竹本宮戸 太夫・竹本此太 夫・三味線鶴沢 勝次郎・大西東 造	(無記)	御名ざり 出語 豊竹古野太夫・ 野沢半造	(無記)	口竹本長戸太 夫・鶴沢清糸 切 豊竹巴太 夫・鶴沢芳次郎	口竹本政子太 夫・鶴沢徳次郎 切 竹本津賀太 夫・鶴沢清糸	竹本岡太夫・鶴 沢勝吉 竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎 竹本絹太夫・鶴 沢徳次郎
	[近世篇 1121] 1823 文政六年 三月	【新出】 1823 文 政六年七月	[近世篇 1281] 1827 文政十年 八月	(未詳)	【新出】 文政四 ―五年	【新出】 文政四 ―五年	【新出】 文政四 ―五年
		文政六癸未 年文月吉日 (終丁表)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)
	〔伊勢喜3B〕豊竹呂勢太夫 〔不明〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 115 〔西幸5〕沼津市明治史料館・原渡辺家 P028 〔西幸6〕神津 〔伊勢喜2B〕早稲田大学演劇博物館・14-00003- 008、神津年月未詳(前表紙欠) 〔伊勢喜3B〕福島県歴史資料館・日下金三郎家文書 -441、西村公一 〔不記載〕大阪音楽大学音楽博物館・二世鶴沢清八文 庫 0306 〔不記載〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 119、早稲田大学演劇博物館・14-00003-106、国立 音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2145、豊竹呂 勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕早稲田大学演劇博物館・14-00003- 109(前表紙に「正本板元江戸横山町二丁目伊勢屋喜 助」とあり) 〔伊勢喜2A〕茨城県立歴史館・外山家文書和-6-9- 36、野田市立興風図書館・372-1 〔伊勢喜2B〕早稲田大学演劇博物館・14-00003- 063A 〔伊勢喜2A〕茨城県立歴史館・外山家文書和-6-9-37 〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2A〕茨城県立歴史館・浅見家文書 1801、豊 竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕群馬県立文書館・倉品家文書 0538(前 表紙欠)						

	四	仮名手本忠臣蔵 四段目	仮名・手本／忠 臣蔵四段目	切 竹本宮戸太 夫・鶴沢勝次郎	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔西幸〕 神津 (前表紙に「正本所 馬喰町二丁目西村 幸助」とあり) 〔伊勢喜2A〕 国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文 庫 09-2147、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3B〕 国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文 庫 09-2148
	五	仮名手本忠臣蔵 五段目	仮名・手本／忠 臣蔵五段目 直 伝正本	竹本此太夫・大 西東造	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔伊勢喜2A〕 茨城県立歴史館・外山家文書と 69- 35、神津 〔伊勢喜2B〕 早稲田大学演劇博物館・11-00094
	六	仮名手本忠臣蔵 六段目口	仮名・手本／忠 臣蔵六段目	口竹本絹太夫・ 鶴沢芳次郎 切竹本氏太夫・ 鶴沢勝次郎	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔伊勢喜2A〕 埼玉県立文書館・浅見家文書 1787 〔伊勢喜2B〕 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 038、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫
	七	仮名手本忠臣蔵 七段目	忠臣蔵・七段目	かけ合・豊竹巴 太夫・竹本津賀 太夫・竹本長戸 太夫・竹本岡太 夫・竹本政子太 夫・竹本宮戸太 夫・鶴沢勝次郎	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔西幸4〕 沼津市明治史料館・原渡辺家 P036 〔伊勢喜2A〕 豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕 埼玉県立文書館・浅見家文書 1810、早 稲田大学演劇博物館・11-01639-073、香川県立 ミュージアム・近石泰秋資料 0126、神津 〔不明〕 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・106
	八	道行旅路の嫁入 忠臣蔵八段目	忠臣蔵八段目 道行旅路嫁入 再板 白酒歌	(無記)	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔伊勢喜2B〕 奥会津南郷民俗館・生活 1284
	九	仮名手本忠臣蔵 山科のだん	仮名・手本／忠 臣蔵九段目 直 伝正本	切 豊竹巴太 夫・鶴沢勝次郎	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔西幸〕 群馬県立文書館・上原成夫家文書 2147 〔伊勢喜2B〕 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 053、小諸市立小諸図書館・未整理 (前表紙欠)、神津 〔伊勢喜3A〕 檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料 100
	十	仮名手本忠臣蔵 十段目口	仮名・手本／忠 臣蔵十段目 直 伝正本	竹本此太夫・大 西東造	【新出】 文政四 ―五年	(無記)	〔西幸〕 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・114 (前 表紙に「板元馬喰町二丁目西村幸助」とあり) 〔伊勢喜2B〕 神津



17	仮名手本二度目 清書		仮名・手本／二度目 清書 山科の段	仮名・手本／二度目 清書 下之巻 山科の段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2A〕宮城県図書館、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕福島県立図書館・チ040②、国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2154 〔伊勢喜3A〕野田市立興風図書館・368-1、上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・108、豊竹呂勢太夫 〔西幸5〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・166
18	釜淵双級巴	下	釜淵双級巴 か まいりの段	釜淵双級巴 石川五右衛門 正本真伝・再版 釜いりの段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2A〕国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2155、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕茨城県立歴史館・塙仲雄家文書書籍類 2274-1、埼玉県立文書館・浅見家文書 1807、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫、神津
19	鎌倉三代記	八	鎌倉三代記 七ツ目ノ切	七ツ目切三浦別之段 鎌倉三代記 直伝正本	豊竹巴太夫・鶴沢勝次郎	【新出】1821 文政四年五月	文政四巳年五月吉日 (終丁裏)	〔伊勢喜3A〕早稲田大学演劇博物館・チ14-00003-11、神津 〔不明〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 064、上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・076
20	苧萱桑門築紫轢	五	苧萱桑門築紫轢 山の段	苧萱桑門 高野山の段	竹本浪太夫・大西東蔵	〔近世篇 1248・1249〕1826 文政九年十月	(無記)	〔不記載〕豊竹呂勢太夫
21	義士の書添	八	義士の書添 八冊目	義士の書添 八冊目	竹本津賀太夫・三味線鶴沢清糸	【新出】文政五年—天保八年	(無記)	〔伊勢喜2A〕豊竹呂勢太夫 (前表紙に「両国横山町二丁目いせや喜助板」とあり) 〔伊勢喜3A〕早稲田大学演劇博物館・チ14-00003-138 (前表紙に「両国横山町二丁目いせや喜助板」とあり)
22	草津乳母餅		草津姥ヶ餅 閻魔馬追ノ段	草津姥ヶ餅 チヤリ淨瑠璃 閻魔馬追段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・085 (前表紙に「正本板元江戸横山町二丁目西側伊勢屋喜助」とあり)、早稲田大学演劇博物館・チ14-00003-139 (前表紙に「正本板元江戸横山町二丁目西側伊勢屋喜助」とあり)
23	曲輪文章		夕きり・伊左衛門／くるわ文章 吉田屋の段	夕霧・伊左衛門／廓文章 再改正本 吉田屋之段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2B〕西村公一 (前表紙に「板元江戸馬喰町二丁目西村幸助」とあり)

24	傾城阿波の鳴門	八	傾城阿波の鳴門 八ツ目順礼の段	結城座 人形頭 取太田甚蔵 傾 城阿波の鳴門 順礼の段	太夫竹本筆太 夫・三弦野沢語 助	〔近世篇 1182・ 1183〕1825 文 政八年正月	(無記)	〔不記載〕 豊竹呂勢太夫
25	けいせい恋飛脚	下	けいせい恋飛脚 新口村の段	大薩摩座 梅 川・忠兵衛／新 口むらの段	太夫竹本播磨大 掾・三弦野沢重 五郎	〔近世篇 1184・ 1185〕1825 文 政八年正月	(無記)	〔不記載〕 茨城県立歴史館・外山家文書和-69-50 (前 表紙欠)、檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 124、群馬県立文書館・小此木千代子家文書 1483 (前 表紙欠)、豊竹呂勢太夫、神津、神津 〔不明〕中之条町歴史と民俗の博物館・請求番号なし (前表紙欠)、神津
26	源平布引滝	三ノ口	源平布引滝 三 段目の口	湖水の段 三の 口 源平布引滝	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2A〕 野田市立興風図書館・363-1 〔伊勢喜3A〕 早稲田大学演劇博物館・14-00003- 198、国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2164、西村公一 〔伊勢喜3A〕 群馬県立文書館・関縁家文書 0525
27	恋女房染分手綱	十	恋女房染分手綱 十段目	源平布引滝 三 段目の切	太夫豊竹時太 夫・三弦野沢語 助	〔新出〕文政九 年—文政十年	(無記)	〔不記載〕 檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 02、豊竹呂勢太夫 〔不明〕 神津 〔伊勢喜3A〕 早稲田大学演劇博物館・14-00003- 159
28	恋娘昔八丈	五	恋娘昔八丈 城 木屋の段	恋娘昔八丈 再 改正本 城木屋 之段	竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎	〔新出〕1825 文 政五年十月	(無記)	〔伊勢喜2B〕 早稲田大学演劇博物館・11-00051 〔不明〕 葛生伝承館・牧歌舞伎資料 45
29	国性爺合戦	七	恋娘昔八丈 鈴 の森の段	恋娘昔八丈 鈴 の森の段 大字 遊下本・直伝正 本	竹本氏太夫・鶴 沢仲助	〔新出〕1825 文 政五年十月	文政五年午 年十月吉日・ 千秋万歳楽 大叶(終丁 表)	〔不記載〕 中之条町歴史と民俗の博物館・請求番号なし (前表紙欠)、伊那市立高遠町図書館・馬嶋家文庫 708、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫、神津、神津(前 表紙欠)
29	国性爺合戦	二	国性爺合戦 二 ノ口 貝づくし	国性爺 貝づく し	竹本政子太夫・ ツレ竹本美家太 夫 三味線鶴沢徳次	〔新出〕1825 文 政五年七月	文政五年午 年文月吉 日・千秋万 歳楽(終丁	〔伊勢喜2B〕 野田市立興風図書館・358-1 (前表紙欠) 〔板元馬喰町二丁目西村幸助〕とあり 〔不記載〕 早稲田大学演劇博物館・14-00003-384B

34	33	32	31	30	
姻袖鏡	軀山姥	木下蔭狭間合戦	碁太平記白石噺	御所桜堀川夜討	
五	二	九	七	三	三
菊池・大友／姻袖鏡 庵室の段	軀山姥 二段目の切	木下蔭狭間合戦 九ツ目	碁太平記白石噺 七ツ目	御所桜堀川夜討 三ノ切	国性爺合戦 三段目ノ切
菊池・大友／姻袖鏡 再改正本	軀山姥 煙草売の段	木下蔭狭間合戦 九ツ目	碁太平記白石噺 七ツ目廊の段	御所桜堀川夜討 弁慶上使段 再改正本 新版	国性爺 紅粉流之段
太夫竹本西太夫・三弦鶴沢清	座元豊竹絹太夫・鶴沢福松	竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎	竹本宮戸太夫・大西東蔵	(無記)	郎 竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎
(天保七年八月)	〔近世篇1242・1243〕1826文政九年十月	【新出】文政六―七年	〔近世篇1141〕1823文政六年十月に該当するか	(未詳)	【新出】1822文政五年七月
(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	裏 文政五年七月吉日・千秋万歳楽(終丁裏)
〔伊勢喜3A〕早稲田大学演劇博物館・14-00003-207	〔西幸〕鈴木俊幸(前表紙に「板元馬喰町二丁目西村幸助」とあり)、豊竹呂勢太夫(前表紙に「板元馬喰町二丁目西村幸助」とあり)〔不記載〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・075、早稲田大学演劇博物館・14-00003-205、南相木村公民館・追146、神津	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕葛生伝承館・牧歌舞伎資料57 〔伊勢喜3B〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料012	〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・041 〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・062	〔伊勢喜2A〕野田市立興風図書館・023-1

38	37	36		35	
新うすゆき物語	浄瑠璃万歳	生写朝顔話		花王草紙楓短冊	
		四			
新薄雪物語 鍛冶屋の段	御祝儀寿万歳	朝顔日記 浜松のどん		花王草紙楓短冊 三の切	
新薄雪物語 鍛冶屋之段	寿万歳 御祝儀 浄瑠璃	増・補／朝貞日記 浜松小家の段		花王草紙楓短冊 藤吾住家段	庵室の段
竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎	(無記)	(無記)		竹本播磨太夫・花沢伊左衛門	糸
(未詳)	(未詳)	(未詳)		[近世篇 2036] 1853 嘉永六年 正月	
(無記)	(無記)	(無記)		(無記)	
〔不記載〕 豊竹呂勢太夫（本文末に「正本所江戸」とのみ残る）	〔伊勢喜3A〕 神津（前表紙に「板元江戸横山町二丁目伊勢屋喜助」とあり）	〔伊勢喜2B〕 埼玉県立文書館・浅見家文書1776（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、埼玉県立文書館・浅見家文書1781（前表紙欠）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）		〔伊勢喜3D〕 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・056 上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・066、西村公一	



39	神靈矢口渡	二	神靈矢口渡 二	神靈矢口渡 再	(無記)	【新出】1823文 政六年二月	(無記)	〔伊勢喜2A〕奥会津南郷民俗館・生活1284 〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・081
		三	神靈矢口渡 三 ノ切	神靈矢口渡 再 改正本 三段目 ノ切・兵庫館	竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎	【新出】1823文 政六年二月	(無記)	〔伊勢喜2A〕野田市立興風図書館・371-1、神津 〔伊勢喜3A〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料089
40	菅原伝授手習鑑	四	神靈矢口渡 四 之切	神靈矢口渡四ノ 切 涉場のだん	竹本津賀太夫・ 鶴沢清糸	【新出】1823文 政六年二月	文政六末年 二月吉日・ 於結城座興 行（後見返 し）	〔不記載〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・066、 神津 豊竹呂勢太夫
		三	菅原伝授手習鑑 三ノ切	菅原伝授 桜丸 切腹の段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔不記載〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・066、 豊竹呂勢太夫
41	関取千両幟	四	菅原伝授手習鑑 四段目	菅原伝授手習鑑 再改正本 寺子 屋の段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔西幸・伊勢喜〕神津（後ろ表紙に「板本改 横山町 式丁目・伊勢屋喜助」とあり） 〔伊勢喜2A〕小諸市立小諸図書館・912.4-12 〔伊勢喜2B〕神津（前表紙に「正本板元江戸横山町 二丁目伊勢屋喜助」とあり） 〔伊勢喜3A〕弘前市立図書館・W768.4-014（前表紙 に「正本板元江戸横山町二丁目伊勢屋喜助」とあり）、 豊竹呂勢太夫（前表紙に「正本板元江戸横山町二丁目 伊勢屋喜助」とあり） 〔伊勢喜未詳〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料106（前表紙に「正本板元江戸横山町二丁目伊勢 屋喜助」とあり）
		二	関取千両幟 二 段目	結城座 人形頭 取太田甚蔵 関 取千両幟角力の 段 再改正本	太夫竹本綱太 夫・三弦豊沢扇 左衛門	〔近世篇 1182・ 1183〕1825文 政八年正月	(無記)	〔伊勢喜2A〕鳥越文庫、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕国立劇場・D2-4／特12／001 〔伊勢喜3B〕国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文 庫09-2174
42	関取二代勝負附 秋津島内之段		関取二代勝負附 秋津島内之段	関取二代勝負附 秋津島内段 再 改正本	竹本染太夫・野 沢語助	〔近世篇 1264〕 1827文政十年 三月	(無記)	〔不記載〕群馬県立文書館・田中光雄家文書0004
43	撰州合邦辻 下ノ切	下	合邦辻 下の巻 ノ切	撰州合邦辻 直 伝正本所	(無記)	(未詳)	(無記)	〔西幸〕野田市立興風図書館 369-1（前表紙に「版元 馬喰町二丁目西村幸助」とあり）

48	47	46	45	44	
田村麿鈴鹿合戦	玉藻前曝袂	伊達競阿国戯場	太平記忠臣講釈	染模様妹背門松	
四	三	九	七	下	下
勢州阿漕浦 治住家ノ段	三国妖婦伝 道春館ノ段	伊達競阿国戯場 九ツ目切 土橋 の段	道行人目の重縫 忠臣講釈	染模様妹背門松 質屋の段	おそめ久まつ 妹背・門松／質 店の段
勢州阿漕浦 再 改正本 平治住 家段	三国・妖婦伝／ 道春館の段 三 段目ノ切	伊達競阿国戯場 再改正本 九ツ 目切 土橋の段	忠臣講釈 道行 人目の重縫 再 改正本	妹背門松 お文 のどん 直伝正 本	
竹本綱太夫・豊 沢仙左衛門	太夫竹本絹太 夫・三弦鶴沢福 松	竹本氏太夫・鶴 沢仲助	豊竹巴太夫・鶴 沢勝次郎	(無記)	(無記)
【新出】文政七 —八年	【新出】1826文 政九年十月初後 か	【新出】1825文 政五年四月	【新出】文政四 —五年	(未詳)	(未詳)
(無記)	(無記)	文政五壬午 歳卯月吉日 千秋万歳楽 (終丁裏 表)	(無記)	(無記)	(無記)
〔伊勢喜2B〕福島県立図書館・ナ1062、常陸大宮市 歴史民俗資料館・美和山村開発センター史料 77、早 稲田大学演劇博物館・ナ14-00003-244、名古屋市博物	〔伊勢喜2A〕香川県立ミュージアム・近石春秋資料 027、神津 〔伊勢喜2B〕西村公一、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太 夫 〔伊勢喜3A〕神津 20081016 〔不記載〕埼玉県立文書館・浅見家文書 1802	〔不記載〕群馬県立文書館・湯本正喜家文書 1039、上 三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・075、豊竹呂勢太 夫、豊竹呂勢太夫	〔伊勢喜2A〕早稲田大学演劇博物館・ナ11-01639- 075、国立音楽大学附属図書館・竹内道敬文庫 09-2177、真田宝物館 〔伊勢喜2B〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 096、埼玉県立文書館・浅見家文書 1795 〔不記載〕奥会津南郷民俗館・生活 1284-8	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫	〔不記載〕豊竹呂勢太夫 〔義太夫本問屋〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員 会・084 野田市立興風図書館・362-1

49	壇浦兜軍記	三	琴責の段	檀浦兜軍記 琴責の段	カケ合豊竹巴太夫・竹本宮戸太夫・竹本津賀太夫。三弦鶴沢勝次郎・三曲鶴沢清糸	【新出】1822文 政五年四月	文政五壬午歳卯月吉日千秋万歳楽（終丁裏）	館・和き015③、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫、神津 〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫 〔不明〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・057
50	近頃河原達引		おしゆん・伝兵衛／近頃河原達引 堀川の段	近頃河原の達引 おしゆん・伝兵衛／堀川の段 直伝正本所	竹本むら太夫・鶴沢勝造	【新出】文政七十二年	（無記）	〔伊勢喜2B〕真田宝物館 〔伊勢喜3A〕野田市立興風図書館・373-1 〔不明〕豊竹呂勢太夫・4062
51	忠臣競四谷怪談		忠臣競四谷怪談 羽宮住家ノ段	忠臣競四ツ谷怪談 羽宮屋舗段 新浄瑠璃	竹本津賀太夫・鶴沢清糸	【新出】	（無記）	〔伊勢喜3A〕早稲田大学演劇博物館・14-00003-304
52	蝶花形名歌島台	八	蝶花形名歌島台 八冊目	蝶花形名歌島台 再改正本 八冊目	（無記）	（無記）	（無記）	〔西幸6〕沼津市明治史料館原渡辺家 P029 〔伊勢喜2A〕神津、神津 〔伊勢喜2B〕群馬県立文書館・丸山知良家文書 0066（前表紙欠）、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕南相木村公民館・追148、神津 〔不明〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料 110
53	裙重浪花八文字	六	恨鯨鞘 鱧谷ノ段	棲重恨鯨鞘 鱧谷のどん 直伝正本	竹本津賀太夫・鶴沢清糸	【新出】1823文 政六年五月	文政六癸未歳五月吉日・結城座御操（後見返し）	〔不記載〕豊竹呂勢太夫（本文末年記の下に「竹本此太夫直伝・三味線大西東造」とあり）、豊竹呂勢太夫（本文末年記の下に「竹本此太夫直伝・三味線大西東造」とあり） 〔不明〕神津（前表紙欠。本文末年記の下に「竹本此太夫直伝・三味線大西東造」とあり）

60	59	58			57	56	55	54	
艶容女舞衣	八陣守護城	箱根靈驗壁仇討			夏浴衣清十郎染	那須与市西海硯	道中膝栗毛	道成寺現在蛇鱗	
下	八	十一	十	九		三		四	
艶容女舞衣 の巻の切	八陣守護城	箱根靈驗壁仇討 瀧の段	靈驗壁仇討 十冊目	箱根靈驗 江浦 屋敷のだん	おなつ・清十郎 ／寿連理の松 湊町のだん	那須与一西海硯 三段目の切	喜太八・弥二郎 兵衛／道中膝栗 毛 赤坂並木の 段	清姫日高川の段	
増・補／艶容女 舞衣 再改正本	八陣守護城 正 清館の段	箱根靈驗 壁仇 討 十一段目	壁仇討 饒別の 段 再改正本 十段目	箱根靈驗壁仇討 九冊目	寿連理の松 お 夏・清十郎／湊 町のたん	那須与市 西海 硯 再改正本所 化生屋舗の段	新板ちやり 道 中膝栗毛 赤阪 並木段	道成寺現在蛇鱗 再改正本 日高 川の段	
(無記)	竹本染太夫・野 沢語助	竹本津賀太夫・ 鶴沢清糸	(無記)	(無記)	豊竹時太夫・鶴 沢蟻鳳勝遊	(無記)	(無記)	(無記)	
(未詳)	〔近世篇1445・ 1446〕1832天 保二年正月	【新出】1822文 政五年七月	【新出】1822文 政五年七月	【新出】1822文 政五年七月	〔近世篇1034〕 1819文政二年 四月	(無記)	(無記)	(無記)	
(無記)	(無記)	文政五壬午 歳文月吉 日・千秋万 歳楽(終丁 裏)	(無記)	文政八乙酉 年夏月再板 (終丁裏)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	
〔伊勢喜3A〕神津(前表紙に「正本板元江戸横山町 二丁目伊勢屋喜助」とあり)	〔不記載〕豊竹呂勢太夫	〔伊勢喜2B〕群馬県立文書館・角田光枝家文書 121、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔不明〕豊竹呂勢太夫(前後表紙欠)	〔伊勢喜3A〕飯田市美術館・上古田唐沢家文書 2236、豊竹呂勢太夫(本文末の年記かすかに「文政 八乙」と読める)	〔伊勢喜2B〕早稲田大学演劇博物館・211-01736 2274-5、豊竹呂勢太夫	〔西幸1〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2A〕松茂町歴史民俗資料館・中西仁智雄氏 旧蔵ゆ182	〔伊勢喜2B〕神津、豊竹呂勢太夫	〔伊勢喜2B〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 072	〔不記載〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・079 とあり)	〔不記載〕神津(本文末年記の下に「竹本此太夫直伝」 とあり)



61	花櫛会稽褐布染	四	花櫛会稽褐布染 四冊目	酒屋の段 官次郎切腹の段 花櫛・四ツ目	口 竹本長戸太 夫・鶴沢勝吉 切 豊竹巴太 夫・鶴沢勝次郎	【新出】1833文 政五年閏正月	文政五壬午 歳閏正月吉 日・於結城 座興行・大 入叶（終丁 裏）	〔伊勢喜2A〕神津 〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料123
	花櫛会稽褐布染 六ツ目ノ切	六	花櫛会稽褐布染 六ツ目ノ切	花櫛六ツ目ノ切 船揚げの段	竹本氏太夫・鶴 沢仲助	【新出】1833文 政五年閏正月	（無記）	〔伊勢喜2B〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料009 〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 112
	花櫛会稽褐布染 八ツ目ノ切	八	花櫛会稽褐布染 八ツ目ノ切	花櫛八ツ目 本屋敷の段	切 竹本宮戸太 夫・鶴沢勝次郎 奥かけ合 竹本 宮戸太夫・竹本 津賀太夫	【新出】1833文 政五年閏正月	文政五壬午 年閏正月吉 日（終丁裏）	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫、神津 〔西幸・伊勢喜〕神津（後ろ表紙に「板本改 横山町 式丁目伊勢屋喜助」とあり） 〔伊勢喜1〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 171（〔西村VI〕の板元名を削る） 〔伊勢喜2B〕弘前市立図書館・W768.4.047 〔伊勢喜3A〕早稲田大学演劇博物館・11-01112
62	花上野誉の石碑	四	花上野誉の石碑 志渡寺の段	金毘羅御利生 版・元／「空白」 花上野誉の石碑 再改正本 志渡 寺の段	（無記）	（未詳）	（無記）	〔伊勢喜3B〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料017、南相木村公民館・追147、美濃加茂市民 ミュージアム・8290、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2A〕早稲田大学演劇博物館・114-00003- 32（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助板」と あり） 〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町 二丁目伊勢屋喜助板」とあり） 〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 009（前表紙に「江戸横山町二丁目伊勢屋喜助板」と あり）
63	花雲佐倉曙	中	花雲佐倉曙 惣 五郎住家ノ段	花雲佐倉曙 新 版 当吾住家段	（無記）	（未詳）	（無記）	

64	播州皿屋舗	下	播州皿屋敷 青山館の段 播	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2B〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・092 埼玉県立文書館・浅見家文書1805
65	彦山権現誓助剣	六	〔彦山権〕現誓助剣 六ツ目	〔竹〕本宮戸太夫・〔鶴沢〕勝次郎	【新出】文政六 一七年	(無記)	〔不記載〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本資料127
		七	彦山権現誓助剣 七ツ目	(無記)	【新出】文政六 一七年	(無記)	〔伊勢喜2B〕神津（前表紙に「板元 馬喰町二丁目 西村幸助」とあり）
		九	彦山権現誓助剣 九ツ目毛谷村の段	竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎	【新出】文政六 一七年	(無記)	〔西幸5〕山形県立博物館教育資料館・917001-056-2 〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫
66	鷗山姫舎松	三ノ切	中将姫雪責の段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・116（前表紙に「東京横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）、豊竹呂勢太夫（前表紙に「東京横山町二丁目伊勢屋喜助版」とあり）
67	姫小松子日の遊	二ノ切	姫小松二段目 二段目赦免状	竹本宮戸太夫・大西東造	【新出】文政六 一七年	(無記)	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫
		三ノ切	俊寛島物語 姫小松三ノ切	竹本宮戸太夫・鶴沢勝次郎	【新出】文政六 一七年	(無記)	〔不記載〕豊竹呂勢太夫
68	日吉丸稚桜	三ノ切	日吉丸稚桜 三段目の切	太夫竹本綱太夫・三弦野沢語助	【新出】文政七 一八年	(無記)	〔伊勢喜2B〕埼玉県立文書館・浅見家文書1775、真田宝物館
69	ひらかな盛衰記	二ノ切	ひらかな盛衰記 二ノ切	竹本津賀太夫・鶴沢清糸	【新出】文政五 年 天保八年	(無記)	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫
		三ノ中	ひらかな盛衰記 笹引の段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔西幸〕香川県立ミュージアム・近石泰秋資料0124（前表紙に「馬喰町二丁目西村幸助板」とあり）
		三ノ切 前半	ひらかな盛衰記 三段目	(無記)	(未詳)	(無記)	〔不記載〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・078 〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫

70						
本朝廿四孝						
三ノ切 後半	ひらかな盛衰記 逆櫓之段	ひらかな盛衰記 三之切 逆櫓の 段	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜3A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・039
四ノ中	ひらかな盛衰記 無間鐘の段	再改正本 平仮 名盛衰記 四ノ 中 むけん	(無記)	(未詳)	(無記)	〔伊勢喜2A〕野田市立興風図書館・367-1 (前表紙に「馬喰町四丁目伊世屋万吉板」とあり)
二ノ切	本朝廿四孝 二 段目ノ切	本朝廿四孝二ノ 切 直伝正本ノ 再・改 勝頼切 腹段	竹本氏太夫・鶴 沢勝次郎	【新出】 文政六 十七年	(無記)	〔伊勢喜2B〕大阪市立中央図書館・清六文庫0312、 豊竹呂勢太夫
三ノ口	本朝廿四孝 三 段目の口	結城座 本朝廿 四孝 三段目の 口	竹本此太夫・大 西東造	【新出】 文政七 十八年	(無記)	〔伊勢喜2A〕豊竹呂勢太夫
三ノ中	本朝廿四孝 三 段目の中	本朝廿四孝 三 ノ中 直伝正本 再改	豊竹若太夫・鶴 沢市造	【新出】 文政六 十七年	(無記)	〔西幸5〕豊竹呂勢太夫
三ノ切	本朝廿四孝 三 段目の中	結城座 本朝廿 四孝 三段目ノ 中	竹本此太夫・大 西東造	【新出】 文政七 十八年	(無記)	〔伊勢喜2B〕神津 〔不明〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・169
四ノ切	本朝廿四孝 四 段目の切	本朝廿四孝四ノ 切 直伝正本	竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎	【新出】 文政六 十七年	(無記)	〔伊勢喜2A〕野田市立興風図書館・374-1 〔伊勢喜2B〕埼玉県立文書館・浅見家文書 1806、国 立音楽大学図書館・竹内道敬文庫 09-2203 〔伊勢喜3A〕美濃加茂市民ミュージアム・11699、 人形劇の図書館
						〔西幸IV〕沼津市明治史料館・原渡辺家 P039 〔西幸6〕神津 〔伊勢喜2A〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・ 二、鈴木俊幸、豊竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕群馬県立文書館・丸山知良家文書 0065 (前表紙欠) 〔伊勢喜3A〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料 014 (前表紙欠)、早稲田大学演劇博物館・11-01635

71	三日太平記	五ノ切	出世太平記 本 能寺の段	頭取太田甚蔵 出世太平記 再 改正本 五ツ目 本能寺之段	太夫竹本むら太 夫・三弦鶴沢勝 造	【新出】1826文 政九年正月	(無記)	〔不記載〕群馬県立文書館・小此木千代子家文書 2770、神津
		九ノ切	出世太平記 九 段目	出世太平記 松 下住家の段 再 改正本所	太夫竹本岡太 夫・三弦鶴沢勝 吉太夫竹本津賀 太夫・三弦鶴沢 清糸	【新出】1826文 政九年正月	時文政九年 丙戌正月 (終丁裏)	〔西幸3〕神津
		出世太平記 九 ツ目ノ切	出世太平記 松 下住家の段 再 改正本所	太夫竹本岡太 夫・三弦鶴沢勝 吉太夫竹本津賀 太夫・三弦鶴沢 清糸	【新出】1826文 政九年正月	時文政九年 丙戌正月 (終丁裏)	〔伊勢喜2B〕埼玉県立文書館・浅見家文書 1786、西 村公一 〔伊勢喜2B〕弘前市立図書館・W768.4-053 〔不明〕上三原田歌舞伎舞台操作伝承委員会・040 (前 後表紙欠)	
72	迎駕籠死期茜染		迎駕籠知死期茜 染 聚楽町ノ段	迎・駕／梅の由 兵衛 再改正本 所 聚楽町の段	太夫竹本古野太 夫・三弦鶴沢勝 造	【新出】文政七 —十年秋以前	(無記)	〔伊勢喜2A〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕神津 20120712 〔伊勢喜3A〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料 015 〔不明〕鈴木俊幸 (伊勢喜板の奥付一行目のみを残し て破損)
73	伽羅先代萩	三	伽羅先代萩 三 ツ目	再改正本 先代 萩 毒茶のだん	竹本組太夫・鶴 沢芳次郎	〔近世篇 1148〕 1824文政七年 正月	(無記)	〔伊勢喜2A〕早稲田大学演劇博物館・V14-00003- 305 〔伊勢喜2B〕早稲田大学演劇博物館・V11-01639- 073
		六ノ口	伽羅先代萩 六 ツ目の口	伽羅先代萩 再 改正本 六ツ目 口・竹間の段	(無記)	〔近世篇 1148〕 1824文政七年 正月	(無記)	〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫
		六ノ切	伽羅先代萩 六 ツ目の切	伽羅先代萩 六 ツ目御殿之段	竹本むら太夫・ 鶴沢勝造	〔近世篇 1148〕 1824文政七年 正月	(無記)	〔西幸3〕神津 〔西幸5〕神津 〔不記載〕山形県立博物館教育資料館・917001-056-1 〔伊勢喜2A〕小諸市立小諸図書館・912.4-09 〔伊勢喜2B〕埼玉県立文書館・浅見家文書 1809、豊 竹呂勢太夫、豊竹呂勢太夫、神津、神津 (前表紙欠) 〔伊勢喜3A〕弘前市立図書館・W768.4-043、神津

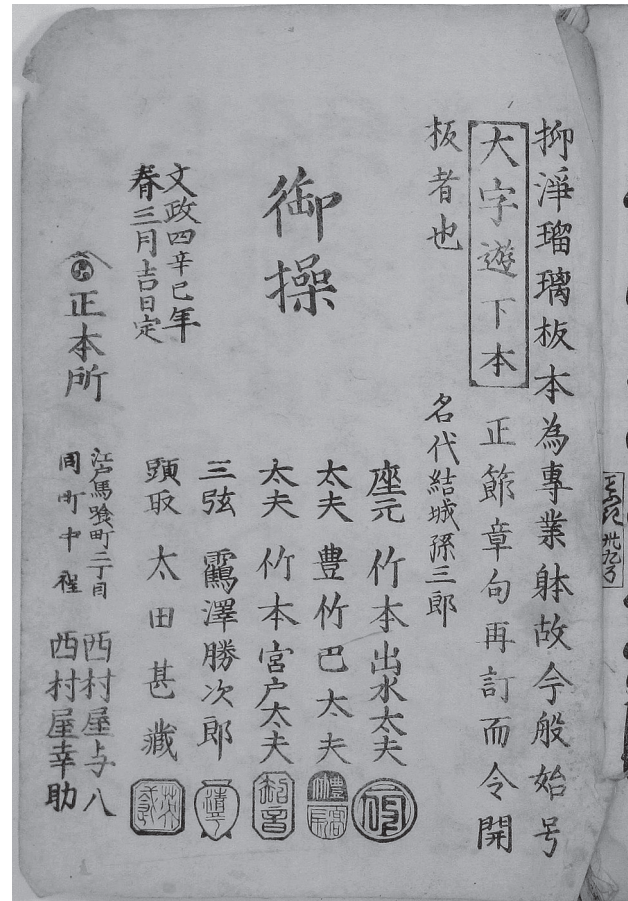


74	75	76	77	78	79
梟狩剣本地	弓勢智勇湊	義経腰越状	義経千本桜	義仲勲功記	蘭奢待新田系図
三ノ切	二ノ切	三ノ切	二ノ中	五	三ノ切
楓狩剣本地 三 段目		義経腰越状 三 段目	義経千本桜 二 段目ノ中	義経千本桜 四 ノ切	蘭奢待新田系図 三 段目
紅葉狩剣本地 艾屋の段	灘右衛門物語之 段 再板 弓勢 二ノ切	〔南〕蜜鉄・〔後 藤〕目貫／生酔 段 〔焼失〕	義経千本桜 直 伝正本 二段目 之中・渡海屋の 段	義経千本桜 三 段目之切・鮎屋 の段	蘭奢待 三段目
(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	竹本宮戸太夫・ 鶴沢勝次郎	豊竹巴太夫・鶴 沢勝次郎
【新出】1882文 政八年五月	(未詳)	(未詳)	【新出】1882文 政五年三月	【新出】1882文 政五年三月	【新出】文政四 十五年
峇文政八乙 西仲夏吉日 (終丁裏)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)
〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫	〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫	〔伊勢喜3A〕檜枝岐村歴史民俗資料館・歌舞伎台本 資料126	〔伊勢喜2B〕豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町 二丁目・板元伊勢屋喜助」とあり）、神津（前表紙に 「江戸横山町二丁目・板元伊勢屋喜助」とあり） 〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫（前表紙に「江戸横山町 二丁目・板元伊勢屋喜助」とあり）	〔西幸〕神津（終丁裏に「正本板元馬喰町二丁目西村 幸助」とあり） 〔伊勢喜2A〕群馬県立文書館・大谷典子家文書 0080、豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜2B〕神津 20120914	〔伊勢喜2A〕豊竹呂勢太夫 〔伊勢喜3A〕神津

80	和田合戦女舞鶴	三ノ切	和田合戦女舞鶴 三ノ切	和田合戦女舞鶴 三之切・市若切 腹ノ段	豊竹巴太夫・鶴 沢勝次郎	【新出】一〇三〇文 政五年閏正月	文政五壬午 歳閏正月吉 日（終丁裏）	〔伊勢喜3A〕豊竹呂勢太夫
----	---------	-----	----------------	---------------------------	-----------------	---------------------	--------------------------	---------------

奥付番号一覧

〔西幸1〕 豊竹呂勢太夫「寿連理の松」



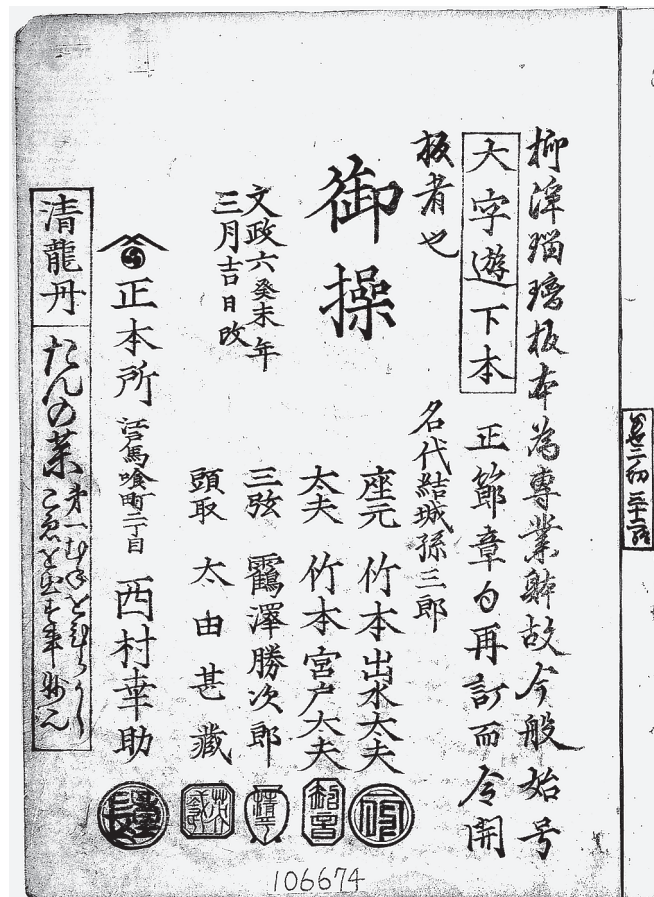
抑淨瑠璃板本為專業體故今般始号  
大字遊下本正節章句再訂而令開  
板者也 名代結城孫三郎

御操

文政四年己年  
春三月吉日定

正本所 江戸馬喰町二丁目 西村屋幸助  
同町中程

〔西幸2〕 早稲田大学演劇博物館「妹背山婦女庭訓」



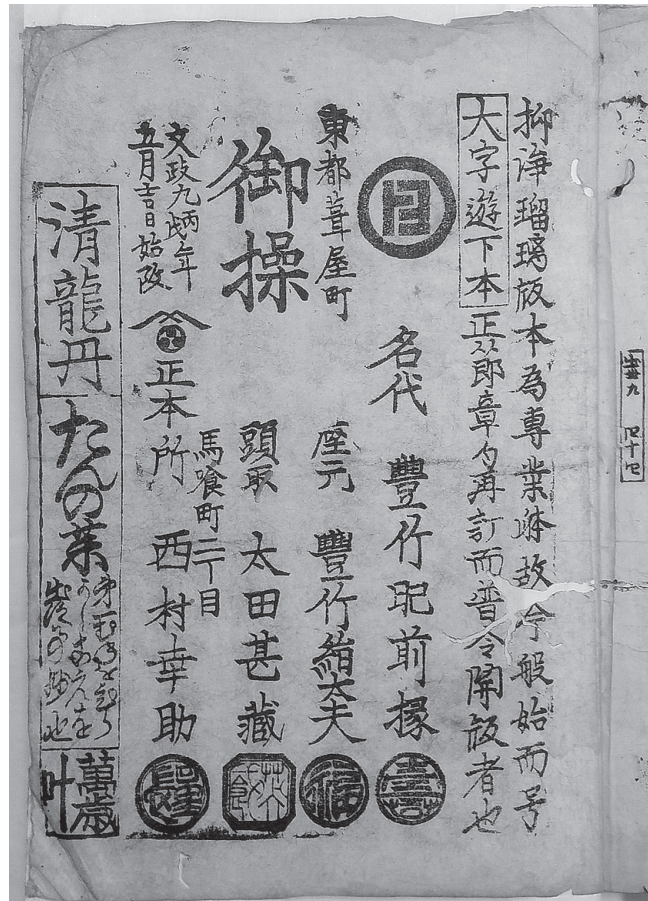
抑淨瑠璃板本為專業體故今般始号  
大字遊下本正節章句再訂而令開  
板者也 名代結城孫三郎

御操

文政六癸未年  
三月吉日改

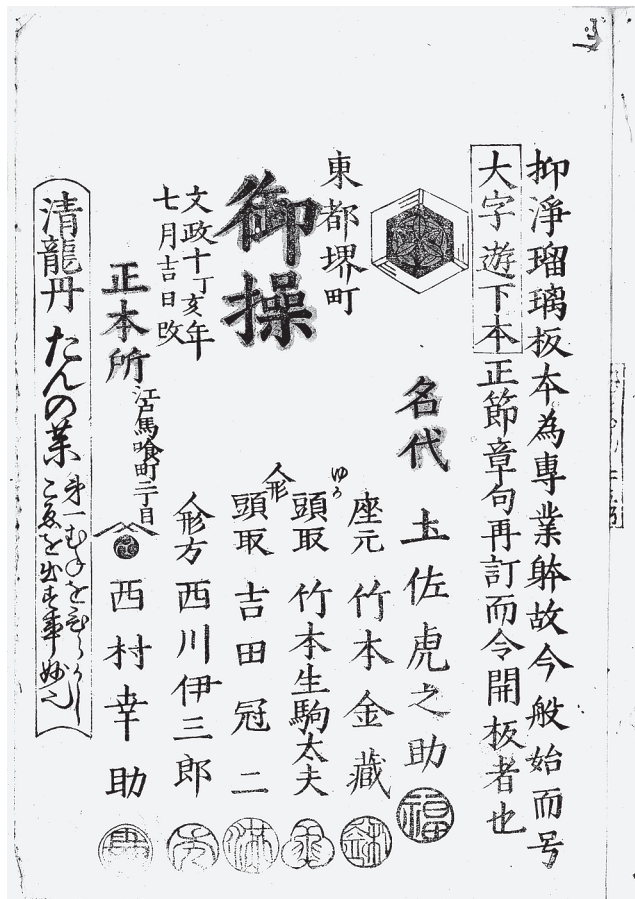
正本所 江戸馬喰町二丁目 西村屋幸助  
清龍丹 たんの葉 第一むねをひらかし  
こゑを出す事妙也





抑淨瑠璃板本為專業体故今般始而号  
大字遊下本正節章句再訂而令開板者也  
名代豊竹肥前掾  
東都葺屋町 座元 豊竹絹太夫  
御操 頭取 太田甚藏  
文政九丙戌年 馬喰町三丁目  
五月吉日始改 西村屋幸助  
正本所  
清龍丹 たんの葉 第一むねをひら 万歳  
かしこえを  
出す事妙也 叶

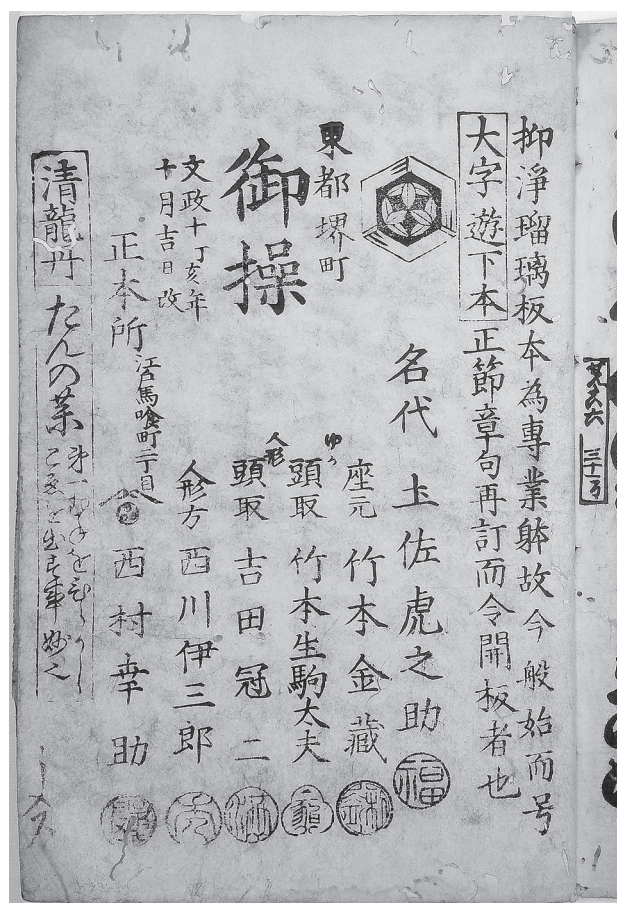
江戸板六行本「大字遊下本」の効用



抑淨瑠璃板本為專業体故今般始而号  
大字遊下本正節章句再訂而令開板者也  
名代土佐虎之助  
東都堺町 座元 竹本金藏  
御操 頭取 竹本生駒太夫  
文政十丁亥年 人形頭取吉田冠二  
七月吉日改 人形方西川伊三郎  
正本所 江戸馬喰町三丁目 西村幸助  
清龍丹 たんの葉 第一むねをひらかし  
こゑを出す事妙也



〔西幸5〕 神津「伽羅先代萩」



抑淨瑠璃板本為專業跡故今般始而号  
大字遊下本正節章句再訂而令開板者也

名代土佐虎之助

座元竹本金藏

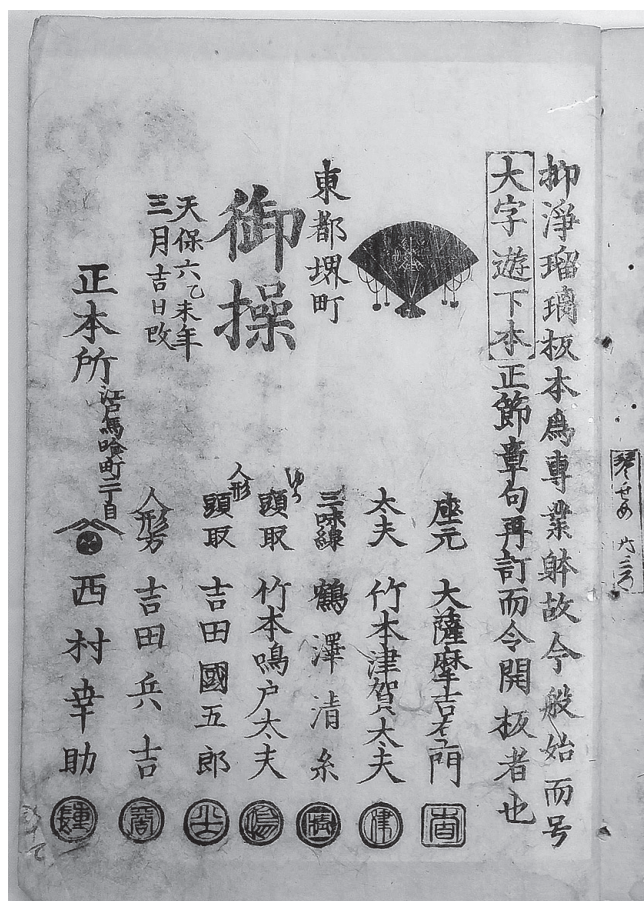
東都堺町  
御操  
ゆか頭取竹本生駒太夫  
人形頭取吉田冠二

文政十丁亥年  
十月吉日改  
人形方西川伊三郎

正本所 江戸馬喰町二丁目 西村幸助

清龍丹 たんの薬  
第一むねをひらかし  
こゑを出す事妙也

〔西幸6〕 神津「琴責の段」



抑淨瑠璃板本為專業跡故今般始而号  
大字遊下本正節章句再訂而令開板者也

座元大薩摩吉老門

太夫竹本津賀太夫

三味線鶴澤清糸

東都堺町  
御操  
ゆか頭取竹本鳴戸太夫  
人形頭取吉田國五郎

天保六乙未年  
三月吉日改  
人形方吉田兵吉

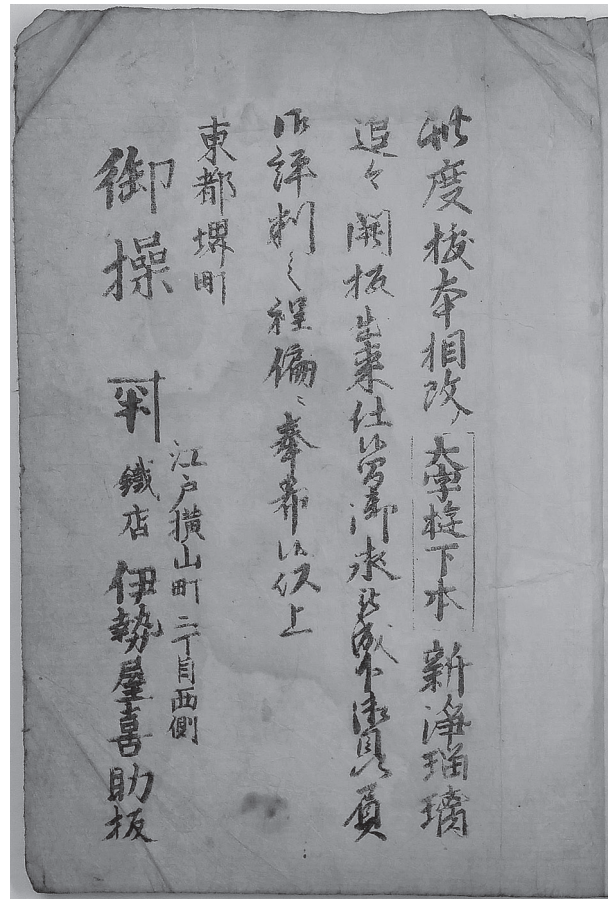
正本所 江戸馬喰町二丁目 西村幸助



〔伊勢喜1〕 (2)頁〔写真4〕を参照のこと。

板本改  
横山町式丁目  
伊勢屋喜助

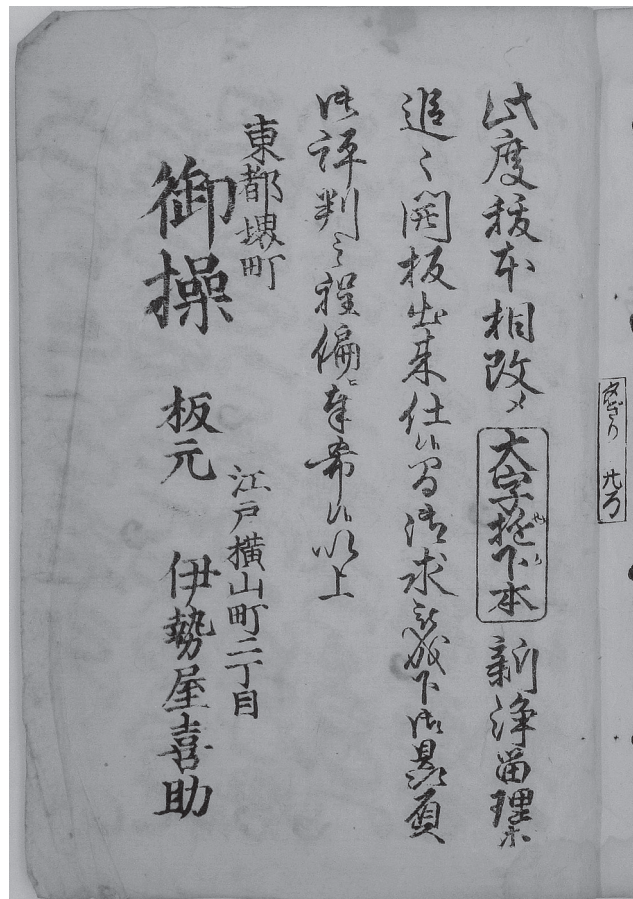
〔伊勢喜2A〕 神津「蝶花形名歌島台 八冊目」



此度板本相改メ太字遊下本新淨瑠璃  
追々開板出来仕候間御求被成下御最貞  
御評判之程偏ニ奉希候以上  
東都堺町 江戸横山町二丁目西側  
鐵店 伊勢屋喜助板  
御操

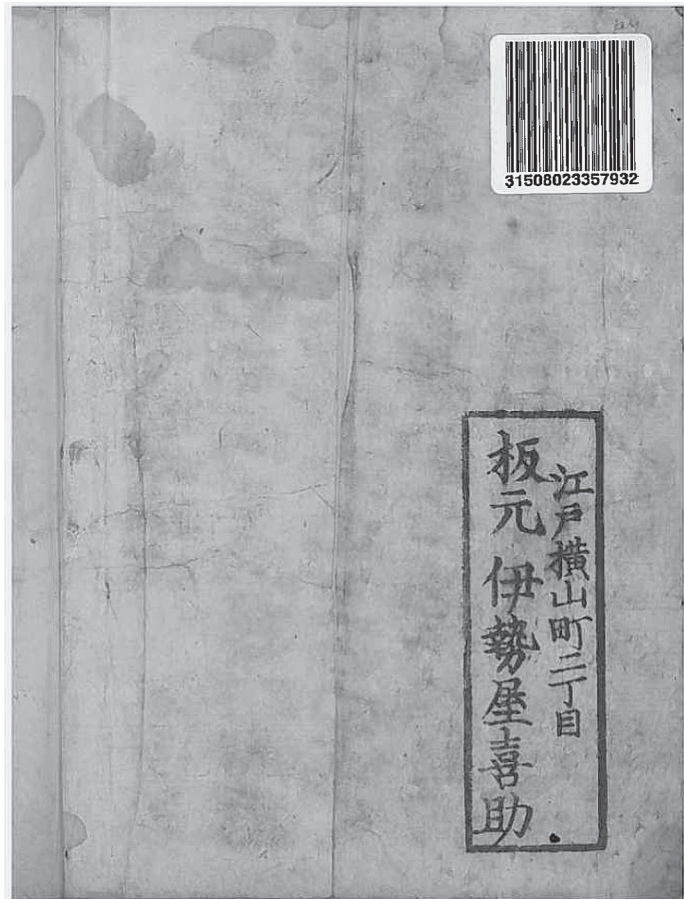
江戸板六行本「太字遊下本」の効用

〔伊勢喜2B〕 西村公一氏「くるわ文章 吉田屋の段」



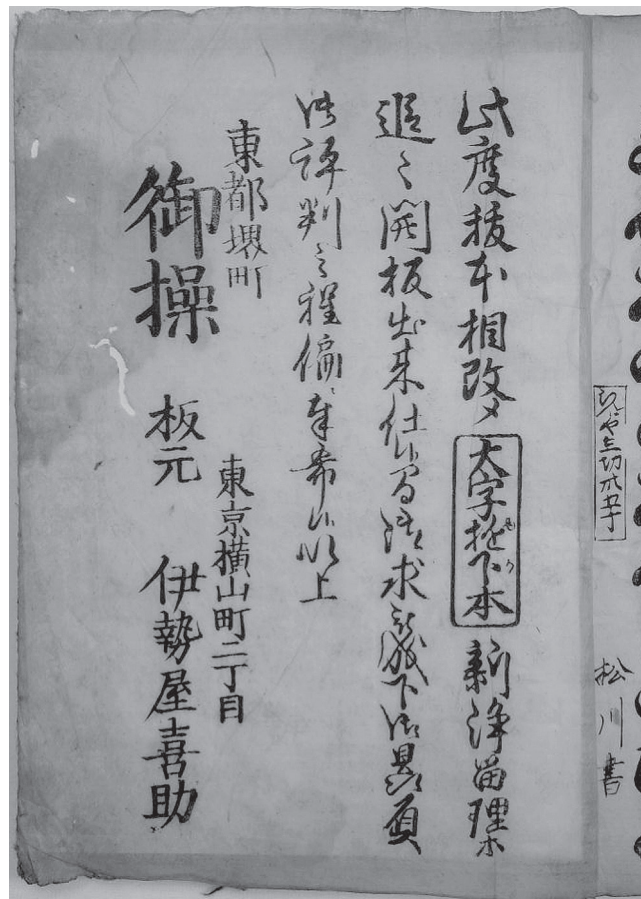
此度板本相改メ太字遊下本新淨瑠璃等  
追々開板出来仕候間御求被成下御最貞  
御評判之程偏ニ奉希候以上  
東都堺町 江戸横山町二丁目  
板元 伊勢屋喜助  
御操

〔伊勢喜2C〕 オーストラリア国立図書館「伊賀越道中双六 沼津の段」



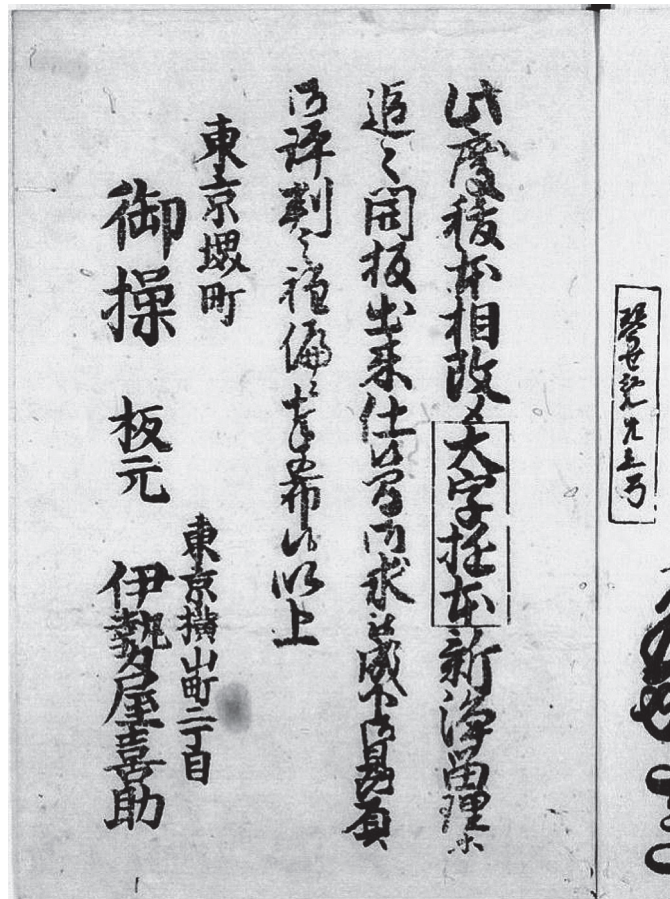
江戸横山町二丁目  
板元 伊勢屋喜助

〔伊勢喜3A〕 神津「蘭奢待新田系図 三段目」



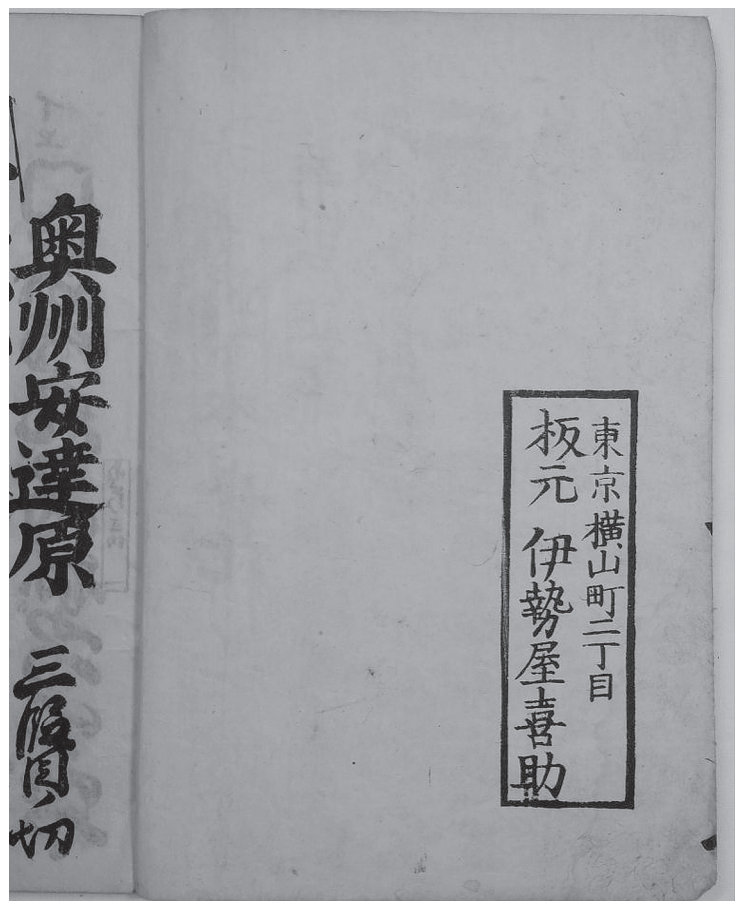
此度抜本相改メ大字遊下本新淨留理等  
追々開板出来仕候間御求被成下御鼻肩  
御評判之程偏ニ奉希候以上  
東都堺町 板元 伊勢屋喜助





此度板本相改メ大字遊本新淨留理等  
追々開板出来仕候間御求被成下御蟲貞  
御評判之程偏ニ奉希候以上  
東京横山町二丁目  
板元 伊勢屋喜助

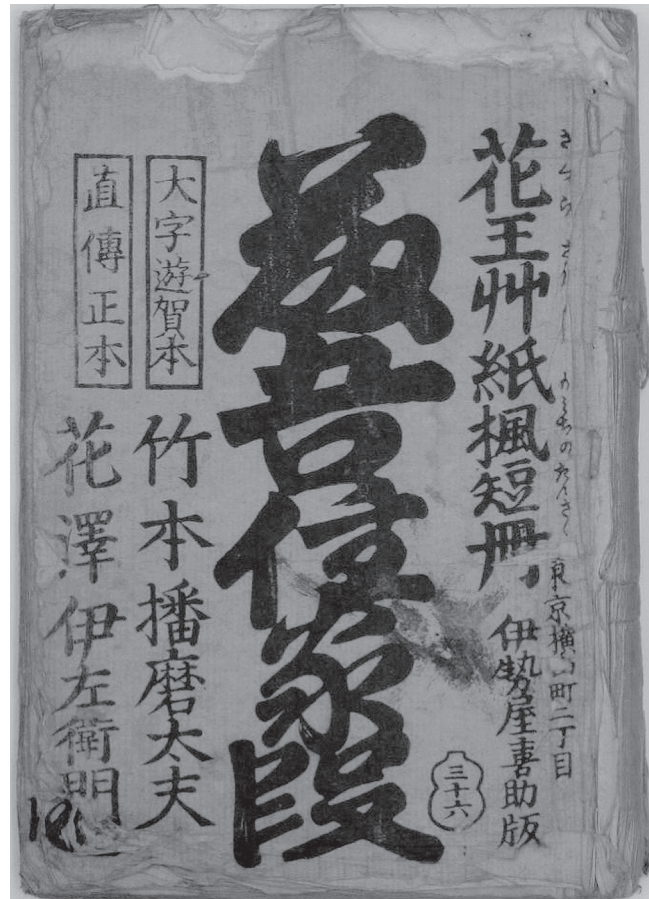
江戸板六行本「大字遊下本」の効用



東京横山町二丁目  
板元 伊勢屋喜助

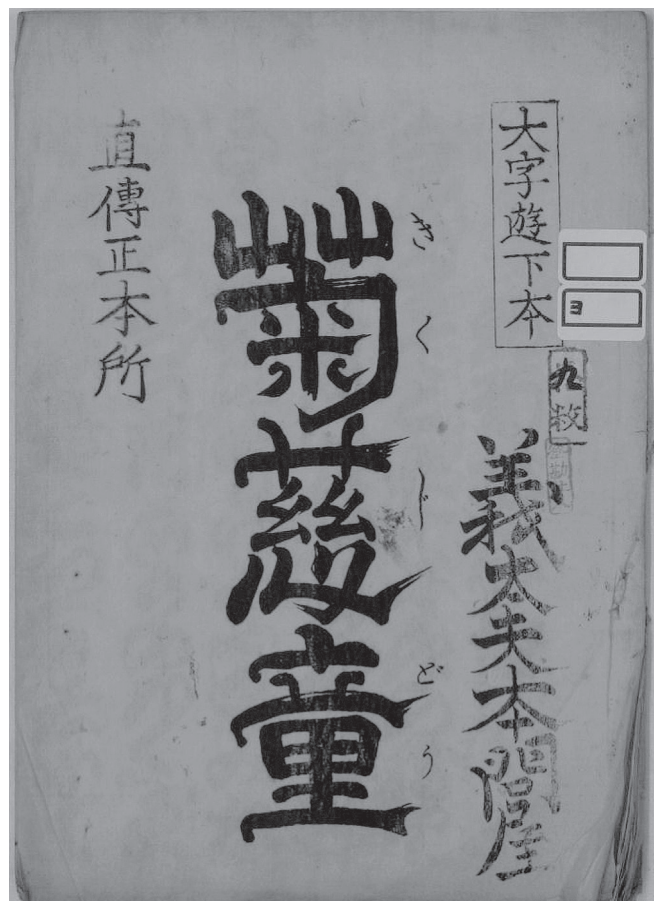


〔伊勢喜3D〕 西村公一氏「花王草紙楓短冊 三の切」



東京横山町二丁目  
伊勢屋喜助版

〔義太夫本問屋〕 豊竹呂勢太夫氏「乱菊枕慈童」



義太夫本問屋

表2 『本朝廿四孝』三段目切「勤助住家」対校表

- 一、本表は「勤助住家」の大字遊下本（改訂本文）と通し本（初演本文）間の異同をみるために作製したものである。各本ともに本文のみを翻刻した。節章・振り仮名は省略した。
- 一、「No」項には、異同の詳細を見やすくするために通し本のフシ落ちに拠って段落を設けた。
- 一、「遊下本」項には、江戸板六行本の本文を記した。
- 一、「通し本」項には、初板七行本の本文を記した。
- 一、異同のある箇所については、該当する本文をゴチック体で示し、対照しやすいように\*を付して二桁の洋数字を与えて、「No」項ごとに数えた。

No.	遊下本	通し本
01	へこそはかへらるゝ。 きそ山こたちあらくれて。無法むてつをしにせにてなも横蔵の筋かい道。わらんずのひもふりうづむ。餌竿。かたげて門口より。	へこそは帰らるゝ。 木曾山木立あらくれて。無法無徹をしにせにて名も横蔵のすじかい道。草鞋の日もふり埋む餌竿。かたげて門口より。
02	「母者人今もどり（孝三切壹オ）ました」と。声に老母がほやく顔。「ヲ、兄。（省略）此間はマアどこへいていやつたぞいの。」（ハアテ）こなわろはいの。おれが足でおれがあるくにどこへなと飛次第じやはい。ヤ、飛次でに返りがけ小鳥拾羽程取ふと思ふて。（孝三切壹ウ）ア、扱、顔も足も切る様なはいの。」「ヲ、ソリヤ、道理く。サ、マ、ちやつと上りやく。」「わらぢの紐。手づから母のじひ蔵も。足のゆを取りきげん取り。」「兄者人お足洗いましよ。」「ア、イヤ、コリヤ、孝行な兄がからだに。不孝な弟が手をさへるは（孝三切二オ）穢しい。ドレく、母が洗ふてやりましよ」と。一人につらく一人にはあまい女子のはなの先。どろずね突付。「エ、若イ女子の手のさはるはよい物じやが。干物の様な母者の手でへ、ヤモ、情のざいくはじやはい。ア、いか様おれはかうく（孝三切二ウ）な者じや。此小鳥もばんの夜食に。こな様に喰すのじやないコレコリヤ、おれがくふ氣じやはいハ、。とかくおれが口さへやしなへば。こな様シの氣が休るのふ母者人。」「ヲ、そふ共く、アノマアかうく。な事はいのホ、。サア、コレ、こたつに（孝三切三オ）火もして置いたぞや。」「ム、こな様が今まであたつてゐて。夫をまあ、何の恩にきせる事が有ぞいの。エ、こりやぬるい水こたつじやはい。」「イヤ、コレ、あんまりきつい火は逆上てわるいぞや。」「ソ、。夫レがたわけと言物じや（孝三切三ウ）はい。もふこなたもおつ付ケ火やへ行クからだ。けいこの為にコレマ、きつい火にも当つて置しやれいのふ。サアコレく、母者人。足もんで下あれ」と。ふみ出す両すねじひ蔵見兼。「ア、イヤ、ドレ私が」と立寄れば「又々、さし出るかこしやく者。（孝三切四オ）兄やこふか。く」となてさするほんそ息子のくはびら足。	「母者人今戻りました」と。声に（孝五十四オ）老母がほやく顔。「ヲ、兄待手兼ました。此間はマアどこへ行て居やつた。」（ハテ）こなわろは。おれが足でおれがあるくにどこへなと飛次第。飛づついでに返りがけ小鳥十羽程取ふと思ふて。（ナシ）顔も足も切る様な。」「（ナシ）道理く、サ、。ちやつと上りやく」と草鞋の紐。手づから母の慈悲蔵も。足の湯を取ル機嫌取ル。」「兄者人お足洗ひましよ」「イヤ、コリヤ、孝行な兄が体に不孝な弟が手をさへるは穢しい。（ナシ）母が洗ふてやりましよ」と。一人につらく一人にはあまい女子の鼻の先。泥脚突付ケ。「エ、若カい女子の手のさはるはよい物じやが。干物の様な母者の手で（ナシ）情の罪科じや。」「（ナシ）いか様おれは孝行者。此小鳥も晩の夜食に。（孝五十四ウ）こな様に喰すのじやない。焼て貰ふて、おれがくふ氣（ナシ）とかくおれが口さへ養へば。こな様の氣が休まるのふ母者人。」「（ナシ）そふ共く、あのマア孝行な事わいの（ナシ）。サア、火燵に火もして置いた。」「ム、こな様シが今迄あたつてゐて（ナシ）。何の恩にきせる事。エ、こりやぬるい水火燵じや。」「イヤ、あんまりきつい火は上つて悪しい。」「（ナシ）夫レがたわけといふ物。もふこなたも追ッ付ケ火屋へ行体。稽古の為に（ナシ）きつい火にも当つて置力しやれ。サア、足もんで下あれ」と踏出す両脚慈悲蔵見兼。「（ナシ）ドレ私が」と立ち寄れば「又々、差出るかこしやく者。兄やこふか」と撫さするほんそ息子のくはびら足。
03	「ア、迎もなら美しいおたねがもんでくれりやよいになア。ハア貴様こりや、子もりかい。そふしてアノ、峯松はマ、どうしたぞい。」「ハイおさしずの通りに。（省略）昨日主シが（孝三切四ウ）どこへやら。」「ム、捨てし	「ア、迎もなら美しいお種がもんでくれりや（孝五十五オ）よいに。ハア貴様（ナシ）子守か。（ナシ）峯松は（ナシ）どうした（ナシ）。」「ハイお差図の通り。思ひ切て昨日主シがどこへやら。」「ム、捨て仕廻ふたかよい事



<p>まふたか。ヲ、そりや、よい事じや。マア、二一ッたいおりや貴様にほれてゐるはい。時に幸とアノ、そのげめはてこねて仕廻ふ。跡に残た小俣の其次郎吉。エ、まじやまながきめ。しめころそふかと（孝三切五オ）思ふたれど。ア、あちな物で子と言物は。親よりちつと可愛物じやはい。又大きふ成たらおれに似て孝行にもしおろかと思ふて。貴様に育さすからは。イヤノウコレ、ひじ蔵。ひつきやうわがみと相合イの子じや（孝三切五ウ）はいの。とてものに女房も相合にする合点じやはい、コリヤ、お種。顔ふらずとムンといやいの。ガ、夫レを又いやと。言と。じひ蔵が大事がる、此母者に当るぞよ。エ、コレマしかくと。もましやれいの。エ、まだ火がぬる（孝三切六オ）いと恋のめしゆを。こたつに当るひどう者。もてあましてぞ。見へにける。</p>	<p>折ふし表に先走。「山本勘助殿に用事有て。大僧正武田信げん参上也」と案内に。思ひがけなき夫婦がふしん。「しさいあらん」と横蔵（孝三切六ウ）がおきもなをらずそらねいり。</p>	<p>「ハテ扱思ひも、寄ぬ大しんのお入。そつじには母もあはれまい。コリヤ、じひ蔵ソレもてなせ。イヤコレ、横蔵、ヨ、是はしたり。モ、何やら言、ね入たそふな。風引きやんな」と一間の障子。引立窺ふ表より（孝三切七オ）にほふとめきの。「かうさか、妻」としらせてうづ高き。雪のふところ稚子を。抱ていくゑの。しばのいほ。</p>	<p>「家来は先へ」とおいかへし。行義正しく打通る。いぶかしながら手をついて。「信玄公の御入とマ、思ひの外なる（孝三切七ウ）女中のお名はな。」「ヲ、成程御ふしん尤。偽ならぬ信玄公のコレ此ね顔にたいめんなされ」と。言に女房立寄て。「ヤア峯松か。戻つたか」とどび立計りの。胸おししづめ。</p>	<p>「ヲ、是は、御くろふ様や。そんならアノ、峯を貰ふて（孝三切八オ）下さりましたはお前様か。いかおせは様に。」「ア、イヤ、コレ、さう言まいぞ。かひの国へやしなふからはもはや一ツ国の世つぎ。則今日の信玄公。孝心ふかきじひ蔵殿。ことに軍術のたつ人と聞及び。しはん共おたのみ（孝三切八ウ）なされんためわざ。ヤコレ、見やしやんせ。（省略）あいらしい此信玄が抱へに來た。サお請、申されてマ、よからう」と恩をかけたる名將の。情はきもにこたゆれどとぼけた顔。「ア、イヤ、私は此在所の山がつ。すきくはのわざより（孝三切九オ）外、何にも存ぜぬ者を。軍術のしはんぞとは。マ、ハ、二もつたいない事おつしやりますはい。」「ア、イヤ、コレ、こちの人。『お前のきりやうを聞及んで』と有ルからは。マ、きついほまれな事じやぞへ。」「サ、ハ、さればいい。軍法の奥義（孝三切九ウ）もゆづり請。」山本勘介に成たれば。か、へられまい物でもなければナ。まだしやうもかへぬうち。軍術のイヤ、大將のと。ハ、そりや、モウ、山の芋をかばやきにする様な物じ</p>
<p>く。（ナシ）二一休おりや貴様に惚てゐる。時に。幸いと（ナシ）か、のそげめはてこねて仕廻ふ。跡に残つた小俣の其次郎吉。（ナシ）邪魔ながきめしめ殺さふかと思ふたれど。（ナシ）あちな物で子といふ物は親よりちつと可愛物じや。又大きふ成つたらおれに似て孝行にもしおろかと思ふて。貴様に育さすからはノウ、慈悲蔵。畢竟わがみと相合イの子。逆の事に女房も相合イにする合点。（ナシ）お種、顔ふらずとムンといやいの。夫レをいやと。いふと慈悲蔵が大事がる。（ナシ）此母者に当るぞよ。コレしかくと。揉しや（孝三切五ウ）れ、エ、まだ火がぬるいと恋の意趣を。巨燵にあたる非道者。持テ余してぞ見へにける。</p>	<p>折ふし表に先走。「山本勘助殿に用事有ッて。大僧正武田信玄参上也」と案内に。思ひがけなき夫婦が不審。「子細あらん」と横蔵が。起も直らずそら寝入。</p>	<p>「ハテ扱思ひも、寄ぬ大身のお入。卒爾には母も逢れまい。（ナシ）慈悲蔵（ナシ）饗せ。コレ横蔵。」（ナシ）是はしたり。（ナシ）何やらいひ、寝入つたそふな。風ひきやんな」と一ト間の障子。引立テ窺ふ表より。匂ふ留メ木の「高坂が。妻」としらせてうづ高き。雪の懷稚子を抱て。幾重の。柴の庵。</p>	<p>「家来は先キへ」と追かへし。行義正しく打通る。いぶかしながら手を付けて。「信玄公（孝三切六オ）の御入と（ナシ）思ひの外なる女中のお名は。」「ヲ、成ル程御不審尤。偽りならぬ信玄公の。コレ此寝顔に對面なされ」と。いふに女房立寄ッて。「ヤア峯松か戻つたか」と。飛立ッ計りの胸押ししづめ。</p>	<p>「ナシ」是は、御苦勞様や。そんなら（ナシ）峯を貰ふて下さりましたはお前様か。いかお世話様に。」（ナシ）鹿相いふまい。甲斐ノ国へ養ふからは最早一ツ国の世継。則チ今日の信玄公。孝心深き慈悲蔵殿。殊に軍術の達人と聞及び。師範共お頼みなされん為。わざ、（ナシ）見やしやんせコレ、愛らしい此信玄が抱に來た。お受ケ、申されて（ナシ）よからふ」と恩をかけたる名將の。情は肝にこたゆれどとぼけた顔で。「是はしたり。私は（孝三切六ウ）此在所の山がつ。鋤鋤の外、何にも存ぜぬ者を。軍術の師範なぞとは。（ナシ）二勿体ない事おつしやります。」（ナシ）コレ、こちの人。『お前の器量を聞及んで』と有ルからは（ナシ）きつい誉な事じやぞへ。卑下するも事に寄。」「ハテ軍法奥義は。」母様の伝授の巻を讀請て。「さればいい。夫レを貰ふて、山本勘助に成つたれば抱られまい物でもなければ（ナシ）未生もかへぬ中に、軍術の（ナシ）大將のと。（ナシ）そりや（ナシ）山の芋をかば焼にする様な物。名さへ慈悲蔵連虫さへ得踏殺さぬ者が。軍</p>

や<sup>き</sup>。名さへじひ蔵とて虫さへゑふみ殺さぬ(孝三切十オ) 者が。いくさ事とはノウくこはや恐しや<sup>き</sup>と。取ても付ぬ顔付に。からおり「はつ」と胸せまり。「ぶてうほうな女の使。おきにいらいでおつしやるのか。『どう有ても味方に付いてもらはねばならぬ』といふ其はけは。ききやうが(孝三切十ウ) 原に此すて子『山本氏』と有書付を頼に<sup>き</sup>拾ひ取は取たれ共<sup>き</sup>。(省略) <sup>き</sup>かんじんの乳に吞付ず。何ぼ抱てくつめても<sup>き</sup>。『あつちく』と指ざして<sup>き</sup>泣てばつかり。此大将に兵らうがなければ命も危し。サ<sup>き</sup>其兵らふをつ<sup>き</sup>(孝三切十一オ) けるはかりごととはじひ蔵殿。(省略) <sup>き</sup>甲斐の国へ味方に付<sup>き</sup>。夫婦してもり育ふと思ふ心は<sup>き</sup>ごんせぬか。此マアちつとの間に(省略) <sup>き</sup>どこもかもほそつた事を見やしやんせ。ア<sup>き</sup>道理でもあり。しんじつの母御の懷をはなれて(孝三切十一ウ) 他人の手にマ<sup>き</sup>何の育ふ。夜るは<sup>き</sup>ねず。ひるはうつく泣<sup>き</sup>ね入に。此<sup>き</sup>ねた顔のいちらしさ。ほんに見るめが悲しい」と。語る中より女房が。「ヲ、かはいやそうて<sup>き</sup>さんせう」と。わつと泣<sup>き</sup>出ス母親の。声に目覺ししがみつ<sup>き</sup>。(孝三切十二オ) すぐる乳ぶさは一人にて。この手柏の二おもて儘なら。ぬこそ恨なれ。

に出て人の首が。何ンとしてく<sup>き</sup>と。取つても付かぬ顔付きに。唐織「はつ」と胸せまり。「ぶ調法な女の使いお氣に入らいいおつしやるのか。『どう有ツ(孝五十七オ) ても味方に付いて貰はねばならぬ』といふ其訳は。桔梗が原に此捨子『山本氏』と有書<sup>き</sup>付ケを。印シに<sup>き</sup>拾ひ取りは取つたれど<sup>き</sup>。サアどふも力ラに及ばぬは<sup>き</sup>肝心の乳に吞<sup>き</sup>付カず。なんぼ抱て突<sup>き</sup>付ケても<sup>き</sup>。『あつちく』と指ざして<sup>き</sup>泣てばつかり。此大将に兵糧がなければ命も危し。(ナシ) <sup>き</sup>其兵糧を統る謀は慈悲蔵殿。お前の心に有<sup>き</sup>そふな事。 <sup>き</sup>甲斐ノ国へ味方に付いて<sup>き</sup>。夫婦して守育ふと思ふ心は<sup>き</sup>ごんせぬか。此マアちつとの間にコレ<sup>き</sup>どこもかも。細つた事を見やしやんせ(ナシ) <sup>き</sup>道理でも有。真実の母御の懷を離て。他人の手に(ナシ) <sup>き</sup>何んの育ふ。夜ルは得寝ず。昼はうつく泣<sup>き</sup>寝入に。(ナシ) <sup>き</sup>寝た顔のいぢらしさ。(孝五十七ウ) ほんに見るめが悲しい」と。語る中より女房が「ヲ、かはいやそふで<sup>き</sup>さんせう」と。わつと泣<sup>き</sup>出ス母親の。声に目覺ししがみ付<sup>き</sup>すぐるちぶさは一人にて。この手柏の二面。儘ならぬこそ恨みなれ。

一間に母の声高く。「コリヤくじひ蔵。子を<sup>き</sup>えばにして<sup>き</sup>味方に付<sup>き</sup>んと<sup>き</sup>。後ぎたない信玄に奉公しては武士が立まいぞよ<sup>き</sup>。ガ夫レ共にまた<sup>き</sup>軍法(孝三切十二ウ) 奥義もつたはらず。家の苗跡<sup>き</sup>をつぐ氣がななくサコリヤ<sup>き</sup>。かつて次だい」ともぎどうに。言捨障子。はたとさす。

一間に母の声高く。「コリヤく慈悲蔵。子供を餌に恩にかけて<sup>き</sup>味方にせんと<sup>き</sup>。後ぎたない信玄に奉公しては武士が立ッまい<sup>き</sup>去ながら。 <sup>き</sup>軍法奥義も伝はらず。家の苗跡を継氣がななくば。(ナシ) <sup>き</sup>勝手次第」ともぎどうに言捨障子。はたと指。

「ハアはつ」と立上り。我子を取て引放し。「しゆみせんさうかいの大おんを請れば迎。母のおんにはいつ(孝三切十三オ) かなく。信玄につかめる事存じも寄ラず(省略) <sup>き</sup>。コリヤく<sup>き</sup>女房。一たんすてた此伴に見るしい何ニほへる。ゑんに引かれ<sup>き</sup>知行取てはまつ代迄の名折。親子のゑんをさつぱりと切ッてしまへば信玄に。恩もなく又ざり(孝三切十三ウ) もなし<sup>き</sup>。ヤコレ<sup>き</sup>此竹も其元は竹に雀と放れぬ中。今ゑさし竿と成ル時は鳥のためには仇敵。事に寄ッたら親子兄弟てき味方となるも武士道。ア<sup>き</sup>イヤナニ<sup>き</sup>お返事は此通<sup>き</sup>りて御ざりますはい<sup>き</sup>。稚子つれてサ<sup>き</sup>、<sup>き</sup>早(孝三切十四オ) 歸られよ」と詞するどに言放す。

「ハアはつ」と立上り。我子を取て引はなし。「須弥山ン滄海の大恩を受クれば迎。母の恩んにはいつかなく。信玄に仕ゆる事存しも寄<sup>き</sup>す変改申ス<sup>き</sup>。コリヤ<sup>き</sup>女房。一ツ旦捨た此躬に見(孝五十八オ) 苦しい何ほへる。縁ンに引かれて<sup>き</sup>知行取ては末ッ代迄の名折レ。親子の縁をさつぱりと切ッてしまへば。信玄に恩もなく義理もなし<sup>き</sup>。是<sup>き</sup>此竹も其本トは。竹に雀と離れぬ中。今餌さし竿と成ル時は。鳥の為には怨敵。事によつたら親子兄弟。敵味方と成ルも武士道。お返事は此通<sup>き</sup>り<sup>き</sup>。稚子連して(ナシ) <sup>き</sup>早歸られよ」と。詞尖に言とはなす。

「ハア此上はもふ<sup>き</sup>力なし。とはいへかへつて御主人や。夫トに何と詞さへ。」泣々抱き立<sup>き</sup>出れば<sup>き</sup>。

「ハア此上は(ナシ) <sup>き</sup>力なし。とはいへ歸つて御主人や。夫トに何と詞さへ。」なくく抱立<sup>き</sup>出る<sup>き</sup>。

「コレのふ峯松一ツ世のわかれせめてマア。此乳が一口吞<sup>き</sup>したひ」としたう女房を引<sup>き</sup>退て。しおり戸びつ(孝三切十四ウ) しやり。表にも心は残る雪中へぐはんぜ。涙の。子を抱おろし。

「コレのふ峯松一ツ世の別れせめてマア。此乳が一口吞<sup>き</sup>したい」としたふ女房を引退て。枝折戸びつしやり。表テにも心は残る雪中へぐはんぜ。涙の子を抱おろし。

12 うちかけの下ぐりくりそへたるうしろ紐。かぎに結ぶはぎりのつな。神やすて置ク竹の子笠。いたいけつむりにうちきせて。「山本の氏をつぐじひ蔵殿(孝三切十五オ) を。軍術の師と頼んと是迄来給ふ信玄公。どふも此儘では歸られず。ぜび共『味方に付ク』といふ一言を聞くまでは。此信玄は其元トの門口を立さ

襦の下ぐりくり添たる後紐。垣に(孝五十八ウ) 結ぶは義理の綱神や捨置ク竹の子笠。いたいけつむりに打着せて。「山本の氏を継慈悲蔵殿を。軍術の師と頼んと是迄来給ふ信玄公。どふも此儘では歸られず。是非共『味方に付ク』といふ一言を聞く迄は。此信玄は其元トの門口を立さらず。雪に凍て死ス迄も<sup>き</sup>爰



らず。雪にこゑへて死ス迎も。爰に座をしめサ返事を待。大将の（孝三切十五ウ）命たすけふところそふと御しあん次第。よい返とうを頼入」と。じつをかけたる雪の笠思ひを。残し捨て行。

「ヤアそんならばんはまだいなぬか。」「コリヤくく。門にはたれもないサア誰もないはい。力又よしめてからがほかの他人。今そばへ（孝三切十六ウ）寄とナ。信玄の恩を請たに成て。アレ母の一言ンほぐに成がや。此實戸の外トへ一寸でも出るがいなや。夫婦のゑんも是ぎり」と。こしぎの紐かきがねをくゝるむごさは我ながら。いか成あくまおにかじやか。「六とふ（孝三切十六ウ）三りやくの望有ルじひ蔵。じひも情も知ツてはあれど母の詞は背かれぬ。どふでちぶさにはなれた物。迎もない命。こゑへて死ナば死二次第じやはい。そちもソレ其子をそでにしては。兄貴への義がサ立まいぞ（孝三切十七ウ）よ。ハア何かに紛れて大事のかうくおこたつたり。ドレく。うらへ行て雪の中の。筈ほつてしん上」と。みの笠取て打かづき。あつき親子の縁をたつ。くはふりかたげ。「此かんきにあら男でさへたまらぬ物。よたけもないから（孝三切十七ウ）だに。ア、子をするやぶは有レど。親の詞は捨がたき。うらのやぶへ」とふみわけける。雪より先に「いとし子の。埋れ死んふびんや」と。見合す顔にふる涙。みぞれあらそふぬれつばさ。しほる。夫トの後かけ。「いかに望有レば（孝三切十八ウ）迎。天にも地にも一人の子を。よふむごたらしうすてられた。いまの女中もきのつよい。置いていぬほどならば。おおいゑにねさしていんだがよいはいなく。可可愛やくひもじからふのに。ちつとの間など抱たい」と。任（孝三切十八ウ）ぬつらさ次郎吉を。やうくそつと下に置きさし足。ながらにはにおり。

14 覗けば門にしよんぼりと。「ヤレばんよく。夫レがマア何と命が有物」と。明んとすれどかきがねに。ぢやうのかはりの「真結びはむごやつれな」とあ（孝三切十九ウ）せる程。雪にしめつて明ぬ戸に。「ちゝたいく」もたへぐの。風にうたてや次郎吉が。わつと泣声「ハア悲しや」と。又かけ戻り抱上て。「雪やころゝんあられやころゝんこは。そも何たる因果ぞや。此子にくひじや（孝三切十九ウ）なけれ共。我子に乳が呑したい。コレくく。ちつとの間。寝入てたもの」と。心もそらはかきくらし。又ふりしきる白ラ雪に外に。泣声八かんちごく。剣を呑より身にこたへ。思はず知らずまろびおり。「くだけよわれよ（孝三切廿ウ）の念力に。はづるゝ戸より身は先へ「コリヤばんよく」と我子をはだに抱きしめりうてい。こがれ泣声に。

15 からおりこかげをつつと出。「信玄公を抱上。乳ぶさをふくめまいらすからは。じひ蔵は最早此方の味方（孝三切廿ウ）夫トにしらせて悦ばせん」と。いさんで館へ立帰る。

16 はつとおたねも心付キうろ付ク隙に何国より。くはいけんでふど峯松がきもさきつら抜いきたへたり。「コハ何事」と驚中。次郎吉引立横蔵が。一間をさして欠

に座をしめ（ナシ）返事を待ッ。大将の命助ケふと殺さふと御思案次第。よい返答を頼入ル」と。しづをかけたる雪の笠思ひを。残し捨て行。

「ヤアそんならばんはまだいなぬか。」「コリヤくく。門には誰もいない。し居てからがほかの他人。今傍へ寄ルとナ。信玄の恩を受ケたになつて。（ナシ）母の一言ン反古に成ル。此實戸の外へ一寸でも出るがいなや。夫婦の縁も是切」と。（孝五十九ウ）腰さぎの紐をくゝるむごさは我れながら。いかなる悪魔鬼か蛇か。「六韜三略の望ミ有慈悲蔵。慈悲も情も知ツては居れど。母の詞は背かれぬ。どふで乳房に離た物迎もない命。凍て死ナば死二次第。そちもソレ其子をそでにしては。兄貴への義が立ぬぞ。ハア何かに紛れて。大事の孝行怠つたり。ドレ裏へ行て雪の中の。筈掘て進ぜふ」と。簀笠取て。打かづきあつき親子の縁をたつ。鉄ふりかたげ。「此寒氣に荒男でさへたまらぬ物。よたけもない体に。ア、子捨る敷は有レど。親の詞は捨がたき。裏の敷へ」と踏わけける。雪より先きに「いとし子の埋れ死ん不便や」と。見（孝五十九ウ）合す顔にふる涙。みぞれ争ふ。濡翹しほる。夫の後かけ。「いかに望ミ有レば迎天にも地にも一人リ子を。よふむごたらしう捨られた。今の女中も氣の強い。置いていぬ程なら。おおいゑに寝さしていんだがよい（ナシ）。こがはいやくひもじからふのに。ちつとの間など抱たい」と。任せぬつらさ次郎吉を。漸そつと下に置き。さし足。ながら庭におり。

覗けば門にしよんぼりと。「ヤレばんよく。夫レがマア何ンと命が有物」と。明んとすれど鏝に。錠のかはりの「真結びは。むごやつれな」とあせる程。雪にしめつて明カぬ戸に。「ちゝたいく」もたへぐの。風にうたてや次郎吉が。わつと泣ク声。「ハア悲しや」と。又かけ戻り抱上て。「雪やころゝん霞やころゝん。六十ウこはそも何ンたる因果ぞや。此子憎いじやなけれ共。我子に乳が呑したい。コレちとの間。寝入ッてたもの」と。心も空は。かきくらし又。ふりしきる白ラ雪に外に。泣ク声八寒地獄。剣を呑より身にこたへ。思はずしらず転びおり。「碎よわれよ」の念力に。はづるゝ戸より身は先キへ。「コリヤばんよく」と我子を肌抱きしめ流涕。こがれ泣ク声に。

唐織こかげをつつと出。「信玄公を抱上ケ。乳房をふくめ参らすからは。慈悲蔵は最早此方の味方。夫トにしらせて悦ばせん」といさんで館へ立帰る。

はつとお種も心付キうろ付ク隙に何国より。懐剣てうど峯松が肝先貫き息絶たり。「コハ何事」と驚く中チ。次郎吉引ツ立横（孝六十ウ）蔵が。一ト間をさしてかけ入レ

	17	18	19	20	21	22
入ば。	「ム、扱は（孝三切廿二オ）我子のがいに成ルと〇横蔵のしはざじやの。ぎりも情ももふ是迄。敵を取らいで置ふか」と。死がいを小脇にかい込で。常にはよはき女氣もうらみにつよき力帶奥へ	へ窺ふ忍び足。 早日もくれに。ちか付キ（孝三切廿一ウ）て。かねかうくの道ぞ迎。古きためしの跡をおい。子故のやみに白たへの道も。涙に見へ分ず。	「なんぼほつても竹の子が有ふ様はなけれ共〇。親を思ふ一心をあはれみ。天よりさづくる事もや」と。心にこめて一尺（孝三切廿二オ）二尺。そこは白羽のはと一羽。飛でおりしも「かいなれし。鳥も心のあるやらん」と。	又ほりかへせば又一羽友呼ヒ。さそふ生るいの。有様つくぐ打守り。「ハツアあやしや〇。諸鳥塙に帰る頃。一羽ならず二羽三羽集り来るは。ムハハッア（孝三切廿二ウ）誠に〇へいき有ル地には鳥ぐんをなすと聞ク〇。我カ父は日本の軍師。此所にて世を去給ふ。一生そらんじ置れたる六とう三りやくのひみつの巻。此下にうづみ置れしやらん。扱は我ガ孝心天に通じ。鳥るい（孝三切廿三オ）是をしらせしか。ハハく。〇ハア有がたし忝し」と。心いさんでほううかつ。雪もさんらん村雀ばつと立たる藪の中。窺ふ兄がつらたましい。	「ハテ合点の行ぬ。〇野に伏せぜ有ル時は帰雁行を乱る。ゆだんの塙を窺ふ悪鳥。殺そう（孝三切廿三ウ）と生そふと手の内の雀。慥ニ手ごたへこの下を。」「コリヤ待テじひ蔵。うづんで有ル伝授のくはん我にはやらぬ。兄が出世のたねにするはい。」「兄者人そりやお前無理でござりましようぞへ〇。」「サイヤイ。無理いふが（孝三切二十四オ）兄の威光。あほうがらすのかうくごかし。じやまなうぬからや〇〇仕廻て取ル。」「どつこいそふはへ〇成りますまい。苗氏をつぐは此じひ蔵。」「見事我レが。」「ついで見せう。」「こしやくな退」とすぎと蹴。落花みぢんの雪（孝三切二十四ウ）飛で。掘出す箱の二人ンが争ひ。道と非道の二筋をすべつこけつ掴合。はづみにがはと取おとし。いけにざんぶと。水けふり騒むら鳥兄弟も「ふしぎ」と。見とる、後より。障子ぐはらりと母の老女「兩人待。（孝三切二十五オ）兄弟共〇武士となり。主人を取べき時節とうらい。雪の中の竹のこをほり出したるじひ蔵。今こそは、が心に叶ふた。通孝行ヲ、〇出かしたく。そちはソレ〇〇さいぜん言付たとふりうら口四方にきを付よ。ナサ〇合点（孝三切二十五ウ）か。」「ハハア〇〇いさいせうち仕る」と。かけ入弟横蔵は。池中の箱を引上て母の。前に〇差し出せば。	「サアく兄そなたには分てよい主を取するぞ〇。則主人より下されし装束も改させん」と。しづく奥のしらだいに無紋の上下（孝三切二十六オ）白小袖。三方には〇九寸五分。我子の前に直し置ク。
ば。	「ム、扱は我子の害に成口と〇横蔵の所為じやの。義理も情ももふ是迄。敵を取らいで置カふか」と。死骸を小脇にかい込で。常には弱き女氣も恨につよき力ラ帶。奥へ。	へ窺ふ忍び足。 早日も暮レに。近カ付キて。鐘孝行の。道ぞ迎。古ルき例の跡を追。子故の闇に白妙の道も。涙に見へわかず。	「なんぼ掘ても筈が有ふ様はなけれど〇。親を思ふ一心を憐。天より授る事もや」と。心に込めて一尺二尺底は白ラ羽の鳩一チ羽飛ンでおりしも「飼なれし。鳥も心の有ルやらん」と。	又掘りかへせば又一羽友呼ヒ。さそふ生類の。有様つくぐ打守り。「最早入相イ〇。諸鳥塙に帰る頃一チ羽な（孝六十一オ）らず二羽三羽。集り来るは。ハテ心得ず。誠や。〇兵器有ル地には鳥群をなすといへり〇。我父は日本の軍師。此所にて世を去り給ふ。一生暗じ置かれたる。六韜三略の秘密の巻キ此下に。埋置かれしやらん。扱は我孝心天に通じ。鳥類イ是をしらせしか。（ナシ）〇ハア有がたし忝し」と。心いさんで掘穿。雪も散乱村雀ばつと立たる藪の中。窺ふ兄が煩魂。	「ム〇野に伏せ勢有ル時は帰雁行を乱る。油断の塙を窺ふ悪ク鳥。殺さふと生さふと手の内の雀。慥に手ごたへ。此下を。」「コリヤ待テ慈悲蔵。埋で有ル伝授の一チ巻ンわれにはやらぬ。兄が出ツ世の種にするはい。」「兄者人そりやお前無理でござりましよう〇。」「サイヤイ。無理いふが兄の威光。あほう鳥の孝行ごかし。邪魔なうぬから（ナシ）〇〇仕廻ふて取ル。」「どつこいそふは（ナシ）〇成ますまい。苗氏をつぐは此慈悲蔵。」「見事われが。」「ついで見せう。」「こしやくな退」と鋤と蹴。落花みぢんの雪とんで。掘出す箱の二タ人が争ひ。道と非道の二タ筋をすべつこけつ掴あふ。はづみにがはと取落し。池にざんぶと。水煙さはぐ群鳥兄弟も「ふしぎ」と。見とる、後より。障子ぐはらりと母の老女「兩人待テ。兄弟共に〇武士と成り主人を取ルべき時節到来。雪の中の筈を掘り出したる慈悲蔵。今こそ母が心に叶ふた。天晴孝行（ナシ）〇出かしたく。そちは（ナシ）〇最前ン言付けた通り。裏口四方に気を付ケよナ〇合点か。」「ハアハ〇委細承知仕ツ（孝六十二オ）る」と。かけ入弟横蔵は。池中の箱を引き上て母の。御前ンに〇差出せば。	「サアく兄。そなたにはわけてよい主を取ラする〇。則チ主人より下されし。装束も改メさせん」と。しづく奥の白ラ台に。無紋の上下モ白小袖。傍に三方〇九寸五分。我子の前に直し置ク。



<p>23</p> <p>「母者人コリヤ何じやいの。」いやさコレ此白装束は何の為じやいの。」「ヲ、夫レこそはめいどののれき。今そちが首討て身かはりに立ルのじやはい。」「エ、イ。どめつそつな事(孝三切二十六ウ)言んすはいの。」此首を身代りとは。そりやマア誰し。」「ヲ、今日そちが主人と頼みし長尾三郎景勝公の御身代り。(省略)武田信玄越後のけんしん。むろ町の御所において。互に『我子の首討て心ていを顕はさん』(孝三切二十七ウ)とけいやく有よし。最前そちを召抱んとて来られし景勝のめん体そちが顔に生つし。『扱は』と母がすいりやうたがはず。箱の中に残されしコレ此一ッ通に。いさいの様子つまひらかにしるされたり。</p>	<p>「母者人。こりや何ンじや。」いやさコレ此白装束は何ンの為。」「ヲ、夫レこそは冥途の公服。只今そちが首打て。身かはりに立ッるのじやはい。」「エ、イ。めつそつな事計り。此首を身かはりと。そりやマア誰しが。」「(ナシ)今日そちが主人と頼みし。長尾三郎景勝公の御身がはり。聞及ぶ武田信玄越後謙信。室町の御所において。互に『我子の首討ッて。心ン底を顕はさん』と契約有ル由。(孝六十二ウ)最前ソちを召シ抱んとて来られし。景勝の面体そちが顔にさも似たり。『扱は』と母が推量違はず。箱の中に残されし(ナシ)此一ッ通に。委細の様子詳に記されたり。</p>
<p>24</p> <p>「ぜひに及ばぬもふ是迄」と。腹きり刀取より早く右の眼に突こんだり。遺の老母もふしん顔。(省略)「ヤコレく母人。さかげ勝に似たる此つらに。さかうきず付てさうがうかへれば。身がはりのやくには(孝三切二十九ウ)もふ立ッまい今日只今父が苗氏を請つぎ。山本勘介晴義。軍法奥義をむねにたくはへ。三りやくの巻より太切な此命。ヤア謙信のけらい直江山城。言聞すさい有リ夫へ出よ。」と呼ばれば。一間の内よりさじひ(孝三切三十ウ)蔵が。ゆうびの骨がら長上下。さはやかに出立て。</p>	<p>主従と成ルからは命は君に捧し物。武士の因果と諦て。潔ふ死んでくれ。」「コレくくよふ思ふても見やしやれ。いかに主じや迎まだ知行もくれぬ中ちに。殺さふといふ様な胸欲な主が有ル物か。イヤくもふ此主従はとんと変改。」「イヤさふは成ルまい。日外諏訪の森において殺さるゝそちが命。助ケ置かれし景勝の恩忘しはせまい。其時の情は今身がはりに立ん為。智謀のわなにかうりしとはしるるか。恩をしらねば人ではないぞよ。警逃ても此家の(孝六十三ウ)ぐるりは。景勝の家来取巻一寸も通れはない。切ッ腹するか。」</p> <p>但シ母が手にかけふか。(ナシ)「ヤアなんと」と話かけられ。籠中の鳥の目はうろく。透を見て逃ケ出す。膝口はつしと手裏剣に尻居にどつさり詮方なく。</p>
<p>25</p> <p>「某長尾の家臣たる事(省略)母人にはひそかに語り。兼て申請たる兄者人の命。げんさいの子を捨たるも。否応言ハさぬ命の無心。去ながら眼をくつて身を全ふ(孝三切三十ウ)せんず。大丈夫の魂。あつたら勇士を殺すは残念。此上は長く謙信に仕へ忠きんをつくさるべし」と。いはせもあへず(省略)「ヤアさおろか。謙信づれが家来には汝等が分相応。身が主にはハ、ヤモ釣合ぬ。誠山本勘助があが(孝三切三十一ウ)むる主人は忝くも。足利十三代の公達松寿君。是へいざなひ申されよ」と。詞の下に高坂が妻のからおり次郎吉をかしつき申せば山城親子。「ハ、ハ、ハはつ」と計り飛しさり恐れ。入たる計りなり。</p>	<p>「是非に及ばぬもふ是迄」と。腹切刀取ルより早く右キの眼に突込ンだり。遺の老母も不審顔。流るゝ血を押し拭ひく。(省略)「母者人。景勝に似たによつて身がはりに立テたがる。小面倒な此頼に。さかう疵付て相好かへれば。もふ身がはりの益には立ッまい。今日只今父が苗氏を受ケ継。山本勘助晴義。軍法奥義を胸に貯。三略の巻キより太切な此命。ヤア謙信の家来。直江山城ノ助(孝六十三ウ)種綱。夫レへ出よ言聞カ子細有」と。呼はる声に一ト間の内。『見参ぞふ』と慈悲蔵が。優美の骨柄。長上下さはやかに(ナシ)。</p> <p>「某長尾の家臣たる事深く包て古郷へ帰りし其子細。母人には密に語り。兼て申受ケたる兄者人の命。現在の子を捨たも。否応言ハさぬ命の無心。去ながら。眼をくつて。身を全ふする。大丈夫の魂。あつたら勇士を殺すは残念。(ナシ)長く謙信に仕へ。忠勤を尽さるべし」と。いはせもあへず。あざ笑ひ。(ナシ)「さおろか。謙信づれが家来には汝等が分ン相応。身が主には(ナシ)釣合ぬ。誠山本勘助があがむる主人は忝くも。足利十三代の公達松寿君。是へ誘ひ申されよ」と。(孝六十四ウ)詞の下に高坂が。妻の唐織次郎吉を傳申せば。山城親子「ハアハはつ」と計り飛しさり。恐れ。入たる計りなり。</p>

26	勘介は「真中にどつかと直り。(孝三切三十一ウ)「ヤアく、山城。今汝が打たるしゆりけんは。先年某室町の館にて(省略)しづの方をばい取立退折から。景勝目当てに打つたる小づか。サ、只今我手へ慥に落ク手。我レ山本の苗氏を引おこさんとぐんがくに心をこらす所に。武田(孝三切三十二オ)信玄大僧正姿をやつし只一人蜜に庵へ来らせ給ひ。『足利の行末おぼつかなし。汝我カ力と成て事を謀』と。名將の一言しんこんにてつし。『ハ、ア畏り奉る』とそくざのれうしやう。弓矢のちかひ。」	(ナシ)「真中にどつかと直り。『ヤイ、山城。只今打たる此手裏剣は。先年、室町の館にて此公達の御母。我、賤の方を奪ひ取立退折から。景勝目充に打かけたる我小柄。』(ナシ)「只今我手へ慥に落手。(ナシ)山本の苗氏を引き興さんと軍、学に心をこらす所に。武田信玄大僧正姿をやつし只一人。密に庵へ来らせ給ひ。『足利の行末、覚束なし。汝我力と成て事を謀れ』と。名將の一言、心魂に徹し。『ハ、ア畏奉る』と。即座の領承、弓矢の誓。」
27	「ム、なる程、其時に此母も只(孝三切三十二ウ)人ならずと思ふたが。扱は武田信玄公と主従のけいやく仕やつたの。」「ヲ、サ、大魚は小池に住ず。鶴は枯木に巢を組マズ。智勇兼備の大將に頼まれ申せし身の面目。直ク様都にはせのぼり。うかがう時しも館のさう(孝三切三十三オ)どう。義晴公にはあいなき御最期。『ハッアせんかたなし。くわいたいのしづの方人手には渡さじ』と。忍び入て御家の。しらはた諸共もり奉り。立退館は八方にてうちんたいまつ。ちるはなの。都を跡に遠チ近チの雪のしなの路(孝三切三十三ウ)爰かしこ。月の。さらしなの片山里に。人知らずかくまふとはさしもの母も御存じ有まい。」「ヲ、知らなんだく。(省略)「そふして御母しづのかた御在イ所は何国ぞ。」「サ、どぶじやく。」「ハア。申も便なき事ながら。うき事つもる産(孝三切三十四オ)後のなやみ。はかなく此世をさり給ふ跡に残しあの公達。(省略)「我子と偽り。『コリヤイ、次郎吉よ。』と呼度々のもつたいなさ。弟嫁が乳を幸。二人が中の子を二捨させ。(省略)「養育とする(省略)「我力儘無法。一チ物ツ有りと早悟られし(孝三切三十四ウ)母人の。『雪の中の竹の子をほつて見よ』とはハ、アあつばれめいさつげに勘介が。母人ぞや。」	「ヲ、其時に此母も只人ならずと思ふたが。扱は(孝六十四ウ)武田信玄公と主従の契約仕やつたの。」「ヲ、サ。大魚は小池に住ず。鶴は枯木に巢をくはず。智勇兼備の大將に頼まれ申せし身の面目。直様都に馳登。窺ふ時しも館の騒動。義晴公はあへなき御最期。『ハッア詮方なし。懐胎の賤の方人手には渡さじ』と。忍び入て御家の。白旗諸共守り奉り。立のく館は八方に提灯松明。ちる花の。都を跡に遠近の雪の信濃路爰かしこ。月の。更科の片山里に。人しらずかくまふとは。さしもの母も御存知有まい。」「(ナシ)「しらなんだくコレく。そふして御母賤の方の在所は何国ぞ。」「サ、どぶじやく。」「ハア申ヌも便なき事ながら。うき事つも(孝六十五オ)る産後の悩はかなく此世を去り給ふ。跡に残りしあの公、達勿体なくも我子と偽り。『(ナシ)「次郎吉よく。』と呼度々の空恐ろしさ口惜さ。弟嫁が乳を幸。我子を二捨させ。他家のあの子を養育とする我心底。我儘無法は一チ物有と悟し老母。『雪の中の笋を掘て見よ』とは。(ナシ)「天晴明察実勘助が母人ぞや。」
28	穢をいとひ今日迄埋置イたる雪ツ中ウのたかな是に有」と。はこおつ取ツてさし上る。源家正とう武將の白はた。「神明を頭にいたく(孝三切三十五オ)義兵の旗上。けん信親子只今より此勘介がはつかに付ケとサコリヤ。立帰ツて言聞せよ」と。一つの眼に天がした見下タす。ふじの山本勘介。三国無双の弓取也。	穢れを厭ひ今、日迄。埋置たる雪中の笋是に有」と。箱押ツ取ツて差上る源、家正統武將の白、旗。「神、明を頭に戴く義兵の旗上ケ。謙信親子只今より此勘助が幕下に付ケと(ナシ)「立、帰つていひ聞せよ」と。一、つつの眼、コに天が下見下す富士の山(孝六十五ウ)本勘助、三国無双の弓取り也。
29	(ナシ)	山城大きに感し入。「信玄景勝不和成ルも。互に心を疑ひあふ。忠臣割符を合すがごとし。君御在家しる、上は。景勝公の言訳立ツて。身がはりにももふ及ばぬ。追ッ付ケ両家和睦の基。」「成ル程く。最前、裏で直キ々に様子を聞た。信玄公と勘助様。いひ合せの有ル事は。一家中へもお隠し有レば。夫ト高坂も露しらず。抱に來た慈悲藏殿は。思ひも寄ぬ長尾の御家來。君の御事初めて聞た使イの面目。此上なし」と悦びの。
30	(ナシ)	「中に歎きは一人りの孫。「かう心がとけるなら仕様模様も有ふ物。此が偏屈から。信玄方の恩受ては立たぬといふた一、ちで。」「(孝六十六オ)直江が手にかけ殺しやつたは。則チ母が殺した同前。コレく嫁女赦して」「ア、勿体ない。ちぶさに離て死ヌ命。思はずしらずお主様の。お益に立ツたも因縁」と泣ぬ顔す

母は一間の一卷たづさへ。「不孝と見へし勘助は却て父の名(孝三切三十五ウ)を上る。廿四孝にまさりし孝。器量もそろふ二人りの子供。軍法伝授の此一卷。サ<sup>三</sup>てうたいしや」とさしおけば。勘介取ておしいたゞき。「ハ、<sup>三</sup>父のめうじを給はれば勘介が身のきぼは立ッ。母方の氏をつぐ弟直江が母への(孝三切三十六オ)孝。其とくによつて此一卷は其方に下さるゝぞ<sup>三</sup>。御恩を忘れずなを此上孝行怠る事なかれ。景勝の忠臣は我が胸中にてつしたれ共。心へがたきは親謙信。君に弓引逆心ならば。汝もしたがふサ<sup>三</sup>心やいか(孝三切三十六ウ)に。」<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>言にや及ぶ。我ガ子を切ッて二君に仕へぬ此山し。兄とは言ハさぬ敵味方。此三略の恩を仇一合ッせん仕らん。」<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>ヤ<sup>三</sup>さも有らんム、<sup>三</sup>出かす。我レ又主君に仕ふる甲斐の。天目山にたて籠。出合所は川中島。うんに(孝三切三十七オ)乗じて越後の出城。すはの城までおし寄。くさも目ざましき勝負をせんぞよ<sup>三</sup>。」<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>ウ<sup>三</sup>いさぎよし去ながら。仮にも一ッたん景勝に。請たる恩はサア<sup>三</sup>何とく。」「ヲ、日ッ月ッにたとへたる。右の眼コは越後へしん上。二タ心なき勇士のかため。(孝三切三十七ウ)は、にあたへしかたしのげた。かげ勝のこゝろざし。すつるは武士の道ならず」と。ひたりのあしにしつかとはきおりたつ。にはのたかひくも。みちはゆがまぬゆみとりの。すぐなるたけのねもとより。はつしと(孝三切三十八オ)きつたるはたぎぼは。せいうんめでたき大しやうの。さそうはかしこき御衆がほ。ねふれるはなの。死かほに。だいてゆぶつてすかしても。かへらぬむかしもろこしの廿四かうをまのあたり。もうそうちくの竹(孝三切三十八ウ)の子は。ゆきときへゆくむねの中。こほりの上のうを、とる夫レはわうしやう。これはたせうのゑんと縁。こがねのかまよりあいがたき。その子たからをきりはなす弟がじひのどうよくと。兄がふかうの孝(終丁オ)行はわが日のもとにひとりのゆうし。いまに。名だかきやまもとうち。ただのいへのいしずへとじせきを。世々にのこしける(終丁ウ)

るいぢらしき。

母は一ト間の一チ巻ン携へ。「不孝と見へし勘助は却て父の名を上くる。廿四孝にまさりし孝。器量も揃ふ二人りの子供。軍法伝授の此一チ巻。(ナシ)さ頂戴しや」と差置ケば。勘助取ッて押シ戴き。(ナシ)父の苗氏を給はれば。勘助が身の規模は立ッ。母方の氏をつぐ弟直江が母への孝。其徳によつて此一卷は。其方に下さるゝ<sup>三</sup>。御恩を忘れず猶此上。孝行怠る事なかれ。景勝の忠臣は我胸中に徹したれ共。心得がたきは親謙信。君に(孝三十六ウ)弓引ク逆心ならば。汝も従ふ(ナシ)心やいかに。」「(ナシ)いふにや及ぶ。我子を切ッて二君に仕へぬ此山城。兄とはいはさぬ敵味方。此三略の恩を仇。一ト合戦仕らん」<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>さもあらん(ナシ)出かす。我又主君に仕ふる甲斐の。天目山に楯籠出合所は川中島。運に乗じて越後の出城諏訪の城迄押シ寄セ。くさも目ざましき勝負をせんず<sup>三</sup>。」<sup>三</sup>ホ、<sup>三</sup>潔し去ながら。仮にも一旦景勝に。請ケたる恩は(ナシ)何とく。」「ヲ、日ッ月ッにたとへたる右キの眼は越後へ進上。二タ心なき勇士のかため。母にあたへしかたしの下駄。景勝の志捨るは武士の道ならず」と。左りの足にしつかとはきおり(孝六十七オ)立ッ。庭の高ひくも。道はゆがまぬ弓取りの直なる竹の根もとより。はつしと切ッたる旗竿は。聖運目出たき大將の。さそふは賢き御笑顔眠る花の。死ニ顔に抱てゆぶつてすかしても。返らぬ昔唐土の廿四孝を目のあたり。孟宗竹の筍は。雪ときへ行胸の中チ。氷の上の魚を取ルそれは王祥。是は他生の縁と縁。黄金の釜より逢がたき。其子宝を切り離す弟が慈悲のどうよくと。兄が不孝の孝行は我日の本に一人りの勇士。今に。名高き山本氏。武田の家の礎と事跡を。世々に残しける(孝六十七ウ)